

い。

ト戴く。こちらより靈山、東の家體より窺ひ居る。ト奥より

内記 内記さま。殿様が召します。内記さま。ト内記びつくりして

内記 合點ぢや。今そこへ参るぞ。ア、コレ、折わるう。此ま、座敷へ持つて往ては危ないもの。暫くどこぞへ、隠したいものぢやが。

ト邊りを窺ひ、花生けへお袖判を隠し、形を繕ふうち

内記 内記さま。どうでござります。早うお出でなされい。

内記 今参る。どりや往かうか。ト奥へはひる。

ト靈山最前より見て居て、此時そろ／＼出で、右花生けの中のお袖判を出し、押し戴き、懐へ入れ、物をもいはず、笑みを含んで、元の障上家蓋へはひる。障子しやんとさす。ト奥はた／＼にて、久秋、九重採み合ひながら出で

久秋 イヤ、きかぬ。

九重 マア、譯を聞かせて下さなせ。橘さま、ちやつと来ていなア。ト花桶出で

花桶 あわたしい。何事でござんすぞいなア。ト二人を引分ける。

久秋 花桶、聞いてくれ。夜が明けると、いなねはならぬ譯は知つて居ながら、今宵ぢうに身請けしられて、外へ行くといふによつて、それできかぬのぢや。

花桶 そりやお道理でござんす。コレ、九重さま、こりやマア、どういふ事ぢやぞいなア。

九重 何のいな、わたしもどういふ事ぢや知らぬけれど、今、親方さまが、花桶も、九重も、俄かに身請けの客があつて、談合極めて身の代受取つた、今宵ぢうに先き様へやりますると、殿様へ、附け答へしに來たのを、わしが何ぞ知つた事のやうに、わしやどうせうぞいなア。ト泣く。

花桶 ムウ、そんならお前も、わたしも、一しよに請け出すというて、……こりやマア、何の事ぢやぞいなア。

久秋 何のいやい。皆あいつが拵へ事ぢや。嘘ぢや。ト才兵衛出で

才兵 ホウ、花桶、こゝにか。さつきから尋ねて居た。さる御大盡様が二人共に身請けして、今宵ぢうに連れて行くと、談合も極り、お金も受取つた、お客さまへ断りいうて、仕度さつしやれ。早う。

花桶 ア、コレ、親方さま。そりやマア、何の事でござんす。本人に得心もさせず、何ほ親方のかうけでも、こればかりは、めつたに氣儘にも成るまいわいな。

九重 假令そつちへ行くにしてからが、今宵ぢうは、揚げのお客に任した身、夜が明けぬ内は、行く事はならぬわいの。

才兵 エ、、どういや斯ういふと、そんなら夜が明けると、其儘引揚げるが合點か。

花橋 そりや其時の事いな。

才兵 エ、世話を掛ける。そんなら夜明けまで待つて遣る。其時いじむじは言はさぬぞよ。ヤレ、いそがしやく。(ト才兵衛奥へはひる。)

花橋 一寸遁れにいうては遣つたが、こりやマアどうしたものであらうぞいなア。

久秋 そんなら身請けはほんまの事か。

九重 ほんまの段ではない。今、聞かしやんす通りの事。どうぞよい思案を、出して下さんせいナ。

久秋 サア、よい思案というては、最前順慶が持つて來た金を親方へ渡し、こつちへ貰ふより外はない。

九重 そんなら早う其金を、親方へ渡して、花橋さまも一しよに

花橋 どうぞ身請けして下さいなア。(ト奥より侍ひ一人出て)

侍 申し上げます。小座敷に積み置きました最前の金箱、何者やら盗み取りましてござりまする。

唯今、詮義眞ッ最中、それゆゑお届け申し上げます。(ト言ひ捨て侍ひはひる。)

三人 ヤア、。(トびつくりする。)

久秋 ナニ、最前の金箱が、ホイ。(トどつかりと坐る。)

花橋 九重さん、

九重 橘さん、

三人 こりやマア、どうしたものであらうなナ。(ト奥より)

久次 其思案貸してやらう。(ト久次、つぼ折にて出る。)

花橋 ヤア、お前は。

久秋 思ひも寄らぬ久次公。いつの間に御入來なされたなア。

花橋 シテ、其御思案は。

久次 一人ながら、身共が今宵中に、身請けしてやらう。

三人 エ、。

久次 氣遣ひするな。どつちへも遣りはせぬ。身が身請けして取らすわヤイ。

花橋 そんなら、眞實あなたが。

久秋 エ、忝い、兄上様。二人共に、ちやつとお禮を。

二人 エ、有り難うござりまする。

久次 悦べく。二人ながら、今宵の内に身請けして、抱いて寝る。

花橋 エ、そんなら、二人を請け出して、やつぱりお前が、

久次 ハテ、知れた事。脊丈積んで身請けして、外へやつてよいものか。久次と聞いたら二人共又逃げをるであらうと思つて、忍んで来た廊の内、否でも應でも身請けしたれば、もう叶はぬ。向後二人ながら、心が心に随へく。

久秋 そりや兄上、あんまり御無體。

久次 何が無體。今宵中に請け出されて行かにならぬと、三人がと、吠えるが笑止さに、見ず知らぬ所へやるも不便と思ひ、身が請け出して抱いて寝るに、何が不足ぢや。

九重 どのやうにおつしやつても、否てござんす。

久次 否でも應でも、此久次が目に止つた二人は果報者。張りのある程なほ惚れた。

ト二人が手を取る。花橋、九重振切つて

二人 エ、うるさい。傍へ寄つて下さりまするな。

久次 久秋、九重と縁を切り、心が心に随はせい。

久秋 其儀は、

久次 兄の詞を背くか。

花橋 そりやあんまり

久次 是非随はずば、二人共にいつそ。

トずはと抜いて切りかける。采女ずつと出て、其手を取り

采女 久次公。こりや何事。

ト突き放す。少々立廻りあつて、ト久次が切り附けるを、采女最前の箱にてシャンと留る。箱割れて中より金の麿と阿波草履と出る。

皆々 これは。(ト采女、麿と草履を兩手に持つ)。

采女 久吉公の御内意を蒙り、御母公よりの御賜。此二品は御兩人の御公達の品定め。

久次 金の麿にて、天が下を治めるか。

久秋 匹夫下郎の草履を搦むか。

采女 貴賤の二つは、二人の御公達。とくと御思案なされませう。

久次 ハ、ハ、ハ、。思案するまでもない。金の麿を持つが此久次サ。

采女 イ、ヤ、金の塵を持つは久秋公。非道非義の久次公には、よく似あうた此草履。

久次 ヤア、奇ッ怪な雑言。兄たる久次を差置き、弟の久次に、四海の跡目を繼がせんとは、謀叛の兆しか。

采女 たとひ兄公にせもせよ、悪人なればほつくだせとある、我君の御内意。

久次 イヤ、どうあつても、此久次が跡目ぢやぞ。

順慶 イヤ、さうは成りますまい。久次公、先づお待ちなされませい。(ト順慶出て、二人の中へ入る)。憚りながら、順慶が存ずるには、兄御を跡目にお立てなさる、が順道なれども、我君のお心に入らぬ久次公、それゆゑにこそ、此二品はお心を引き見る謎々。幾重にも四海の跡目は久秋公へ、お譲りあつて、然るべう存じ奉る。

久次 ヤア、差出過ぎた順慶がさいばい。われ、其苦ぢやあるまいがな。(ト順慶、久次に目配せして)

順慶 ハテサテ、武將宣下はお袖判と國行の御劍、一色缺けても宣下は叶はぬ。ナ、ぢやによつて、久秋公のお預りはお袖判、久次公には國行の御劍、定めて御所持てござりませうな。

久次 如何にも、預りの不動國行、片時も離さず帶せしは、即ち是れ。(ト抜いて見せる。順慶見て)

順慶 成程、まがふ所もない御劍。シテ、久秋公にはお預りのお袖判、定めて御大切に。

久秋 ホ、ウ、順慶が申す通り、肌身離さず即ち是れに、(ト懐中を探して) イヤア、最前まで肌につけしお袖判が

順慶 お袖判がどういたしたナ。

久秋 サア、其御判が(トいろ／＼さがすこなし)。

采女 申し、久秋公、其御袖判が何となりました。

花橋 九重 それがどうぞいたしましたかえ。

久秋 サア、其御判が紛失したわいの。

皆々 エ、。(トびつくりする。采女氣を急いで傍へ寄り)

采女 久秋さま、紛失したて済むものでござりますかいなア。そりやマア、いつの間、處はいづこ。

トうるたへるこなし。

久秋 サア、最前まで肌につけて居たが、(トうる／＼する)。

ト采女、花橋、九重も袂をいろ／＼探す事あつて、久秋「ソレ」と奥へ行かうとするを、久次ずつと寄つて久秋を引附ける。三人「これは」と寄るを、久次「何」とときめる。三人顔見合せ、「ホイ」トさしうつむく。

久次 ヤイ、こゝな大盗人。父上より預りたる大切のお袖判、紛失したて事が済むか。サア、どこへ隠

した。有りやうに、ぬかせく。(ト草履にて散々に叩く)。

采女 マア、お待ちなされて下さりませ。今一應とくと吟味を遂げまして。

ト寄るを、順慶遮つて

順慶 ハ、ハ、ハ、ハ、同じ穴の狐侍ひ、そろく、尾が出るので、もがくわく。四人共にく、し上げ、お袖判の行方を詮議。先づ、かうく。

ト久次、順慶に目くばせして、順慶、采女、久秋を引附ける。花橋、九重寄るを、久次引附け、散々に叩く。ト民部つかくと出て、久次を突き廻し、順慶を見事に投げる。

皆々 ヤア、。(ト順慶起きて、民部を見て)

順脚 ヤア、こなたは

久次 岸田民部。

順慶 何ゆゑ身共を

民部 洛中洛外の政道を預る岸田民部、非法を糺すに言ひ分あるか。

順慶 何が何と。

民部 久秋公をなぜ打擲召された。臣として君に手向ふ大悪人。

久次 そりや、お袖判が紛失ゆゑサ。

順慶 それでぶつたが、何とした。

民部 お袖判が紛失すれば、主人をぶつて苦しくないとある、御説意でも受け召されたか。

久次 サア、それは、

民部 但し、其許が、お袖判詮議の役目かな。

順慶 サア、其儀は、

民部 上聞に達し、逆臣の罪を糺さうか。弟を恵むべき兄の身として、無體の戀慕。不義不仁の罪を糺しませうか。

久次 サア、それは、

民部 サア、

久次 サア、

民部 サア、何とていやる。

順慶 ムウ。

久次 ヤイ、民部、餘り義者ばるな。なんぼう久秋が肩持つても、肝腎の預り物、大切なお袖判を紛失

させ、落したの、取られたのと、子供たらしいうても濟むまい。二人共に引ッ括つて拷問せい。

順慶 洛中洛外の政道を預かる、民部どの、お仕置きを、見物いたさう。(ト民部、久秋の傍へ往て)

民部 申し、久秋公、我君名護屋御發向の折柄、二品の御寶を、御連枝に預けたまひし、其一品紛失とばかりては相濟まぬ。傍に附添ふ瀬川采女共々、思案の極めて、返答なされましてようござらう。

花橋 申し、ちやつと申し譯をなされて下さりませいなア。

久秋 肌身離さぬお袖判、奪ひ取られしは武運の盡き。

花橋 ハア、。(ト泣く)。

順慶 大將の身を忘れ、踊り狂ふ放埒ゆゑ、なほ實否を糺さんと、最前持参したる御用金。

久秋 サア、其金も

花橋 紛失したわいなア。

久次 我身を疑ふ父への潔白。弟が身持放埒、露顯にかけん謀り事

順慶 此順慶が御用金を持参して、同じやうに踊り狂うたは、皆久次公の嚴命ぢやわい。

花橋 エ、。(ト泣く)。

久秋 いづれも、さらば。(ト死なうとする。采女、花橋、九重留めて)

采女 御短慮千萬な。こりや何事ぞござりまする。

花橋 マア、お待ちなされませいなア。

久秋 イヤ、放して殺したもいなう。(ト揉み合ふ。久次こなしあつて)

久次 ハ、盗人猛けくしい。同類共が人そばえ。民部、此場の捌きが、見たい。

ト此うち民部始終思案のこなし、いろ／＼あつて

民部 久秋公は追放。

花橋 エ、。

采女 ナニ、久秋公には御追放とな。然らば拙者は。(ト切腹せうとする。民部じつと留めて)

民部 死んで寶が手に入るか。

采女 何と。

民部 命全うして、大切なお袖判を尋ね出し、久秋公を再び御代に出だし奉らずば、汝が忠義は立つまいがな。是程の事に心が附かぬか。うつけもの。(トきめる。采女こなしあつて、鎮まる)。

久次 ヤイ、民部、采女を助けては、政道が立つまい。

順慶 用金紛失といひ、お袖判の紛失、傍にへちまふ瀬川采女。きやつが業に極まつた。

久次 輕うても縛り首。采女に繩打て。

内記 ハア、。

ト内記、五百右衛門奥より出て、采女に掛かる。采女二人を見事に投げる。順慶「うぬな」と行くを、民部部究き廻し、兩方見得よく、しやんと留り

民部 瀬川民部も共に追放。

順慶 追放とは最風の沙汰。

民部 采女が命を取り、お袖判の行くへ、何者を捉へて詮議するのぢや。横合ひから差出すとすつこんてお居やれ。

内記 科極まりし瀬川采女、我儘に追放申し附け、

五百 後日の咎めは、何となさるゝな。

民部 陪臣の分として、大老職を勤むる民部に對し、緩怠千萬。控へてをれサ。(トきめる。二人控へる)

久次 コリヤノ、兩人の者、打ツちやつて置けく。瀬川采女が五正や三正牛じたとして、殺したとして

何程の事。民部、久秋を追放した跡で、四海の跡目、だれが繼ぎさうなものぢやと思ふ。

民部 サア、其儀は、われくが心に測られませぬ。とかく我君の御説次第。

久次

ハ、ハ、ハ、ハ。佞人めらが勧めによつて、父母の分け隔て。天よりこれを憎んで久秋が放埒。自然と此久次に跡目を譲らねばならぬやうに成るといふは、争はれぬものぢやなア。(トこなしあつて)ヤイ、久秋。采女。

ト兩人思ひ入れあつて、そろく傍へ行き、うつむく。久次兩人を引附ける。花橋、九重「それは」と寄るを順慶、内記、兩方へ引留める。民部じつと見て居る。

久次 親兄の禮を忘れ、今までは、ようもく、父母へ悪しざまに執り成したなア。又采女にも戀ひの意趣、何と、此久次が恨めしいか。

采女 何しにさやうに存じませう。

久次 幸ひの戀ひの間に、こいつ二人を叩きのめせ。

内記 五百

ト五百右衛門、内記、采女、久秋を引附ける。花橋、九重寄らうとするを、民部「コリヤ」と兩人を引附け、じつとおさへる。

順慶 ヤイ、女。今、目の前に二人が憂き目。あれでも随ふ氣はないか。

内記 おうと云へば、すぐに極樂、

五百 いやと云へば、地獄の苦しみ。

内記 いやか、おうか、二人ふたりの女。返事は

皆々 どうぢや。

花橋 いやぢや〜。いやでござりますわいなア。

九重 追放つえの百杖、久次公の御上意ぢや。(ト背打ちに兩人をぶち据ゑて) もはや御主人ではないぞ。追放

にあはつしやつたれば、素町人も同前。御主人ではないぞ〜。

ト民部の方へ當附けていふ。

九重 そりや、申し、久次さま、

花橋 順慶さま、

兩人 あんまりむごうござりまするわいなア。

久次 最前は情けて口説き、今は又仇て口説く。幾たびも〜、品を變へ、手を變へて、口説きおほせにやきかぬ。

花橋 いかいかに戀ひの意趣ぢやというて、こりやあんまり
九重 いつそ殺して下さんせ。

久次 殺さぬ〜。口説いて聞かねば、無理無體、手も足も引ツク、つて抱いて寐る。順慶、兩人の女を桃山の御殿へ連れ歸れ。

順慶 ハツ。身請けしたれば二人ふたりの女、早く立て。

花橋 エ、。そんならさつき、わたしが身請けの客といふは

九重 久次さまか。

久次 なんぼ吠えてももう叶はぬ。内記、此女を桃山の御殿へ連れ行き、きつと番をいたせ。
内記 ハツ。

花橋 いやぢや〜、何ぼでも行きはせぬ。

ト意地張るを、無理に引ツ立て、橋懸りへはひる。ト向うばた〜にて、平馬、上下かみしも股立にて、白木の文箱を持ち、走り出て

平馬 御内意。

久次 印南平馬、何事ぢや。

平馬 名護屋表よりの御内意。

ト白木の文箱を出す。順慶取つて、状を出し開き見て

順慶 ナニく。金吾久秋、放埒顯露の上、追放いたすに於ては、外に跡目これなきゆゑ、諸大名評議の上、久次を一刻も早く四海の跡目たるべき者也。大領久吉判。」

采女 すりや

平馬 名護屋よりの早飛脚到来いたし、桃山に於て諸大名評議極まり、明卯の刻、武將宣下とある御説意。

順慶 シテく、彼のお袖判、不動國行の御劔なくとも、苦しくないか。

平馬 お袖判紛失とあれば、後日の沙汰。失づ、久次公に御所持の不動國行の御劔を以て、宣下の儀式執り行へとの儀でござりまする。

民部 いや、明卯の刻に、久次公には四海の跡目、武將の宣下とな。ホイ。

久次 ハテ、心地よやなア。

平馬 此上は、御劔桃山へ持参し、諸大名に見せ、跡目の儀式、一時も早く執り行ひませう。

久次 此劔を早く桃山へ持参し、明卯の刻に、諸大名、身が館へ迎ひに來いと云へ。

ト劔を平馬に渡す。

平馬 畏つてござりまする。

順慶 平馬、大切な儀ぢや。急げ。

平馬 ハツ。(ト平馬、劔を持ち、向うへ走りはひる。)

久次 民部、ちと當惑であらう。そちは洛中洛外の支配なれば、武將宣下に立合はねばならぬ役目、刻限は卯の上刻ぢやが、合點か。(ト民部こなしあつて、ハツト齒ぎしみて、ついと入る。)

久次 もがくわく。

順慶 兩人のやつらは國境ひより叩き出し、五百右衛門、我君の守護致せ。

正百 ハツ。

順慶 よいざまく。何ぼ諸大名が最眞しても、名護屋よりの早飛脚、争はれぬ世の順道、扶持離れの久秋主従。見苦しい。早く出てうせい。者共、あれ叩き出せ。

ト歌になり、久次、順慶こなしあつて、奥へ入る。ト跡に、采女、久秋残り、身體の痛むこなし色々あつて、塵を拂ひ、互ひに介抱して采女あたりを窺ひ、思ひ入れある。此うち始終合ひ方。采女、久秋の傍へそつと寄り、小聲になり

采女 久次公、お願ひの通り、まんまと追放にお逢ひなされましたの。

久秋 采女、そちが世話でやうくと追放せられ、兄久次殿を、四海の跡目に立てるも、皆そなたの蔭、

エ、忝うござるぞや。

采女 これは御勿體ない御仰せ。御舎兄久次公は、心悪黨によつて、久吉公の御機嫌に叶はず、御勘當同前。それゆゑ四海の跡目は、久秋公とかねての御内意なれど、兄を差置き、弟の身で、跡目は繼がれぬと思し召しても、我君の仰せ、御内意も背かれず、それゆゑお身持放埒、世の譏りを受け、追放に逢ひ、四海の跡目を久次公に繼がすとは、天晴れの御孝行。

久秋 兄久次公の望みを叶へば、お心も翻らんと申うて、かねてそなたと言ひ合せ

采女 其お心が通じたらば、久次公のお心も直り、あなたも追ッ附け召し返されませう。併し大切なお袖判の儀は。

久秋 最前奥にて、何者とも知れず、まどろむうち、盗み取られたわいなう。

采女 すりや、まことに紛失。それも大方、久次公の計らひてござりませう。

久秋 あの方にある事ならば、たれを恨むる事もない。

采女 申し、これにござつては、却つてお身の障り。これよりすぐに。

久秋 采女、いづくを當に立退くのぢや。

采女 どこと申して當はなけれど、一先づ都を開いて、(ト久秋を見て、思ひ入あつて) 如何に兄御に御孝

行とは申しながら、四海の主じ大領久吉公の若君久秋公が、都を立退き

久秋 漂泊の身となることも、厭ひはせぬ。(トこなしあつて) さはいへ、采女、

采女 久秋公、

久秋 變り果てた

兩人 身の上ぢやなア。(ト泣く)。

ト向う障子一面に開く。

ト真中に蘭生の方、衣裳、打掛けにて御臺の形、民部、衣裳改め、長上下、五百左衛門、平馬、衣裳、上下、其外諸大名、大勢並び居る。

民部 久秋公の御本心承はり、

皆々 有り難う存じ奉りまする。

久秋 采女、これは。

蘭生 明卯の上刻には武將宣下、久秋公はいよく四海の跡目。我子ながらも久吉公の詭意、蘭生これ

まで迎ひに來たわいなう。

久秋 采女 エ、何と。

民部 某、最前、歸つたる體は、久次公を跡目に附けんといひしも、皆言ひ合はしての御母公の計らひ。

蘭生 我君久吉公より、跡目の御内意あるより身持放埒、これ正しく我身に科を拵へ、久次に世を譲らん爲と、民部が推量。諸侯が疑ひ。本心を聞くからは、久吉公の仰せ通りに、すぐに四海の跡目。民部 御辞退あつても、我君の御詔意、久秋公、皆々押して跡目に極まりましたぞ。

平馬 某は龍造寺帶刀と申し、西國大名、人に面を知られぬを幸ひ、平馬となつて入込み、久次、順慶に與し、放埒の目附けに成つたるゆゑ、安々不動國行の劔は、奪ひ取りましてござりまする。

五百 われごとくとも、お指圖を受け、久秋公に付き隨ひしも、四海の跡目に立てん爲。

蘭生 我君の仰せ、久次へは國行の御劔、久秋へはお袖判、分けて預けたまひしなれども、武將宣下に用ふる國行の御劔、それゆゑ手段を以て取返したわいなう。

久秋 でも、大切なお袖判は、

民部 其詮義に瀬川采女、先き程預けし二品の返答は。

采女 ハツ。(トこなしあつて、最前の金の麩と草履を取つて来て)久秋公の御心底顯はれ、四海の跡目と定まりたまふ上からは、此麩は久秋公。(ト久秋の前に置く)又、此阿波草履は、某が御放埒をお勧め申せし身の言ひ譯に。

民部 出来した采女。そちは勘當。

久秋 ナニ、采女を勘當とは、

民部 かのお袖判の詮義、しおほせて立歸らば、元の主従。

采女 エ、忝い。然らばこれよりすぐに。

久秋 采女、これまでの心遣ひ。……随分無事で。

民部 一時おくれれば一時の不忠。

采女 まことに。(ト思ひ入れあつて)おさらば。

ト七つ鐘打つ。と橋懸りへ走りはひる。久秋跡見送りて居る。民部こなしあつて

民部 武將宣下の時移る、用意の乗り物、これへ。

内より ハア、(ト橋懸りより本六尺乗り物昇り出て出る)。

五百 イザ 久秋公、桃山御殿へお入りあられませう。

久秋 それでも、

民部 ハテ、(ト民部、無理に久秋を乗り物へ入れ)お乗り物、立てイ。

駕 ハア。(ト昇き上げる。ト此前より西の障子家體より、順慶出掛け居て)

順慶 民部。これは。

民部 順慶が企み、邪曲非道の久次公に、四海の跡目を継がせてよいものか。生れ變つてござれと言へ。皆々 人でなしめが。

民部 イザ、御臺さま。

蘭生 皆の者、供せい。

皆々 ハア。

民部 お先きへ参れ。

内記 ハア。

ト内より、先づ、挾箱、本行列の人数出て、一様にふり出す所、持入りになり、花道にて六尺七草ふんで皆々次第を作り、向うへはひる。跡は順慶一人残る所へ、内記走り出て

内記 コレく、順慶どの、委細は承りましたが、こつちの身方は皆あつちの廻し者、たくさんだ事はぐりはま。こりやマア、どうしたものでござる。

順慶 言ひ附け置いたお袖判は。

内記 最前盗んで、此花活けへ。(ト花活けをあけて見て)ヤア、めんような。慥か此内へ隠し置いたが。

順慶 それも取られたなア。

内記 こりやマア、何の事ぢや。

順慶 此上は破れかぶれ。事の様子を久次公へ申し上げい。

内記 合點でござる。

順慶 早く往け。

内記 ハツ。(ト向うへ走りはひる。ト橋懸り黒装束の忍び一人出て)

忍 ハツ、順慶どの、仰せ附けられました千鳥の香爐を。

順慶 てかした、てかした。

ト受取る。此前より、東の方障子家體より、以前の形にて、靈山出掛け見て居る。

此香爐を久次公へ差上げ、追ッ附け四海は久次公の手に入る。エ、忝い。

ト戴く。靈山つかくと出て、右の香爐を引ッたくる。順慶「ヤアうぬは」と見る。ほんと當てる。倒れる。忍び切つて掛かる。靈山刀を引ッたくり、一刀にこれも切る。ト奥より最前の靈山の供大勢、面々に最前の金箱をかたげ、出る。

皆々 お頭。仕事はまぶてごんす。

靈山 ム、三上の百助。足柄金藏。其金箱を我が隠れ家へ。
皆々 シテ、お頭は。

靈山 あとから去のう。
皆々 そんなら、先きへ。

ト皆々向うへはひる。靈山、跡になしあつて、最前のお袖判と香爐を見て

靈山 武將久吉が重寶、お袖判、千鳥の香爐。へエ、うまいなア。(ト櫛中へ入れる。此うち順慶起上り)
順慶 さては、うぬ。

ト切つて掛る。刀をもぎ取り、すぐに斬り殺し、靈山、花道の角へ悠々と往つて、拂子を持って、順慶
の死骸をじろりと見て、片頬で笑ひ

靈山 へ、南無あみだぶく。

ト向うへしづくとはひる。

返し

右の障子兩面へ引いて取り舞臺一面の御殿を突き出す。一樣に高欄、真中にきざはし、總牛御殿。一面

に金襴。二重舞臺の上に、久次壺折りの袖を脱ぎかけ、太刀を振上げて居る。其下に久秋恐れて居る。
平馬、五百左衛門。久次を控へて居る。此見得にて押上す。道具留まる。

久次 邪魔せずと、そこ退け。

平馬 こは御短慮なる御振舞ひ。何事のお怒りてござりまする。

久次 黙れ、平馬。此久次を欺き、追放せし久秋を四海の跡目と、諸大名の評議、聞くとひとしく、わ
が無念。兄をたばかり弟久秋、打放した其上で、汝らも眞ツ二つ。こ、離せ。

五百 まつたく其儀は、私しならぬ御母公の仰せ。

久次 ヤア、聞かぬ。そこのけ。

ト色々揉み合ふ立廻りの中へ、蘭生の方、襦、衣裳にて、弓を持ち出て、久次を散々に打掛ゑる。

平馬 ヤア、御臺所、蘭生の御方。

久次 母人、ナ、何で此久次を、打叩きなさるゝな。(トきつとなる。蘭生思ひ入れあつて)

蘭生 エ、おのれはくくなア。日頃から淺ましい其性根ゆゑ、我君久吉公の御機嫌に叶はず、名護屋
御在陣の其内より、自らへ御内意。兄久次は大将の器量にあらず、詞を背けば勘當せよとある御
誑意。今、此折檻の弓杖は、母が打擲するではない、弓矢正八幡宮の御折檻と思つて、どせう骨

に覺えて居よ。

久次 エ、八まんでも、九万でも、親の身て子をぶちのめすといふ事があるかいの。老いては子に隨へといふ事を知らつしやらぬか。嗣慾な人ぢやなう。

■生 嗣慾とはおのれが事ぢやわヤイ。隨身公助ずしんきんすけはな、右近の馬場で賭弓のりゆみを射損じたとあつて、親の武則ぶねがまッこのやうに、打懲うちこらせしを、逃げ走りなば、老人の追ひ掛けんとして躓つき轉まびたまはんと、思ふまゝに打たれしと聞く。それ程にあらざとも、親を親と思へヤイ。邪よこしまま非道を働いて、我君の跡目相續とは、此顔ていうたかヤイ。これていうたか。おのれはく。〔ト打擲して〕コリヤヤイ、母はな、久秋の放埒はなはと聞くより、心ならず。岸田民部と言ひ合せ、金の魔まと阿波草履持せ遣り、おのれが心を矯め直し、金の魔まを持ちかねぬ大將にせんものと、思ふに違たがふ久秋の心底。兄に跡目を繼がせんと、わざと放埒はなは情弱じやうじやくの科とがを拵とがへ、親兄しんきやうの禮儀らいぎを思ふ志し。是れ即ち金の魔まを持つべき大將。さるによつて、久秋を跡目に立てんと諸侯の評議。其中へ暴れ込む不孝者。母が折檻せつがん、何と骨身にこたへたかく。〔ト又散々に打擲する。久秋其手に纏りて〕

久次 ア、勿體ない。此久秋、如何やうな目に逢ふとも、更々お恨みとは存じませぬ。お心を翻され、母人へお詫ごまび言こと。

久次 何の詫ごまび言こと。今の折檻せつがんて、猶も心が鑽石。

ト又久秋に切付ける。皆々「これはしと支へるを、振切り、久秋を追うて花道中程まで行く。ト鳥屋の内より大炊之助

大炊 待つた〜。

ト大炊之助、衣裳かみしも上下かみしも、ずつと出て、久秋を圍ひ、久次が刀持つ手を取り、じつと顔を見合せ、どつかと坐まわる。久次きつと見て

久次 此村大炊之助。なぜ妨さげする。

大炊 君辱めらるゝ時は臣死す。久秋公の御名代、イザ、大炊之助めが此首を。

ト久次が刀の下へ直る。

久次 ちよございなやつ。

ト久次、大炊之助に切附る。かいくり、利腕りわづをしつかり取る。

手向てむかひか。

大炊 一人貪あま戻もなれば一國亂を起す。羽柴大領久吉公の御公達ごきんだち。自らお手をおろされんとは見苦しい。イザ、先つあれへ。イザ〜、上座遊ばされませう。〔トつか〜と本舞臺へ来て留る〕。

久次 コリヤ、久次を手込めにするか。

平馬 此村大炊之助どの。此體は。

大炊 蘭生の方さまへ、一つのお願ひ。

ト民部、衣裳、長上下にて、ずつと出て

民部 久次公の乳母役、此村大炊之助どの、さこそあるべき事。身不肖ながら、岸田民部、お取次ぎ申しませう。お願ひの筋、心置きなう申し上げられい。

大炊 恐れながら、ト久次、久秋を切らうとするゆゑ、大炊之助、鯉口をきつと留めて居る。

平馬 お願ひの筋、申し上げられい。

大炊 ハッ。

平馬 早く申し上げられい。

五百 ハッ。

ト平馬、五百右衛門、サア〜と聲を掛ける。大炊之助「ハッ〜」と、じり〜と鯉口を留めながら、

廻り、此うち思案して久次がちひさ刀をもぎ取り、ハッと下へさがる。久次、久秋を睨み附け、つ〜

と寄らうとする。平馬、五百右衛門押し隔て、上座へ直し

大炊 久次公には、先づ〜、お鎮まり遊ばされませう。

民部 シテ、大炊之助どの、お願ひの仔細はナ。(ト大炊之助こなしあつて)

大炊 恐れながら、主君久次公の、お身の上、幼少の時分より生得の御短慮、何卒お心を矯め直し、四

海の武將になし奉らんものと、二六時中の御諫言は耳にさからひ、順慶如き佞人の巧言に惑は

され、日々に長ずる惡逆無道。御母公の御怒り、諸大名の歎き、聞く度毎に、此の大炊が腸を

すだ〜に裂かる、苦しみ。とありとて、身退くべき心底ならねば、今一應のお願ひ。あはれ、

久次公のお身の上、暫しが間、此村めにお預け置かれ下さりませうならば、我が一命に替へて善

心になし奉らん。生々世々の此身の面目、偏へに願ひ奉りまする。

ト色々ある。民部こなしあつて、蘭生の方に向ひ

民部 蘭生の方さまのお怒り、我君久吉公へ一旦の申し譯、殊に、義理ある中の御親子、大炊之助が願

ひの筋、定めてお聞届け遣はされまするでござりませうナ。

蘭生 我君の御機嫌を計らふは如何なれども、助命を願ふ大炊之助の心底、憎いやつとは思へども、下

世話にいふかたはな子程可愛いと、心さへ直りなば、母が悦びはどのやうにあらうと思ふ。大炊

之助、いよ〜心を矯め直すか。

大炊 すりや、お聞届け下さりますとナ。

民部 五十日が其間、此村大炊之助に久次公はお預け。

大炊 エ、有り難う存じ奉ります。

菌生 頼みも綱も切れ果てしに、よう預つてくれて嬉しい。一旦の怒りは君への恐れ。自らが心の悦び
推量して、サア、そなたの心を推量して預ける程に、きつと矯め直して眞の人にしてくれい。そち
を頼んだぞよ。

久次 大炊之助、預り立てして後悔すな。(ト大炊之助こなしあつて)

大炊 お乗り物、参れ。

内より ハア、。(ト乗物を舞臺の眞中へ昇きすゑる。)

民部 長居は恐れ、大炊どの。

大炊 イザ、召しませい。

久秋 何卒、此上ながら、お心を。

久次 見るも中々奇ツ怪な。先づ、そちらから

ト又立掛かるを、大炊之助始め家來皆々寄つて、無理に久次を乗り物へへし込む。出ようとする所を大

炊之助、乗り物へきつと綱を掛ける。久次、中にもがくこなし。

然らば預り、罷り歸る。

菌生 必ず心の直るやうに

大炊 しおほせて一異見。

民部 もしも心の直らぬ時は、

大炊 細工は流々、仕上げた上、

民部 日切りの内は毎日吟味、

大炊 善と悪とは

民部 久次公の生死の境

菌生 しつかりと

皆々 預けたぞよ。

大炊 ハツ。(ト乗り物昇き上げる。皆々思ひ入れ。大炊之助こなしあつて) 乗り物、やれ。
トよろしく、

二幕目

大炊之助館の場
南禪寺山門の場

登場人物

小姓、主馬。同頼母。同主水。同數馬。同右近。奴、關内。同可内。眞柴久秋。非人、蛇骨婆。大炊女房、吳竹。奴、岩内。同角内。眞柴久次。奴、八田平、本名柴田伊賀之助勝正。此村大炊之助。傾城、九重。腰元、柳葉。傾城、花橋。早川高景。石川五右衛門。大領久吉。捕手大勢。

造り物二重舞臺。見付け金襴。東西塗骨障子家體。臍病口の方、植込込みに橋の木を植込てある。總て大炊之助屋形の模様。幕の内より花橋、九重、傾城の形にて、さしうつむいて居る。兩脇に關内、角内、岩内、可内、何れも繻子奴、随分綺麗なる對の形、割竹にて花橋、九重を現、責めにして居る體。八田平、同じ奴にて、二重舞臺に、手桶を枕に居睡つて居る。此見得よろしく、琴歌にて暮開く。

關内 九重どの、

岩内 橋どの。

四人 目を覺されい。(ト一時に割り竹にてとんと叩く。花橋、九重、目をひらき)

花橋 申し、采女さま、どこへ往かしやんすぞいなア。

九重 殿さま、待つて下さんせいなア。

關内 何ぢや。采女ぢやの、殿さまのと、ちつと目を

岩内 覺まされい。(ト花橋、九重、あたりを見て)

可内

うた、ねに、戀ひしき人を見てこより、夢てふものを驚かず、日頃ゆかしい、懐しいと思ふゆゑ、

とろくとまどろむうち、夢ともなく、うつともなく、采女さまに逢うたと思つたは、さては夢てあつたか。

九重 わたしも同じ戀ひしさの、夢に見たのは慥かに殿さま。覺めては元の折檻の庭。夢は五臓の煩ひと、常々聞けど、幻しに、久秋さまのお姿を、目に見た上はいとなほ、逢ひたいわいなア。花橋 何事も夢の浮世、わしやあきらめて居るわいなア。

角内 何の事だ。此二三日先きから、夜も晝も寢ずに責めいと、お頭の言ひ附けゆゑ、睡たい目をおつびらいて、白狀せいと云へば、イヤ、采女ぢやの、久秋ぢやのと、よぢれもないたはことばかり。エ、けたいのわるい。

可内 イヤモウ、八の字組の御頭の言ひ附けゆゑ、責めは責むるもの、此頃はお傾城より、こちとら
が、責められるやうなものぢや。見りや、お頭も、疲れが出たやら、とろくと遣らる。われ

らも少しとろめかす程に、頼むぞく。

岩内 イヤ又、こいつ程、よく睡たがるやつはない。シタガ、八内が言ふ通り、もうこちとらも引き入る程睡たい。こりやまた、かはるぐに、ちつと休んでも、大事ありそむないものだ。

關内 それいヤイ。又、此お傾城も、よい加減に得心して、いふことを聞いて寝たがよいになア。

岩内 サイヤイ、蓼喰ふ蟲もすきぐと、おいらなら、寝る方がよいがなア。

關内 ちつとの間、寤轉べく。

岩内 イヤ、大事の御用を言ひ附けられ、暫くても油断するうち、取逃がしてはこつちら笠の臺が飛ぶ。睡たくも、辛抱せい。

角内 こりや、岩内がいふ通り、大事の言ひ附け、心を許しふけらせたりや、おいらが扶持があがつたりぢや。

岩内 さうだく。サア、二人共に、目を

四人 覺まさつしやれ。(ト此うち可内睡り居て、此時惴りして)

可内 ハイく。御免なされて下さりませ。餘り睡むたさに、夕べも百出して代りを雇ひましてござりまする。もうく睡りはいたしませぬ。お赦されて下さりませい。

關内 何ぬかす。其寢けたさまをして、お頭が見さつしやつたら、大抵な事ではあるまい。コリヤ、性根を附けく。(ト割り竹にて叩く)

可内 アイく。申しまするく。此間の丁半の時、四五十手味噌をしたより外に、覺えはござりませぬ。岩内 エ、性根を附ける。何もおのれに白状せいと云はぬわいヤイ。(ト可内邊り見て)

可内 今のはわいらであつたか。おらは又、お頭と思つて、是迄の悪事を既に漏らさうとしたわい。關内 何を馬鹿めが。

角内 サア、お傾城。殿さまのお心に随ふと言はつしやれ。

四人 目を覺まさつしやれ。(ト又たく。兩人惴りして)

花橋 九重 ア、痛いわいなア。(ト此うち八田平目を覺まし、脊伸びして)

八田 ぐつすと違つてのけた。コリヤ、四人の者共、まだ色よい返事はせぬか。おらが旦那大炊之助さまが預つて戻らしやつた久次さま、其ふたりの傾城に心を掛け、口説いても得心せぬゆゑ、怪我のないやうに、其うつ、責め、此間から、責めてもく、得心せぬ、しぶとい性根。此上はおらが代つて、一責め責めて得心さす。わいらは、ちつとの間暇をやる程に、皆部屋へ往つて、休め。

角内 何と言はるゝ。そんならちつとの間、とろく〜と遣つても、大事ないか。

八田 おらが呑込んで居る。早く往け〜。

皆々 エ、有り難い。

可内 ハア、人は氣の前だ。此間から、夜も晝も寝ぬと思へば、睡むたうてならんだが、今お頭かしらが往て休めといふ詞を聞くと、なほ睡むたい。

角内 何をぬかすやら、そんなら、お頭かしら、頼みましたぞや。

八田 オ、サ、早う往け。

皆々 サア、皆、来らう〜。(ト四人割り竹かたけだけ、橋懸りへはひる。跡は合ひ方になり)

八田 コリヤ、長うはならぬぞ。ちつとの間ぢやぞよ。(ト見送り、兩人の傍へ往て)九重どの、橘どの。

此間からの責苦せめく、定めて疲れてもあうが、生命なれば是非がない。あいつらを部屋へやつたは、ちつとおふたりに休まさう爲。サア、大事ない。ふたりとも少しの間なりと。

ト兩人睡り居て、ふつと目を開き

花橋 八田平どの、志し、忝かたじけなくうござんす。思はぬ事にお前がたまでに苦勞を掛け、氣の毒にござんすわいなア。

九重 只胸慾むねごころなは久次さま。現在いま弟御あにさまの久秋さまに、言ひかはした此九重に、無體むたいの戀慕こいぼ、刺へ、久秋さまに逢はれぬやうになるといふは、ほんに辛氣せめくな身の上ぢやわいなア。

花橋 わたしも同じ思ひ。采女さいにょさまには、お行くへ知れず、久次さまに思はれ、この憂うれき目。いつそ死んだがましてござんすわいなア。

八田 二人ふたり共に尤もな悔みぢやが、死んで花實はなみも咲かず。身を捨て、こそ、浮うむ瀬せもあれと云へば、又とくと思案しあんして見たがよいわいなア。

トこなしあつて、此うち奥より久次、衣裳、つぼ折りにて、太刀を提げ

久次 八田平。二人ふたりの女の返事はどうぢや。

ト出て来り、釋へ直る。八藏はちざうちやつと割り竹を構へ

八田 イヤサ、いろ〜と口説けども、此間からの責苦せめくに弱り、たわいもない寝言ばかり。一向いっぺん益體えきたいもない儀ぎでござりまする。

久次 ハテ、しぶとい女郎めしやうめらぢやよな。

八田 イヤモウ、情じやうのこはい女郎めしやうめ。此上は括くわしあげて

久次 イヤ〜、あら立て、は猶なほいかぬ。ハイ、兩人。(ト花橋、九重睡り居る)。

八田 御意ぢや。目を覺まさう。(ト割り竹にて舞臺を叩く。と目を開き)

兩人 お前の情けて、思はずとろくくと。(ト言はうとする。八田平ちやつと割り竹にて紛らし)

八田 コリヤく。又麻言か。アレ、久次公は、あれにお渡りなさるゝぞ。氣を儘かに持て、兩人。

ト兩人、久次を儘かに見て

花橋 ほんに、久次さま。

九重 いつの間にござんしたえ。

久次 花橋。九重。胴慾な者ぢやぞよ。情けを表とする傾城が、斯くまで心を盡す久次に、一度の情けも掛けぬとは、エ、つれないぞよ。

花橋 浮き川竹の賤しい此身、淺からぬお志し有り難うはござんすが、どういふ縁ぢや、ら、采女さまとはそも突き出しの初めより、言ひかはした深い仲、それ御存じてありながら、口説かしやんすは、つれないとはお前の事。どうぞ采女さまに逢はるゝやうに、お前の情けて、ナア、九重さん。

九重 サア、わたしも同じ願ひ。二世とかねたる久秋さま、それに無理なお前の戀路。ふつつりと思ひ切つて、久秋さまに添はして下さんせいなア。

八田 ハア、傾城に誠はないものぢやと聞いたが、これを思へば四角な玉子も、あるまいともいはれ

ぬわいヤイ。

久次 役にも立たぬ心中。其張りの強いに猶惚れた。いやでも應でも抱いて寐る。サア、兩人、返事はどうぞぢや。

花橋 假令どのやうな憂き目に逢うても、此戀ひばかりは、

九重 いやでござんすわいなア、

久次 いやというて、其儘で置かうか。八田平、打据ゑて返事をさせい。それを肴に一献酌まん。誰かある。銚子をこれへ。

吳竹
柳葉

ト奥より吳竹、衣裳、袴にて盃持ち出る。柳葉、長柄の銚子持ち出る。

吳竹 夫大炊之助、今日は風邪にて、暫く保養の間、憚りながら、妻の吳竹、御機嫌伺ひまする。柳葉 仰せ附けられました九献。イザ、召し上がられませう。

久次 てかした、吳竹。柳葉。サア、八田平、打据ゑて返事をさせい。

八田 畏つてござりまする。

久次 サア、酌せい。

柳葉 アイ。(ト柳葉酌する。此うち八田平、花橋、九重が真中へはひる。)

八田 コレサ、二人ながら、わるい合點ぢや。行くへの知れぬ采女どのや、又心の變つた久秋さまに、心中立てするは大きな野暮。それより、久次公のお心に隨は、活計歡樂、榮耀の有る條。其時は、八田平めも御褒美に預るといふもの。すりや、そこら中がよい事だらけ。思ひ替へて見る氣はないか。どうぢや。

九重 流れの身とはいひながら、貞女兩夫に見えぬ心中。

花橋 忠臣二君に仕へぬ道理。あつたら口に風引かさずと、八田平どの、もう此上はふツつりと構うてばし下さんすないなア。

八田 イ、ヤ、構はにやならぬ。久次公の御説意、金輪奈落の底までも口説き落してお寐間の伽。オツト、得心あれば玉の輿、いやとあれば火水の責め。善惡の返事は生死の境。

九重 ハテ、命はさらく惜まねば、

花橋 責めなりと、殺すなりと、

兩人 勝手にさしやんせいなア。

八田 お聞きの通りの返答。此上はいか、計らひませうナ。

久次 ハテ、死にたい女郎め、情けを以てうつ、責めも、可愛さ餘つて憎さが百倍。此上は、水責め、火責めの用意せい。

四人 ネイ。

八田 成程、さやう、手短かに、いつそ拙者が。(ト立たうとする。奥竹留めて)

奥竹 まつた。久次公も、それはあんまりお氣が短かいと申すもの。若し其のやうな恐ろしい責苦を見せ、ひよつと二人の衆に、怪我でもあつた時には、ほんの、一も取らず二も取らずとやら。ナア、柳葉。

柳葉 ハイ、木折りにいかぬが戀ひの道。とかくお心長う、幾重にも義理にせまれば、ツイするくと御得心あるが女の癖。

久次 すりやそち達が

奥竹 しつかりと預りました。

久次 兩人が色よい返事を。

花橋 九重 どうでもわたしらを。(ト二人こなしあつて)

奥竹 ハテ、何事も此奥竹が、わるいやうにはせぬ程に、マア、奥へ。八田平も休息しや。

八田 ネイ。

奥竹 イザ、久次公。

柳葉 先づ、お入りあられませう。

ト歌になり、久次を先きに奥竹、花橋、九重、柳葉、皆々こなしあつて奥へはひる。八田平は橋懸りへはひる。ト向うより久秋、衣裳、つぼ折りの上へ、篋笠にて横笛を吹き、出て来て、本舞臺栗門の側へたすみ、やはり笛を吹く。奥より奥竹出て、笛を聞く。

奥竹 あの唱歌は妻を慕ふ相夫戀。ハテ、しほらしい笛の音ぢやなア。(ト久秋笛をやめ)

久秋 其聲は、大炊が妻、奥竹ではないか。

奥竹 ヤア、あなたは久秋さま。其お姿は。

久秋 忍んで来たは、九重に逢ひたさ。此久秋が秋に寄る、妻乞ふ笛に耻かしい此姿。

奥竹 一天の君さへ、戀ひゆゑに草苅り山路とならせたまふ。何のお耻かしい事はござりませぬ。これへおはひり遊ばされませう。

久秋 はひつても大事はないかや。

奥竹 何の大事ござりませう。九重さまには、首尾を見合せ、お逢はせ申しませう。

久秋 それは嬉しいが、兄上のお目にか、らば、此身の爲になるまい。

奥竹 そこを知らさぬ、わたしが計らひ(トこなじあつて)腰元柳葉、預りの九重どのを、これへ伴へ。

柳葉 畏りました。(ト九重を内より連れて出る。久秋見て)

久秋 ヤア、九重か。

九重 殿様、逢ひたうござんしたわいなア。(ト取附く)

奥竹 ア、コレ、竊かに。ソレ、早う。(ト皆々こなしあつて)

柳葉 そんなら、あなたは

奥竹 久秋さまぢやわいの。

柳葉 エ、イ。

九重 申し、殿様、よう来て下さんしたなア。久次さまの無得心に引離された二人が中、逢ふ事もならぬかと、泣いてばかり居りましたわいなア。

久秋 此久秋も、逢ひたいは飛立つやうに思へども、館の人目、大殿が思はくをはからひ、姿をやつして来たも、そなたに逢ひたいばかりぢやわいなう。

柳葉 申し、奥さま、あのお二人の睦しさを見ては、久次公がどのやうにお口説きなされても、九重さ

まが御得心のないのは、御尤もてござりまする。

奥竹 イヤモウ、鴛鴦の思ひに比翼の契り。久次公の戀路は上見ぬ鴛の我儘。お目に掛からばお二人のお身の上。どうぞ竊かに積る咄しを、ナウ、柳葉。

柳葉 それは私が計らひて、人目に掛からぬ次ぎの間で、しつぽりと、申し、九重さま。

九重 そんなら、殿様。(ト手を取る)

久秋 めつさうな。こゝは大炊が屋形。若し聞えては

柳葉 ハテ、わたしらや奥さまが、呑込んで居りますれば、めつたに氣遣ひはござりませぬわいなア。

奥竹 それ〜。早うお二人さま、お越しなされませう。

ト此うち向うより非人蛇骨婆、つれな着、乞食婆にて、尻を掻きながら出て

蛇骨 嬉しやく〜。やう〜門はつたぞ。こゝが庭先きの枝折門ぢやな。よし〜。(ト内へはひり)

サア、娘を出して下さりませ。娘に逢はう〜。(トフツと通ると、皆々こなしあつて)

奥竹 見れば、さもしろい形をして、娘に逢はうとは合點のいかぬ。そちや何者ぢや。

蛇骨 此村大炊之助さまの屋敷、知つて來たのぢや。早う娘に逢はして下さんせ。娘に逢うたら譯が知れる。わしも今朝懸けに酒の粕を喰つた腹で、ろつふくはやつかいにそつてある。當はなくて

もぢらして貰はにやならぬ、ア、ごろさがせぶるかして、身内がぞろ〜痒うて、たまらぬ〜

ト身うちをかさ〜と掻く。

柳葉 エ、むさい。早う門前へ出ぬか。意地張ると侍ひ衆に言ひ附けて、叩き出さうか。

蛇骨 コレ、女中さま、お前も美しい顔をして、死にやの門をこつて居る(?)みだれ吐るやうに言はぬものぢや。

柳葉 まだ〜、慮外な、早う出をらぬか。

蛇骨 出をれ〜と、ためし者とは違ふ。見れば助右衛門なむまひつはつて(?)、びかついたぐるりして十三も値打があらう。まぶな代物ぢやなア。

柳葉 こまごと言はずと、早う出をらぬか。

蛇骨 ハテ、よう出したがる女中、どうしても屋敷で不自由なの。

柳葉 よい〜。意地張らば、しやうがある。コレ〜、八田平どの、此の女を。

奥竹 ア、待ちやく〜、柳葉、あれが詞に、此村が館と知つて、娘に逢ひに來たといふ。先づ、様子を尋ねた上の事にしたがよい。

蛇骨 ハア、お前は此家の奥さまぢやな。又、女中でも、上に立つといふ者は、遠うたものぢやわい

なア。

吳竹 さうして、其方の娘といふは何ものぢや。

蛇骨 わたしの娘は、久次さまとやらに請け出されて、此家へ来て居る、傾城の九重でござんす。

久秋 ナニ、すりや、九重が母親。

九重 わしがかゝさまとはえ。

蛇骨 ム、さてはそなたが九重か。オ、懐しやノ。ト返さへ行かうとする。柳葉突き廻して

柳葉 慮外な。九重さまは、誰れあらう、久秋様の言ひかはしてござる

蛇骨 其久秋どのはおれが聲。コレ、九重、何をよそくしい。おりや現在そなたの母ぢやわいなア。

吳竹 申し、九重さま、あの者を親とは覚えござりまするか。

九重 サア、わたしも幼い時から廊に育ち、かゝさまあるとは聞きながら、お行くへとても知れず。日頃逢ひたいとは思つて居たれど、あの姿を見ては

久秋 親といふのは合點がいかぬ。

柳葉 成程、幼い折に、お別れなされたれば、親御とあれば、何ぞ慥かな證據が

蛇骨 なつてたまるものか。現在の娘を産んだ年號、月日。

柳葉 シテ、其年號、誕生日は。

蛇骨 年號は天正元年、己辰十二月十日、卯の刻の誕生。稚名はそのとうたであらうがの。

九重 ほんに、それに違ひはござんせぬわいなア。

吳竹 そんなら、九重さまの

久秋 親はあのもの。(ト二人顔見合せ)

蛇骨 親は寒いに此さま。これから世話にならねばならぬ。聞きや、四海の大將の御簾中になりやるげ

な。そんなら結構な小袖もたんとあるであらう。母が貰つて着ねばならぬ。だてな物でも大事な

い。先づ色品を見せて下され。大方眞綿であらう。包みぢやあるまい。

吳竹 柳葉、こりや何としたものであらうぞ。

柳葉 大殿様の御目に懸からば、大抵な事ぢやござりませぬ。九重さま御對面が濟んだら、あの親御は、

とつと、お返しなされませ。

蛇骨 イヤ、歸るまい、九重に繋がれば、久秋どの、爲にも親。その親に逆らふ女郎め、見苦しい。さがれ。

ト蛇骨婆、柳葉を引きのけ、ずつと二重舞臺へ往つて、立膝にてすわる。此内障子を明け、久次見て居る。

コレ、久秋どの、あの九重之母ぢや。此上は、孝行にして賞はにやならぬぞや。

九重 コレイナア、かゝさま。お前はく。そんなお方とは知らなんだわいなア。勿體ない、コレ、申し、下へおりさんせぬかいなア。

蛇骨 ばいたため、黙れ。おのれ、三つ四つまでは手鹽にかゝり、五つの年から人手に渡り、君傾城の勤めをして、久秋どのに馴れなじみ、氏なうて玉の輿。その母が上座が、何て勿體ない。これからは聲どのに無心がある。親の願ひぢや、聞いて下され。

久秋 ウム、其無心とは。

蛇骨 金がほしい。悔りさしやんすな。大きな事でもない、二箱か三箱、こゝへ出して。大將を聲に取つて不足ながら、そこは^{やほめ}大目に見る。始めての無心。聲どの、綾、錦の巻き物に、金なら、たつた三千兩。今こゝへ出して下され。オ、取つても附かぬあの顔わいの。ホ、、、、。

ト皆々こなしあり。久次障子家體より出て

久次 久秋、そちや乞食の娘と、言ひかはしたなア。

久秋 ヤア、兄上。

九重 久次さま。

柳葉 すりや、最前からの

久次 様子は聞いた。五人の奴ら、これへ参れ。

内より ハア、。

ト橋懸りより岩内、關内、角内、可内、八田平、皆々下に居て

八田 久次公

皆々 御用でござりますかな。

久次 いかにも。久秋、九重、此娶めに繩ぶて。

四人 ハア、。

ト四人ばら／＼と久秋、九重、蛇骨姿を圍ふ。八田平はやはり橋懸りの方に残り居る。

サア、御意ぢや。腕廻した。

ト取巻く。吳竹、柳葉、九重、久秋を圍ひ

吳竹 こりや久秋さま、

柳葉 九重さまには、

兩人 何ゆゑに。

久次 繩掛けるは、傾城の素性、武將の悴、身が弟が乞食娘と言ひかはした科、繩かけて桃山へ引かせ
家老どもの計らひを見る。

關内 サア、久次公の御意、

岩内 乞食に縁組む久秋どの、

可内 繩掛けて桃山へ引く。

吳竹 イヤ、めつたに繩掛けられぬ。傾城は賤しい者と知れてあれば、久秋公の科でもござりますまい

柳葉 ことに、戀ひには上下じやうげの隔てがないとある、世の習ひ。

吳竹 さほど賤しき九重どのに、久次公も心掛けたまへば、

柳葉 めつたに、久秋さまばかりに、繩は掛けられませぬ。

久次 イ、ヤ、身が横戀慕といひしも、斯ういふ事を見出ださん爲。

八田 殊に、久次公は、旦那大炊之助さまに、お預けなれば日蔭ひかげの御身。

角内 久秋公は、四海の跡目と定まりあれば

關内 非人に縁組まれても、苦しうないか。

吳竹 サア、それは。

四人 サア、

柳葉 サア、

侍々 サアノ〜、

久次 面倒な。ソレ、繩ぶて。

四人 ハツ。

ト二人つゝ吳竹、柳葉にかゝり、立廻りあつて、しやんと見得にて止り

柳葉 すりや、どうあつても、

關内 久次公の御意

三人 ぢやによつて。(ト又かゝるを)

八田 四人の者共、待て。

四人 待てとは。

八田 ハチ、九重さまのお袋は、アノ乞食婆、それを科にて久秋さまへ繩掛けるなら、とくと實否じつぶを糺
した上の事。

四人 ても、久次公の御意、

八田 久次公の御意にても、部屋頭のおらが、待てといは、マア待て。
四人 それでも

八田 ハテ、控へて居れ。(ト前へ出る。)

久次 八田平、身が詞を背き、そちが實否を糺すとは。

八田 今一應下郎めが、とつくりと承はつた上、繩掛けなりと、首刎ねなりと、遊ばしたがようござりませう。

久次 すりや、其方が此實否を

八田 蛇の目灰汁で洗うたやうに、

久次 糺して見るか。

八田 お目に懸けませう。

吳竹 八田平、どうぞ久秋さまの。

八田 ハテ、ようござりまする。下郎めが糺してお目に懸けませう。イヤ、ナニ、九重どの、お袋。ちよつとお目に懸かりたい。

蛇骨 アノわしにか。

八田 如何にも。(ト右へこなしあつて、八田平の傍へ往つて)

蛇骨 奴どの、何てござる。

八田 ハテ、そなたさまが、九重さまのお袋ぢやよな。

蛇骨 アイ、實の母でござる。

八田 シテ、そりや何を證據に、親子の名乗りなされたな。

蛇骨 それはなア、娘を産んだ年號、月日、誕生の刻限まで

八田 知つてござらば、今一度承はりたい。

蛇骨 オ、言うて聞かませう。年號は天正元年己辰十二月十日、卯の刻の誕生。しかも、あれが父御の手で、しつかりと書いてござるわいなア。

八田 九重どの、あの通り覚えがござりまするか。

九重 サイナ、常々肌身はなさぬ守り袋に、書いてござんすわいなア。

八田 ウム、すりやいよく違ひはない。シテ、其父御の手で書いたといふ、誕生日の書き物が拜見いたしたい。

蛇骨 オ、心安いこと。見せやんしよ。(ト出さうとして)イヤ、それを出したら、取上げて、後に

知らぬと言はれたら、どうもならぬ。

八田 ハテ、疑ひ深い女中ぢや。ちよつと見さへすりやよいわいなう。お出しなされい。

蛇骨 イヤ、めつたに出されぬ。何ぞそつちからも、慥かな物を取らにや、見せる事はなりません。

八田 ハテ、堅くるしい。えいわく。書いて進ぜう。(ト硯箱を取つて来て) サア、何と書くのぢや。

蛇骨 マア、書いて下さんせい。一札の事。

八田 一札の事。(ト書く)

蛇骨 九重殿誕生日の一通、慥かに受取り申し候、吟味の上相違これなく候はゞ、其許に違ひ料として

一ヶ月に三千兩づ、出し申すべく候、依つて如件。年號、月日。(ト八田平書きじまひ)

八田 これでよいか。(ト取つて見て)

蛇骨 オ、ようごんす。(ト懐へ入れ) サア、こつちの書き付け。(ト書き付けを出す。八田平見て)

八田 シテ、父御は御健勝かな。

蛇骨 サア、これも廿年以前に死なれました。

八田 ハテ、残り多い事の。若後家ぢやの。さぞ便りなう暮らしやつたであらう。

蛇骨 推量しておくれ。廿年このかた閨も淋しう暮らすわいな。

八田 シテ、其亭主は後連れか。但しは幼な馴染かな。

蛇骨 幼な馴染の段かいナ。廿年先きに死なしやつた人より外、つひに外に殿御の肌知らず。本辰ぢやわいな。

八田 九重の誕生日は、此書き付けに相違ないぢやの。

蛇骨 何の違ひがあらうぞいなア。書いた物が證據ぢやわいな。

八田 父御の死なしやつたも、二十年以前に違ひないのぢやの。

蛇骨 幼な馴染の男の死んだ年月、忘れてよいものかいナ。しかも廿年以前正月の十日であつたわいなア。

八田 すりや、兩方ともに

蛇骨 少しも違ひはないわいな。

八田 アノ大がたりめが。

蛇骨 ヤア。

八田 天正元年つものとの巳辰の年から、今年まで繰つて見れば十九年、すりや九重どのは十九歳。
蛇骨 九重が十九歳なれば、何てかたりぢや。

八田 父御の死なれたは廿年以前、九重どの、年は十九、父御の死なれた明くる年に、出生したか。

蛇骨 サア、それはなア、それく、あの子を腹に持つて居るうちに、父御は死なれた。其明くる年に産れたあの子。それで娘は十九、父御は廿年になる。それが何でかたりぢや。

八田 ぬかすな。ヤイく、たつた今いうた、おのれが男の死んだは、廿年以前の正月の十日、九重どの、誕生は十九年以前の極月十月。死んだ月は留つても、廿四ヶ月目に産んだか。

蛇骨 サアそれはナ。オ、それく。辨慶は三年も腹に居た。廿四ヶ月がめつたに珍らしい事でないわいの。

八田 アノ大盗人め。まだ其上に、此書き附けの墨色といひ、紙の色、こりやたつた今書いたものぢやそれを、廿年以前に死んだ父親の手跡ぢやとぬかすので、かたりは知れてあれど、おのれが口から年月の手目を上げねば、おとがひをき、あがるによつて、先刻から口車に乗せたのぢや。何と得心がいたか。

蛇骨 まだく得心せぬ。どうやらどきくして、算用がとんと知れぬ。何でもあれは子でなけりやならぬ等ぢやが。オ、ありや後連れの子ぢや。親父に別れ、明くる年嫁入りした、後の男に出来た子ぢや。

八田 ぬかすな。それもさつきに、其男より外の男に肌ふれた事はない、本腹ぢやとぬかしたてはないかい。ア、こ、なむく大婆めが。

蛇骨 エ、しまった。よう覚えてけつかる奴めぢやなア。

久秋 そんなら九重が

柳葉 母というたは、

九重 嘘でござんしたかいなア。

八田 嘘もうそ、尻の割れた、これがほんの赤嘘でござりまする。

奥竹 それに又、あの九重さまの誕生年月を

八田 知つたる元は、懐中に。(ト蛇骨婆が腹より最前の守袋を引き出す。)

蛇骨 それを。(ト蛇骨婆寄るを振拂ひ)

八田 お覚えがござるか。(ト九重が傍へはいる。九重取つて)

九重 ほんに、こりやわたしが守り袋ぢやわいなア。

八田 さてこそ、いつの間^まにやらちよろまかし、九重どの、母御とは、よつく拵へ事ひろいだな。こ、な大がたりめが。(ト蛇骨婆しよげる。久次思ひ入れあつて)

久次 うぬ。(ト八田平に切り附ける。よろしく留める)

八田 こりや、久次公、下郎めを何となさる、な。

久次 につき女め、ぶち放さうと思つて。

八田 かれら風情に、我君の、お手をおろさるゝには及びませぬ。

久次 でも。

八田 下郎め、よきに計らひます。先づ、お控へ下さりませい。(ト刀の手を突き放す。)

久次 ムウ。(トこなしあつて、刀を鞘に納める。)

四人 シテ、此老いぼれめはな。

八田 門前から追ッ拂へ。

蛇骨 エ、忌々しい。骨折つて、高見からまぢく見て居るやつさ。(ト久次へ掛けていふ。)

八田 うぬ、此様な仕事ひろい達は、久秋公と九重どの、縁を切らす言ひ合せとは知つて居れど、たつて詮議する時は、血て血を洗ふが氣の毒さに、此儘にて生けて返すぞ。有り難いと思つて、とつと、うせう。

四人 老いぼれめ、立ちをらう。(ト割り竹にて叩く。)

蛇骨 エ、立つて居るわいなう。

四人 サア、歩め。

八田 どりや、おれも送つてやるべいか。

蛇骨 お頭さま、何のそれに及ばぬわいな。

四人 きりく歩め。(ト割り竹にて叩き立てる。)

蛇骨 ア、コレイナア。あらくしくしておくれな。姫御前は癩が登るわいなア。

四人 こま言はずと、早くうせい。

ト歌になる。蛇骨婆を先きに、角内、關内、岩内割り竹にて追ッ立てる。八田平あとより割り竹を叩き、手を振つて向うへはひる。九重奥へはひる。久次始終悔しき思ひ入れ。久秋こなしあつて

久秋 八田平が働きにて、事故なう治まる上は、暫く一間へ、ナウ吳竹。

吳竹 さやうでござりまする。一間には、ソレ、今のナ。早うお越しなされませい。

久次 イヤ、久秋、待て。

久秋 ハツ、御用かな。

久次 兄弟のよしみ、其方が口説き、九重を抱かして寐かせい。

久秋 エ、。

久次 兄への孝行、早く取り持て。

久秋 サア、それは。

久次 但しは成らぬか。

久秋 成らぬてはなけれど、どうも其儀は。

久次 成らずばいつそ。

吳竹 マア、。

吳竹、柳葉よろしく立廻りあつて留る。ト「御上使」といふ。太鼓、謡ひに、向うより、早川高景、衣袋、長上下にて、侍ひ附き来る。

御上使。

久次 思ひも寄らぬ上使とは。

高景 御上使なれば、罷り通りまする。(ト立廻り、とめる)。

柳葉 イザ、先づ。あれへ

吳竹 御通りあられませう。

ト高景、上座へ通り、床几にかゝる。久次、吳竹、柳葉並みよく並び居る。

久次 早川高景、改まつた上使の趣きは、

柳葉 委細承りたう存じまする。

高景 最前持たせし品々、一々これへ。

吳竹 ハア、。

ト柳葉、吳竹、最前の臺の物に向うへ並べる。高景こなしあつて

高景 改めて久次公へ、此五節句の品を以て、久吉公より五ヶ條のお尋ね。

久次 高景、其仔細は。

高景 先づ、一番の臺にすゑたは、初春の造り物、梅は諸木の兄として、弟になぞらへし櫻花、落花微塵に踏み散らし、若枝するどき鎗梅の狼藉。

吳竹 オヤ、憚りながら、私しが存じまするには、兄君たる久次公、四海の跡目を接ぎ木の梅花、四方に響るが順道かと存じまする。

久次 吳竹がいふ通り、兄を差置き、弟を立てうといふが、そりや無理といふもの。これにても身共が狼藉か。

高景 桃の節句は誰祭り、即ち桃山の御遊興。内裏を恐れぬ内裏誰、前代未聞の奢りの沙汰。

吳竹 成程、御尤もの御尋ね。奢ると申せば上はなけれど、憚りながら若氣の至り。

高景 五月を祝する菖蒲刀になぞらへし、不動國行の御剣、一應て渡されぬは、跡目を奪はん御所存でござらうがな。

吳竹 サア、それは。

高景 竹にく、りし此短冊、年に一度の天の川、渡り得がたき日本へ、押渡りたる毛唐人と心を合はす叛逆とのお疑ひ。

吳竹 シテ、此栗の一枝の、お尋ねはナ。

高景 栗の名所は丹波の國、父打ち栗の此一枝、親に刃向ふ不幸の振舞ひ。右五ヶ條の御不審、きつと糺し参れよとの仰せを受け、罷り越した早川高景。とくと御思案あつて、有無の御返答承りたう存じます。御返答がござるか。(ト障子家體の内より)

大炊 其五ヶ條の申し開き、此村大炊之助、それへ参つて仕りませう。(ト大畑之助、衣裳、上下にて出る) 夜前より風邪におかされ、暫く保養の間、久次公へ何か御不審の條々。高景どのには御上使の役目、御苦勞千萬に存じます。

久次 すりや、そちが身共に代つて、此五ヶ條の

吳竹 申し開きがござりまするかえ。

大炊 如何にも。某、以前は下郎たりしを、久吉公のお目立ちに預り、久次公の乳母役、莫大の恩祿、御臺さまより預り奉り、立歸る其日より、心を碎く大炊之助、是れ皆久吉公への恩報じ。其上、今日、御上使五ヶ條の御不審、愚案ながらも、遂一に、申し開きが、是れ又、久次公への恩進。御苦勞ながら高景どの、今一應御使者の趣き、承りたう存じます。

高景 第一、君たる久次公を追ひ退け、非道に跡目を繼がんとせられし、第一の箇條。

大炊 ハツ、憚りながら、大炊之助めが存じまするは、實生えの花の弟君を差置き、繼穂の兄君を跡目に立てるが義理順義。此方よりは其方へ疑ひのかずく、と申せば、詞に角が立つ。そこを察して久次公、わざと身持ち放埒は、愛憎を盡かされ、追ひ出され、義理ある久次公に、跡目を繼がせんといふ御所存、と申したらば、何と、此申し開きは立つてはござらぬか。

高景 又、此紙雛の送り物は、桃山の御遊興。是れ二ヶ條の御不審。

大炊 只今申す通り、奢りの沙汰は四海の跡目、久次公へ譲らんと申し召す御仁心から。

高景 シテ、菖蒲刀に喩へし國行の御剣、御不審の三ヶ條。

大炊 其儀は久吉公御發向の折柄、久次公へお預け、餘人が渡せと申したとて、迂濶にお渡しあらうか。

高景 先達て唐土より、此土へ渡りし謀叛人と、心を合はすと、御不審の四ヶ條。

大炊 ハテ、仰々しきお疑ひ。其又、謀叛といふ、何ぞ慥かな證據ばしござるかな。

高景 證據といふは世の取沙汰。

大炊 世の取沙汰は證據にはなりませんまい。

高景 天に口なし、人をして言はしむる、周南、召南、十五の國風、皆證據になつてないか。

大炊 ハ、ハ、ハ、ハ、それこそ今、貴殿がいつた唐人のよまいごと。何ぞ慥かな證據がなくては、謀叛

人とは申されまい。

高景 然らば又、此父打ち栗の一枝。不孝の罪の第五ヶ條。

大炊 不孝と見せしは、身退かん一つの手段。

高景 イ、ヤ、其言ひ譯は聞いく。まことに身退かんと申し召さば、しやう模様もあらん。それに何ぞや、親を親とも思はぬ悪心、刑罰、其罪不孝より大いなるはなし。其刑罰を糺す武將ともなるべき御身を以て、道に背きし御振舞ひ。此申し開きは、あるまい。

大炊 すりや、如何やうに申しても

高景 不孝の罪遁れがたき五ヶ條の申し開き、非を理に曲けても久次公の、お命助けうと思はる、貴殿の忠心感じ入る。さりながら、御母公を始め、諸氏の面々、毎日の評定にも、たとへ諫言仕り候ふとて、一旦の得心にて、又候や、悪心や奢りを始めん。所詮助け置いては萬民の歎き、切腹

させいとある、久吉公の嚴命。

久次 ヤア、奇ッ怪な高景。最前より蟲を殺して聞いて居れば、さまぐのたは言。もう此上は、四も五もいらぬ。四海の跡目は此久次と立歸つて言上せい。見るも中々、けがららしい。

ト三寶を蹴散らして、奥へついとひる。

高景 ヤア、法外なる振舞ひ。久吉公の詭意なれば、我君も同然。引ッ括つて御殿へ引け。

トツツと立つ。大炊之助、高景が鎧を捉へてとめる。皆々、こなしあつて

大炊 待つた、高景どの。御立腹は御尤もながら、大炊之助お願ひあり。先づ、お控へ下されい。

高景 ムウ。願ひとあるを、聞き届けぬもいか。シテ、其仔細は。

大炊 暫く。(ト高景を宥め) イヤ、ナニ、奥吳竹、柳葉もろとも、奥へいて、御短慮な久次公のお側を離れるな。

吳竹 畏りました。サア、柳葉おぢや。

柳葉
アイ。

ト歌になり、兩人こなしあつて奥へ入る。大炊之助思ひ入れあつて、右の梅の木、立木の三寶の前に置き
大炊 大炊之助がお願ひ申し候ふ。何卒久次公の御助命。預り歸りし其日より、種々様々に心を碎く諫
言も、丁度けふが五十日。此大炊之助が身は、こつか(ば?)に砕いても、何卒久次公のお命助くる
仕様は、此花の、今を春邊と咲き返る、御上使の情けの室咲き。

高景 オ、天晴れの御心底、憚りながら、高景感心仕る。シテ、大炊殿の御思案は。

ト大炊之助、梅の枝を持って

大炊 こゝを切れ、と言はぬばかりの梅の花。

高景 ムウ。いはぬばかりの梅の花。

大炊 サア、子々を切れ、と言はぬばかりの梅にたとへし、久次公の、お身代り。

高景 かゝる例は、源の満仲公、家臣たる仲光に、美女御前の首討てと以ての外の怒り。

大炊 討てとあるも、お主なり、

高景 討ち奉るも、お主なり、

大炊 如何はせんと、當惑の折に、幸ひ我子の幸壽丸、美女御前のお身代りに、討つて此世に名を残す。

高景 心は同じ忠義の道、其仲光は幸壽といふ俸が爲に名を揚げる。久次公のお身代りに立つべき俸は
大炊 サア、其お身代りは此梅の幹。花の身代り、古い木の此、サアこゝを切れと、言はぬ心を推量あ
れ。

ト大炊之助いろ／＼こなしあつて

高景 ハテ、面白き花の身代り。造り花と知りながら、打折つて歸るも武士の情け。御臺所の御心底、
汲んで知れとの此短冊は。(ト竹に括りし短冊を出す。大炊之助見て)

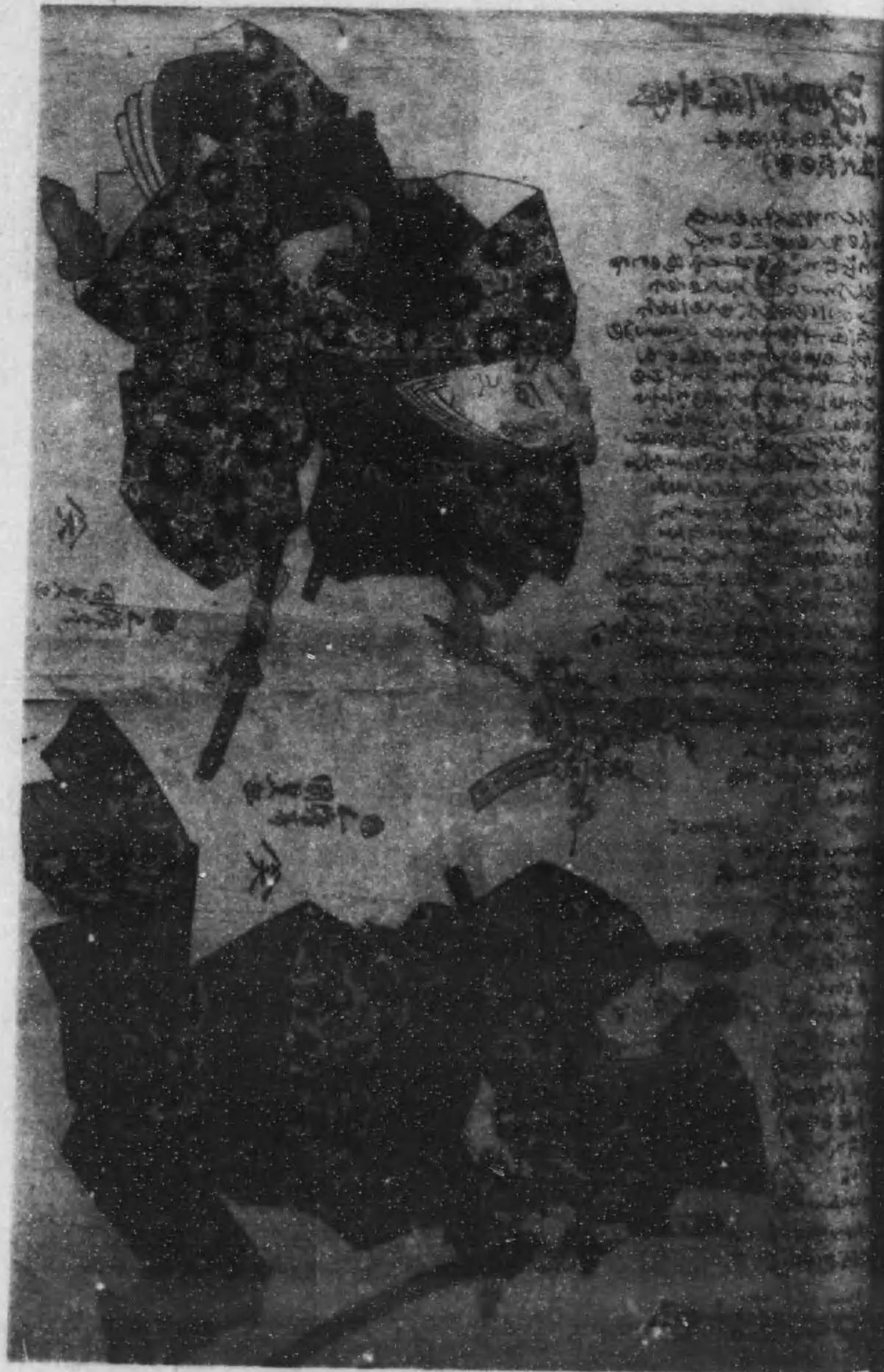
大炊 忘れても、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水。

高景 六玉川の其中に、高野の奥の玉川の水、人あやまつて汲まんことを恐れ、忘れても汲みやしつら
んと、毒あるを戒めの此一首、

大炊 ムウ。毒を汲むなどある其歌の心。切腹せよと久吉公の嚴命。それに却つて和らかな蘭生の方の
情けの歌。

高景 高野の奥へも身退き、剃髮染衣の姿ともなすならば、それこそ優曇華の花、七寶の玉の臺の玉川
の水。

大炊 流れは同じ忠義と情け。



高景 染める衣の玉川や、

大炊 二つの思案は奥のひとま一間。

高景 梅の返事、

大炊 短冊の謎と、(ト立上り、こなしあつて)

高景 こゝを切れ、と言はぬばかりの梅の花、

大炊 高野の奥の玉川の水、

高景 とつくりと御思案召され。

ト歌になる。高景こなしあつて、障子家體へはひる。大炊之助ひとり残り、色々思案して居る。梅懸りより八田平出て、しかくあつて

八田 申し、お旦那さま、

大炊 ムウ。八田平。

八田 只今の様子、残らずあれにて承りましてござります。久次公の御首討つ、お渡しなさつてはこれまでの

大炊 ヤイ、下郎め、何を小差出た。控へてをらう。

八田 膝とも談合。時の用には、鼻缺けの猿智慧でも、お役に立つ事もござりませう。是非、久次さまのお身の上は

大炊 又々。奥には高景が居召さる。

八田 どうあつても、久次公のお首を

大炊 イ、ヤ、久次公のお首は討たぬ。

八田 シテ、御上使へ申し譯は。

大炊 久次公の、お首を渡すと(ト大炊之助、物言はずと、最前の梅の花の枝を出し)久次公の、お首は是れ。
(ト八田平思案して、大炊之助が前へ坐り、首さしのべ)

八田 お切りなされませ。

大炊 何と。

八田 最前高景どのへ、お詞を番はれし花の身代り。大將人形と下司奴の一文首。切らず玉奴(?)めが首を切つて、憚りながら、久次公のお身代り。

大炊 ハテ、幼少より傍近そばう召仕うた者ほどあつて、エ、しほらしい健氣けんきな覺悟。しかし、もはや身代りにも及ばぬ。

八田 久次公の、お首をも討たず、身代りにも及ばぬとは。

大炊 死ぬるばかりを、忠義とはいはぬぞよ。(ト大炊之助、旨を教へる。)

八田 すりや、お旦那の胸中に、

大炊 花も實もある(ト大炊之助、八田平顔見合せ)橘の盛りぢやよなア。

ト歌になる。大炊之助、こなしあつて、奥へはひる。八田平一人残り

八田 お旦那の今のお詞、ハテ、どうぢやなア。儘よ、ドリヤ、部屋へ往て休まうか。

ト往かうとする。障子を開き、高景床几に、いり居て

高景 名を聞いて、又見直すや草の花。(ト八田平立止り、こなしあつて往かうとする。コリヤ、下郎。

八田 ネイ。あなたは御上使高景さま。御用がござりまするか。

高景 顔を上げい。ハテ、健かな男ぢやな。シテ、名は何といふ。

八田 下郎めは、八田平と申します。

高景 用はない。次ぎへ立て。

八田 ネイ。(ト往かうとする。)

高景 コリヤ、待て。

八田 ネイ。(ト戻る。)

高景 名は何。

八田 下郎の名は八田平。

高景 ハテ、八田平ぢやよな。

ト障子さす。歌になる。トこなしあつて奥へはひる。ト久次一間を出て、呼ぶ子を吹くと、橋懸りより

關内、角内、可内、岩内出て

四人 久次公、御用かな。

久次 いかにも。久秋に科を拵へ、追ひ拂はうと、九重が落せし守りを證據に、非人の娘と偽りし事も

八田 平めに見出たされ、最前の仕儀。殊に、高景上使となつて、我が積悪露顯の上は、そち達に

言ひ附け置いた通り、後ほど、コリヤ。(ト岩内に囁く。岩内段々さやく。)

岩内 すりや、かねての手配り、

三人 番手を定めて、

久次 必ず

四人 ハア。

トばら／＼と橋懸りへはひる。始終此うち合ひ方にて、久次こなしあつて、此前より吳竹、久秋、奥より出懸け、見て居る。三人ふつと顔見合せ、こなしあつて

久秋 兄上さま。

吳竹 久次公。

久次 久秋。吳竹。すりや、今の様子を

久秋 やつぱり四海の跡目を、お望みなさる、今のお詞。

久次 それ見た久秋。うぬ。

ト切りかゝる。吳竹の留るを引退け、久秋を引附けるを、高景つか／＼と出て、久次を引廻し、久秋を圍ふ。「うぬ」と又寄るを、高景、最前の梅の枝にて、散々に引据ゑる。久次其手をぐつと取る。

久次 高景、そちや、主をなぜ打つた。

高景 イ、ヤ、家來てはござらぬぞ。

久次 ナニ、家來てないとは。

高景 久吉公の上使に立ちたる此高景、けふ一日は久吉公。花物言はぬ梅の折り技の折檻。其短慮が御身の禍ひ。四海の跡目治むべき大將が、輕々しき御振舞ひ、非道の働き、奢りの條々。剩へ、第

一若君久秋公を、お手討ちとは、非道を以て四海の繼目、中々繼ぐこと思ひも寄らず。大悪無道を矯め直す梅の打擲、父御の御意見、何と骨身にこたへたるか。(ト散々に打つ。久次こなしあつて)

ト太刀振上げる。此時、大炊之助、無紋の上下、白小袖にて、三方に九寸五分、最前の短冊を載せて、つか／＼と出る。久次をこれにて留め、じり／＼と隔て、よき所にて

吳竹 ヤア、此姿は。

大炊 梅の身代り、只今、お目に懸ける、高景どの。

吳竹 エ、そんならお前が切腹か。

高景 久次公に成り代り、申し譯の切腹とは、ハテ、天晴れの忠臣ぢやよな。

久次 こりや此方がわれに代つて。(ト大炊之助、久次をきつと見て、身を顛はし)

大炊 エ、こなたはなう。其心を改めん爲、歸る其日より色を替へ、品を替へての諫言。火を以て火を鎮める道理。身請けせられし傾城共まで、大炊が屋形へ引入れしも、少しは心を和らうかと思ふに違ふこなたの悪心。其傾城も、ひとり久秋公の思ひ者。今一人は御家來の瀬川采女が相手とやら。これとても道ならぬ横戀慕。心に隨はぬとて責めせつちやう。傾城遊女てさへ、筋な

き人には肌觸れず、操を破らぬ健氣な兩人。それにはかへて、こなたはナア。たれあらう我國無
双の名將といはる、眞柴大領久吉公の御名跡たる御身を以て、傾城遊女に劣りし魂ひ。久秋公
には親兄の禮を重んじ、わざと放埒に身を持つて、愛憎をつかされ、身退き、こなたに跡目繼が
せんとお心遣ひ。御母公には憐み深く、所詮直らぬ性根を見込み、高野の奥へ身を遁れ、出家
遁世の身になられよと、殺して生かすお情けの仰せも背き、此大炊めも、こなたゆゑ命を捨て、
の御諫言、親、弟、御家來まで、身を捨て、の御諫言。心を碎き泣き悲しむは、是れ皆こなた一
人の心から。これほどまでも心を盡すが、こなたの目には見えませぬか。耳へははひりませぬか
今までも近習、外様、町人、百姓に至るまで、科なき者をお手討ち、それに繋がる親兄弟、こな
たに怨みの掛かるまいか。あるまいか。其罪科を我が身に受けての此切腹。斯くいへばとて、大
炊之助、さら／＼命を惜まねど、同じ捨つる命ならば、こなたを眞の大將に仕立て、捨つるなら
ば、切腹は戦場の討死、につと笑うて死にますわいなう。某此の儘相果てなば、たれあつて諫む
る者なく、一旦は大炊之助めが忠義に面じて助け置かれても、終には君のお怒り、母御の情けの
綱も切れ果て、切腹ならまだしも、六條河原の敷き皮に、屍は、犬、狼、鷹、烏の餌食にならし
やらうかと、思ひ廻せば、大炊之助、死んでも眼は、えい閉ぢませぬ。何とぞ母御の詞に隨ひ、

剃髮染衣の姿となり、親兄弟や此大炊めが、心を休めて下さりませいなう。

吳竹 忠義とは申しながら、切腹をなされずとも、外に御思案はござりませぬか。これと申すも、久次
公、お前のお心一つにて、夫の命、生死の境、心直して下さりませいなア。(ト泣く久秋も潤れて)
久秋 此久秋がないならば、跡目に極まる久次公、かゝる歎きもあるまいに、儘ならぬ世の盛衰ぢやよ
なア。

ト吳竹そつと立ち、高景の側へ行き

吳竹 申し、高景さま、御上使のお情けて、久次さまの、お身にも障りなう、夫の命も恙ない御思案は
ござりませぬか。

ト高景の袖を控へる。高景物言はず顔を背ける。吳竹又つゝと立ち、大炊之助の側へ行き

コレ、申し、大炊之助どの。いかに武士の習ひぢやとて、切腹とはあんまりな思ひ切り、外に御
思案はござりませぬか。思案しかへて下さりませいなア。

ト大炊之助に取付き、大泣き。大炊之助、吳竹を取つて、突き退け

大炊 ヤア、未練のやつのおのれも武士の女房でないか。めろ／＼と何ほえる。御上使の思し召し、
控へてをらう。

吳竹 それでもあんまり

大炊 又々。未來の縁を切らうか。

吳竹 サア、それは、

大炊 控へいといはゞ、控へてをらう。

吳竹 アイ。(ト吳竹泣く、控へる。大炊之助、吳竹しかくあり。)

大炊 サア、久次公、此大炊之助めが死後の願ひ、御臺所のお情け、親の御恩を忘れても、汲みやしつらん旅人、高野の山へ先づお登りあり、御先祖の間ひ吊ひ、其次ぎに、憚りながら、某への御廻向、千部萬部の經よりも、有り難う成佛いたしますわいなう。(ト久次まじくして居る。)

久次 成佛、嫌ひぢや。出家、いやぢや。(ト吳竹、久次が顔を詠め、思ひ入れあつて、傍へつゝと寄り)

吳竹 エ、こゝな大悪人さま。云ふまいと思へども、大事のく^をの夫を殺すのはなア、皆、お前の心から起ること。ちつとは聞き入れて善心になつて下さりませ。何ぼう家來の罰ぢやというて、當るまいともいはれませぬ。エ、恨めしや、お主さまめ。あんまり胸愆てござりますわいなア。

ト取り附き、大泣き。

久次 ヤア、主に向うて難言過言。詞が過ぎると手は見せぬぞ。(ト吳竹、久次へ詰め掛け)

吳竹

お手討がこはいとて、言ふこと言はずに居ようか。いつそ手討に逢うて死にたいわいなう。サア切つたノ。エ、こゝな悪人、大悪人。サア。(ト膝にて詰め掛け、身を顛はし、いろくあつて)

久次 さうぬかすと、いつそ。(ト吳竹の首をぼんと切る。)

久秋 ヤア、吳竹を、

大炊 こりや、あんまり。(ト久次、大炊之助を引附け、三方にて散々に打据ゑ)

久次 うぬが。サア、眞の忠義と思はゞ、某を四海の跡目に立つる筈。此久次は、短氣は母の胎内を出るより産附けた氣質。附け焼刃で直らうか。時により、折により、短慮の諫言ばかりにて、跡目の事はどこへやら。剩へ、高野へ登り、出家せよとは穢ららしい。

ト散々に打据ゑる。大炊之助、髪も亂れ、打据ゑられ、じつとこたへる。

大炊 大炊之助を打擲して、こなたの心が直るなら、ふたつしやれ。現在の女房を目の前に殺されて、此身をすだく^くに切り刻まれても、さらく^く無念には思はねど、たゞ無念なはこなたの魂ひ、善心に成つてさへ下されば、大將にしたい、天晴れ武將と呼ばせたい。其氣質が直らいては、四海の武將には成られぬ。其短氣が直らねば、大將にはして置けぬが、こゝの所をお氣が附かぬか。お心が附きませぬか。情けない。神佛にも合はさぬ手を、こなたに合はす。コレ、大炊之助が拜

みまする。何卒御本心になつて下されい。(トいろ／＼あり)

久次 これより館へ踏み込み、母を始め諸大名、われに背ける奴原は、一々蹴殺し、四海の跡目を繼いで見せう。

大炊 詞を盡し、理を盡し、いかやうに御諫言申しても

久次 いつかなく、翻さぬ。

大炊 すりや、どのやうに申しても。

久次 くだい。

大炊 ハツ。(ト大炊之助思案を極め)さう性根が定まれば、是非に及ばぬ。

ト九寸五分を取上げ、久次が腹へ突込む。久次ウント苦しむ。

久次 ヤア、兄上には、心がらとは言ひながら、是非もない此有様。

ト久次苦しきこなしあり。

久次 エ、口惜しや。大炊之助、主を殺す大罪人。追ッ附け思ひ知らずぞよ。(大炊之助こなしあつて)

大炊 主を殺す大罪人と、お心が附いたらば、なぜ親御に刃向ふ心を直しては下されぬ。御臺さまの御情けの高野の奥の玉川の水、流れ泡となつたる悪心。歌によそへし高野の山も、切腹の場所とな

つたか。最前も申す通り、こなたを生け置くは、大炊が未來の迷ひの種。六條河原の敷き皮に乗らうよりは、某が手に掛けたるは、此上の仕合せ。何と思ひ知られしか。

久次 大炊之助が心底、久次公を眞の大將になさん爲、千變萬化に心を碎きての忠義。不便なは吳竹が無慚の最期。

大炊 女房が最期は悔むに足らず。悪人と言ひなし、御主人を手に掛けし申し譯は、大炊之助が切腹

ト大炊之助差添へ手をかける。

高景 ヤレ、はやまるな、大炊之助。久次公の切腹は、おのれが罪おのれを責むる天命。さりながら、悪人なれども久吉公の御惣領、立歸つて此通りを言上申し、善惡共に我君の御誼次第、久次公の切腹を見届けし上は、もはや高景お暇申す。

久次 大炊之助には兄上の介錯し、御亡骸は高野山へ取納めい。兄上といひ、吳竹まで、はかなき最期も、何れとも

高景 植ゑて見よ、花の育たぬ里もなし、

大炊 心からこそ、身もいやしけれ。

高景 然らば此ま、。

大炊 御上使、御苦勞。

高景 お暇申す。

ト合ひ方になる。高景、久秋を先きに立て、侍皆々附添ひ、靜かに向うへはひる。大炊之助跡見送り、思ひ入れあり。

大炊 四海の武將久次公、千秋萬歳、お目出たう存じ奉りまする。

久次 心得ぬ大炊之助、此久次を武將といさめ、初めに似ず恐悅の體は。

大炊 四海を奪ふ反逆の企て。

久次 すりや、某が謀叛の存念を、達する所存よな。

大炊 恐れながら、忠義の道に二つはなし。

久次 然らば何ゆゑ、某を手に懸けしぞ。

大炊 高景を欺かん爲。

久次 ヤア、何と。

大炊 心入れあつて突込みし九寸五分、養生は家に傳はる良藥あり。切腹を見届け歸りし上は、猶も心の油斷を幸ひ、臍を固むる君の大望。

久次 オ、頼もしき忠義の臣。久秋は手に足らず、父久吉を討亡ぼし、四海の武將は此久次。

大炊 オ、天晴れなる御一言、君一戦に及ばず、敵何萬人あるとても

久次 物の數にもならず、應おつ取つて下知なさば、

大炊 勝利あらんは目のあたり。旗本に隨ふ勇士の……併し、御旗は。

久次 心安かれ、大炊之助、われ多年盗み置きし、瓢の旗。

大炊 ドレ。(ト旗を取り、思ひ入れあつて)今日只今、四海の武將、此村大炊之助。

久次 汝四海の武將とは、シテ、予の身の上は、

大炊 元來、某は、異國の者なりしが、眞柴大領久吉に我が領地を切取られ、無念骨髓に徹して、止む

ことを得ず。何卒恨みを散せんと、心を盡すに暇なし。われ唐土に於て、蘇友といへる一人の子

をもうく。乳母に預け、此土に渡り、筑前博多の浦に世を忍ぶうち、又もや兄弟の倅を生ず。唐

土、日本に三人の倅、又逢ふべきの印しにと、爾舎の一木を形見に残し別れしが、蘇友、今、日

本に來りしと聞く。渠を守り立て、四海の武將になさんは目のあたり、われに仕へし順奇觀とい

へる臣、又、此土に於て石川五右衛門といへる隨身の者、心を合せ、事を計る。とくにも汝を斬つ

て捨つるは易けれど、瓢の旗を手に入れる爲、媚び詔ひし忠義、計略なり。とくと我謀計に陥

が召し仕ふ下郎の八田平。

大炊 ア、ラ、心得ぬ高景。われを宋蘇卿とは包むに及ばぬ。下郎の八田平存じまは。

久次 最前汝が物語り、孫子といへる隨身の臣。

大炊 又其孫子を八田平とは。(ト内にて)

蛇骨 其證據は、われくぢやわいのう。

ト蛇骨婆、柳葉、打掛け、衣裳にて、長刀を持ち、奥よりずつと出る。

大炊 ヤア、わりや腰元の柳葉。最前の

蛇骨 非人となつて入込みしは、八田平を見出ださん爲の謀りごと。

柳葉 岸田民部が女房、わくら葉、

蛇骨 同じく母ぢやわいなう。

大炊 シテ、其證據は。(ト民部の母、最前の證文を出し)

母 コレ、此筆法は、今大明に流行する徵明が流儀。未だ日本へ渡らぬ流儀。

柳葉 これを以て八田平を唐人と見顯はした。皆夫民部どのが計らひぢやわいなう。

母 もはや遁れぬ。尋常に、

柳葉 覺悟々々。

大炊 かねて企みしわが大望、かく露顯の元は此久次。わが手に掛けしが、せめての本望。

久次 惡を以て惡を見出だす我計略。者共、參れ。

内 ハッ。

ト可内、岩内、角内、鬮内、源々しき形にて、ばら／＼と出て

岩内 下知に随ひ、八田平は、大勢の組子を以て、取圍ませ置きたれば、籠の鳥も同前。もはや遁れぬ

宋蘇卿、

皆々 動くな。

大炊 さてはとくより伏せ勢あつて、我家の四方を取巻きしよな。宋蘇卿が絶體絶命。唐土の刀の切れ

味日本人に風味させん。先づ血祭りは、久次、そちを。

ト刀を抜き、久次の首をほんど切る。

高景 者共、か、れ。

四人 ハア、(ト取巻く)。

母 但しは、長刀に掛けうか。

ト大炊之助にかゝる。少し立廻りあつて、大炊之助が、るを切る。ばつたりおちて、煙硝ばつと燃える。皆々 ヤア、。(トかへしおすまにて、大炊之助の姿隠れる。)

高景 かねてしつらひ置きし返し襖、案内知つたるわくら葉どの。

柳葉 合點でござんす。

高景 者共、續け。

母 ふんごめ。

皆々 ハア、。

ト捕つたくと、わくら葉もろとも奥へはひる。高景こなしあつて、續いてはひる。内ばたくにて、

九重、花橋走り出て、互ひに行き當り、悔りして

花橋 九重さまぢやないか。

九重 橘さま、こりやマア、何の事でござんすぞいなア。

花橋 何の事とは屋形の騒動。わたしやこれを幸ひに、采女さまの行くへ尋ねに行かうと思ふわいなア。

九重 わたしもどうぞ、殿様に逢ひたうござんすわいなア。

ト兩人うろ／＼こなしある所へ、橋懸りよりばたく。

八田 コレ、兩人、屋形の騒動とは心元ない。何事ぢや。

花橋 サア、何ぢや知らぬが、大炊之助さまの謀り事とやらが顯はれて、上を下へとまぜかへすわいなア。

八田 ナニ、すりや大炊殿の謀叛が顯れたとな。

花橋 さういふ間に、九重さま、ちやつとござんせ。

九重 合點でござんす。

ト兩人向うへ走る、橋懸りより可内、角内、關内、岩内、皆々ぬぎかけにて出て

關内 謀叛の餘類、チンシタイ(？)が家臣、ジユンキクワン、柴田伊賀之助。

三人 繩か、れ。

八田 何と。(トきつとなる。)

四人 其方、柴田伊賀之助と露顯の上、

角内 繩かけるわれ／＼は、

岩内 久吉公の御内、

關内 いろは組の捕り手の面々。

可内サア、遁れぬ所、伊賀之助、
皆々繩か、れ。

八田ハテ、しほらしい。大領久吉の猿に遣はる、犬侍ひ。成らば手柄に、伊賀之助を捕つて見よ。
四人ソリヤ。

トこれより八田平、四人を相手に、烈しきタテにて、よろしく、此うち始終遠攻め早めて打ち立て、よろしく見得にて、チョン／＼返し。
右の道具、東へ引き、跡一間半の亭家體。見附きに白斑の鷹の掛け物を掛けて、前に背貝の卓、香爐卓の下、花活けに橋を投入れにして、虎の皮を敷き、臺に琴を載せ、大炊之助腰掛けに腰掛け、右の亭家體の模様唐造りにして、唐冠、唐衣裳にて、此琴を弾いて居る見得にて、此家體、前へ突き出す。と此うち始終遠攻め早めて打ち、道具留る。大炊之助いろ／＼思ひ入れあつて

大炊時は三月姑洗の律、忽ち變じて大簇の調べとなりしか。ハテ怪しや。易に取つては地雷復。陰陽相打つて、再び久吉が手に返るべき命數ぢやよな。(トこなしあつて、琴を弾く)。

我れ大明に在りし時、宋蘇友といひし一人の倅あり、生得萬人に秀づべき人相あり、乳人に托して唐土に残し置きしが、われを慕うて此土へ渡りしと聞く。未だ對面せぬも残念。

トこなしあつて琴を弾く。此うち始終遠攻め早めて打つなり。

又われ筑前箱崎に身を忍ぶ時、又も二人の子をもうく。兄は三歳にて北野の森に捨て置き、妹は小野攝津の寺に預け置きしも、指折りて、はや廿年の春秋。生涯に廻り逢はん其時の形見にと、三人の同胞に添へし名香は蘭奢木、此年月いつくの浦に育ちしぞ。ア、生死の程も覺束なし。(ト凋れながら) 又かねて心を合はせたる石川五右衛門に、此趣きを告げ知らせ、蘇友が事をも頼み、わが志しを傳へんに、密書の使ひ、ハテ、何としたものであらうなア。(ト思案して) 思ひ出だせしことこそあれ、蘇武が胡國の鷹の便り。(ト掛け地の鷹に心得たる體にて) それは都に歸る鷹、これは先祖徽宗皇帝が名畫の譽れ、鷹の勢ひ。それは有情、これは非情。(ト卓の下の橋の枝を持ち) 江南一株の根、一子蘇友にたとへし此身、黃鶴仙人は橋の實を以て鶴を畫きしに、此鶴自然と抜け出て、靈魂備はり、仙人これに跨つて飛び去りし例しあり。一心留まる此名畫に、一心込めし人間の靈魂を止めなば、非情有情の隔てはあらじ。これは名畫、これは名木。

ト香爐を取つて香を焚くと、いろ／＼にて、掛け地の鷹動く。大炊之助思ひ入れあつて今、名香の徳に依つて、此繪の動く。(トこなしあつて) 天武天皇、吉野山にて、名香を焚き、琴を弾きたまひしかば、天人降つて、五たび袖を翻す。これを五節の舞ひの始めとす。其一曲は。

ト琴を引き寄せ、急な手を弾く。大どろ／＼、鷹の畫抜け出て、大炊之助が拳にとまる。きつとなつて

ハア、名畫、名香、名絃にわが心を込めしゆゑ、稀代の珍事目のあたり、見るも運命盡きざるしるし。石川が在所おこがわれは知らねど、都のうち、靈魂傳はる名譽の鷹、早く達して望みを叶へよ。

ト緒を切る。鷹一散に飛んで向うのと、やの内へはひる。大炊之助鷹の行くへなきつと見て

ハア、揚るわく。雲井に掛けて逸物の羽遣ひ。ハテ、心安や、悦ばしやなア。

トばたくにて、八田平大わらは、技き身を持ち、走り出て

八田 大炊どの、斯く八方を取巻かれたれば、もはや叶はぬ絶體絶命。此伊賀之助が命限り、一方を切り破らん。あとに續いて、一先づ此場を落ちてたべ。(ト大炊之助、こなしあつて)

大炊 ハテ、しほらしい伊賀之助。わが事は氣遣はずと、早く此場を切り抜け、汝が命を、助かれく

八田 イ、ヤ、一旦契約、貴殿と死を共に決するが武士の本意。是非とも、お供く。

大炊 其志しの過分さに、一つの頼み。われ唐土もろこしに残せし一子、蘇友といふ者、此土に渡り居るとの事彼れにわが心を傳へたく、今放ちたる徹宗の名畫。目當めあてはいづこ、白斑しらみの鷹、靈魂備はり飛び行きしが、再び返す古巢ふるすの掛軸。(ト懸け物を取つて)これをしるしに巡り合ひ、共に力を合はせよ、勝正。

ト懸け地をさつと下へながす。八田平懸け地の軸を取つて

八田 すりや、此掛軸かじの白斑しらみの鷹、おのづと抜けて此方の大事を知らせしとは。ハ、奇妙々々。斯かる不思議を見るも、盡きせぬ奇縁。(ト懸け地を巻いて、腰に刺し)大炊殿、お氣遣ひあるな。これよりすぐに。

大炊 身も切り抜けて、又再會。

八田 必ず命全う。

大炊 言ふにや及ぶ。

八田 然らば、おさらば。

大炊 早く。

八田 ハア。

ト行かうとする。組み子ばらくと出て、八田平を取巻く。ちよつと立廻りあつて、八田平皆々を追つて橋懸りへはひる。大炊之助跡見送り

大炊 ハテ、天晴れの若者。首尾よう圍みを切抜ければよいが。(ト此うち東西より高景、久秋出て)

高炊 ヤア、宋蘇卿。櫓の上にて琴を弾ぜし諸葛孔明が智略、汝が手段てだてなれども、もはや叶はぬ、繩か、れ。

久秋 但し降参すれば、父に言上し、高祿を與へん。

二人 宋蘇卿、返答何と。

大景 ヤア、穢らばしい降参呼はり。梢にかけしなり瓢の、嵐に首のかしましくと、取捨てたる隠者の清心。これも瓢の益なき此旗。引裂き捨つる。(ト最前の旗を出して、引裂き捨てる)。

高景 愚かや、宗蘇卿、其族こそは贖物。まことの御旗は先達で、久次公より受取り、これにあるわいヤイ。

大炊 ヤア、口惜しい。斯くまでおのれらに計られし、宗蘇卿の運の盡き。此上は、日本人の種を絶やす。

ト久秋へ切つてかゝる。高景引ツ取つてちよつと立廻り、大炊之助真中に大暴れ。高景、久秋、三人、ろしく見得になり、チョン／＼にて

返し

此ところへ黒幕おけると、一面の高屏せり下げにておりの。始終此うち遠攻め早めて打つと、橋懸りよりわくら葉、凛々しき形にて、組み子大勢連れて出て

わく 大炊之助が屋形の廻り、斯く取巻くも、謀叛の餘類の者を討ち取らん爲、夫民部どの、言ひ附け、

そち達も随分油断いたすな。

皆々 ハア、。

ト内渡りの屏、切破る音する。わくら葉きつとなつて、皆々目くばせして、嚙く／＼にして、皆々忍ぶわくソリヤ。

ト聲かける。組み子ばら／＼と取巻く。これより八田平凄まじき大立廻りあつて、よろしく皆々追込み八田 大炊殿のお頼み、一刻も早う、さうぢや。

ト身排へして行かうとする。わくら葉は掛かる。一寸あつて當てる。此前組み子二人出掛け、うね／＼と掛かるを、ほん／＼と切殺して向うへはひる。わくら葉うんと起き上りて、あたりを見廻す。組み子大勢出る。わく 今のが柴田伊賀之助。皆の者、續け。

ト向うへわくら葉組み子連れて走り入る。

ト又返し

右の高屏、東へ引いて取ると、黒幕切つて落す。造りもの、山門の二重、屏、前高欄、たる木、樹形よりしく、右三の兩脇に、一面の樓の花、前のふみ込みの前、霞にて、下は隠れてある。この縁先きに五右衛門、高欄にもたれ、太き煙管にて煙草をのみ、四方の風景を見て居る見得にて、此道具、前へ突出す。かすかに禪の勤め、木魚にて、これを合ひ方になると、五右衛門、方々見廻し

五右 春の詠めを價千金とは小さい譬へ。五右衛門が爲には此價萬兩。もはや日も西に傾き、まことに春の夕暮の櫻も、一入く。ハテ、麗かな、詠めぢやなア。

ト煙草をくはへ、腹這ひになつて見ると、鳥屋の上より少々どろくにて、最前大炊之助が放せし白斑の鷹飛んで来て、山門の高欄にとまる。五右衛門きつと見て

ハテ、心得ぬ。われを恐れず、此鷹の羽を休めるは。(トとつくり見て)此鳥は正しく畫ける名畫の筆勢。しかも白斑。殊に、羽表に記せし文字は、(トこなしあつて、鷹を拳にすま、讀み下し)こりや、これ、慥か此村大炊之助が手跡。(トよくく見て)ナニく、「其方、それがし、かねて申し合はせし通り、久次を四に四海を掌に握らんと計りしところ、却つて久次、高景が計略に依つて、年來の大望空しく一顯なすもの也。」ムウ、すりや、此村が反逆は顯はれしとな。(ト向うへきつと見て)ナニ「頼み置き候ふ一儀、それがし、元は大明十二代神宗皇帝が臣下、宋蘇卿と云ひしもの、本國に一子を残し、日本を覆さんと此土に渡り、謀叛の企て、今日只今、露顯なし、假令空しく相果てるとも、彼の地に殘せし倅、われを慕うて日本へ渡りしと、ほ聞けど、未だ對面は遂げず。この倅強猛不敵の生れに付き、形見に添へし蘭奢木といふ名香を證據に、何卒尋ね出だしわが無念を語り、力を合はせ、久吉を討取る」ト讀むうちいろく思ひ入れあつて「ヤア、すりや、此





上
下

下
新川
中村
歌工門

下
大神
中村
歌工門

下
一
田

村大炊之助と云ひしは、わが父宋蘇卿にてありしか。知らぬ事とはいひながら、生死の程も氣遣はしく、われ幼き時、風波を凌ぎ、此土へ渡りしも、別れし父に對面遂げん爲、方々さまよふうちに、竹地光秀どのに養育に預り、成長して、名も惟任左馬五郎と呼ぶ。竹地氏、仇信長父子を討取り、武將となつて都の地券を許す。これに町人、百姓、諸大名も歸伏をなすも、僅かの日數た、ざるうち、大領久吉の爲に滅ぼされ、無念の最期。其恩を受けしわれなれば、光秀どのの吊ひ軍さ、久吉を討取らんと、討死を止まり、今、石川五右衛門と名乗り、徘徊なすも、人を語らひ、久吉を討取る手段。所々國々へ別れし、父宋蘇卿も、久次、高景が計らひにて、大望顯はれ生死の程も覺束なし。無念なは、これまで心を合はせし此村、父とも又、われを伴とも、互ひに知らぬ親子の心外。鷹の知らせも、無念の密書。何とぞ存命あるならば、心一致に亡ぼす計略。おのれ、久吉、父の無念に、光秀公の恨み。たとへ事顯はれ、假令油で煮られて、肉がとろけ、骨は碎かる、とも、此無念、晴らさて置かうか。

トきつとなつて思ひ入れあり。よろしく見得。チヨン／＼にて、此道具段々せり上げてくる。山門の下
の石段、久吉、大炊之助と早替り、木綿やつしにて、順禮の形にて、笈摺を掛け、笠こしにたづさへ、
杖の先きに筆をく、り附け、山門の柱に樂書きをして居る見得。東西、残らず、櫻の幹あらはれ、道具
見事に留る。順禮、書きしまひ、花道の角へ來る。五右衛門「心得ぬ」と下を見る。振り返つて

久吉 石川や濱の眞砂はつくるとも (ト讀み上ぐる)。

五右 ヤ、何と。

久吉 世に盗人の種は盡きまじ。(トきつと見上げる。見おろす。互ひに顔を見て)

五右 さては。うぬ。

ト手裏劍を打つ。久吉柄杓にてくわつしと受け

久吉 順禮に御報謝。

ト兩方、とたんの見得にて

幕

三幕目 大手並木松原の場

登場人名

五右衛門手下、大坂の伴。同、塚の八。同、釣鐘の權。同、片田の小雀。同、小鮎

源五郎。世尊寺中納言。松田勇助。高景妹。政木。中納言家來、二人。六十六部、本名、順喜

觀。石川五右衛門。三本木舞子。男一人。葬禮の者、二人。乗り物舁き、二人。

遣り物、黒幕、大手並木の松原。すべて廣小路の模様。幕内より小鮎源五郎、塚の八、釣鐘の權、此三

人、盜賊の形にて、方々に別れ居る。幕の内より本釣鐘にて備へ、在郷歌にて幕開く。

源五 何と、ふたりの者、お頭の言ひ附けて、此廣小路へ出張つて居るは、此度大領久吉、異國征伐して凱陣の悦びに、公家共が進物を賞ふ。其歸るさに、せしめてこまそと、此やうに待つて居るが、さてく、戻り居らぬなア。

八 サア、其久吉凱陣の悦びて、京中が上を下へともてかへす。其紛れたおいらが働き、金儲けの晝といふは今ぢや。

權 それはさうと、二人の奴原は、東を働くというて出をつたが、まだ戻り居らぬか。

源五 あいつらは、めんよう仕事を假托けて、油ばかり取り居る。お頭にいうて一成敗せねばならぬわ兩人い。さうぢやく。

ト此うち向うより大阪の伴、錢吠をかけたげ、片田の小雀、何やら懐を大きくして出て来る。

小雀 オ、三人の者、早う出掛けたなア。さうしてお頭はまだか。

伴 おいらは、やうく仕事しまうて、今戻つた。

源五 わいらも仕事に事寄せて、のらばつかりかわく。今も小鮎がお頭に告げるといって居る。戻つてちつと商賣に氣を附けい。エ、不精な奴てよあらわい。

小雀 イヤ、氣遣ひしてくれな。わいらに言はれいでも、商賣は精出して居る。ナア、伴よ。

伴 オ、さうぢや。何でも仕事は本望といふのぢやわいヤイ。

源五 こりや珍らしい。わいらが働きを見ようわい。

小雀 オ、見せうともく。伴よ、それもこゝへおこせ。

伴 合點ぢや。(ト大阪の伴、右の吠を前へ出す)

源五 ヤツ、こりやかまげの苞ぢやナ。

八 二人で大方十貫。こりや出来し居つたわい。

小雀 皆、聞いてくれ。けふ伴と連れ立つて、三條通りを通つたりや、宿屋の門口に繋いである馬に附いてあつた此吠、何でもえらいと引ッ掛けて来て、あけて見た所が、こりや見い、かういふ鋼脉酒の粕であつた。

伴 おれが、道理で、軽い吠ぢやと思つて居た。これがほんに、酒の粕働さぢや。

源五 ほんに、確な事は得さらさぬ。二人共にきついごくだうぢや。

八 お頭にいうて成敗さす。待つて居れよ。

小雀 コリヤく。お頭にいうてたまるものか。わいらが情けて、大目に見てくれく。

源五 そんなら、お頭へは言はぬが、其代りに酒買はずぞ。

小雀 ハテ、そりやどうなとするわい。(ト此うち源五郎向うを見て)

源五 コリヤく、皆の者。何やら白いもの着て来るわ。大内の仕丁か。御靈の禰宜か。何でもあいつらをめめかけい。

皆々 合點ぢや。

ト此うち向うより葬禮灰寄せの形にて、△、○、白無垢、淺黄の上下にて、編笠を着て、骨桶を臺に乗せ、しほくと出て来る。五人兩方より挟み

八權 伴 コリヤ、待つて。

△○ エ、。(トびつくりする)

八 二人のやつら、きりくと脱いで行け。

△ エ、めつさうな。わしは相國寺へ火葬に往た灰寄せの戻り。何にも脱ぐものござりませぬ。

○ 此白無垢や上下は、色屋の借りもの。どうも脱がれませぬ。どうぞおゆるしなされて下さりませ。

トふるって言ふ。

源五 コリヤ、皆の者、白無垢や上下より、錢になるは、ふたりのどす。それをたくつて、早う追ッ放

る。あとより高景妹、政木、抜け参りの形、柄杓を持つて出る。

勇助 急ぎの御用ぢや。附くなく。(ト本舞臺へ来る)

政木 抜け参りの者でござります。足を痛め、難儀いたします。どうぞお志しを。

勇助 ハテ、サテ、しつこい。附くなどいふに。(ト振返り、顔見合せ)

政木 勇助ぢやないか。

勇助 高景さまのお妹御、政木さま。

兩人 これはしたり。(ト兩人思ひ入れ、あたりを見て)

政木 不思議な處で逢うたのう。シテ、何も手掛りはないか。

勇助 ハツ、御主人さまの仰せに依つて、所々方々と相尋ねますところ、紀州根來の塔にかゝると聞き、直さま駆け附けましたところ、最早あの地も立退き、此京都へ罷り越したるとの事ゆゑ、

政木 成程、其風聞あるゆゑに、女の身で自らも此やうに姿をやつし、折々の詮義も兄上への孝行ぢやわいなう。

勇助 殊に以て、明日は、中納言さま、大佛殿へ御勅使との儀、主人高景さまにお取持ちせよとの事。

政木 何かに附けて、大事の役目。委細の談合、

勇助 こゝは人目、

政木 向うの水茶屋で、とつくりと。

勇助 政木さま。

政木 勇助、おぢや。

ト此前より小雀、源五郎、八、伴、權、出て、囁き合ひ、兩方に立ち塞がり

三人 合點ぢや。(ト勇助、政木の胸倉を取る)

勇助 こりや、うぬらは、何ひろぐ。

政木 何とするのぢや。

小雀 何ともせぬ。剝ぐのぢや。

勇助 さてはうぬらは盗賊よな。五右衛門が詮義の手掛かり。うぬら引ッ括つて主人へ引く。覺悟せい。

小雀 小癩いはさず、引ッ剝けく。

三人 合點ぢや。

ト皆々かゝる。政木、勇助よろしく立廻りあつて、伴、八、横を政木追うてはひる。勇助往かうとする。

小雀、源五郎引留める。これより少々立廻りあつて、兩人橋懸りへ逃げてはひるを、勇助追うてはひる。

ト伴、八、櫛走り出て

伴 コリヤ、皆、怪我はなかつたか。

八 さて、女に似合はぬえらい奴であつたわや。

權 折角仕掛けた仕事、惜しい事ぢやわい。(ト源五郎、小雀走り出て)

小雀 皆、そこに居るか。さて、面に似は合ぬ、手ひどいやつてあつたわい。

源五 それはほつて置いて、お頭の言ひ附け、世尊寺中納言とやらいふ公家が、明日大佛へ勅使に立つに就いて、今夜、天奏へ往て、戻りは、此廣小路を通る程に、公卿の衣裳が要る。主従共に剝げと言はる、必ず共に、ぬかるなく。

八 まてよ。公家なら大勢の供廻り。こりやよッぼどえらい仕事ぢやわい。

小雀 何をぬかす。公卿侍ひは破れ傘も同前ぢや。

皆々 破れ傘とは。

小雀 ハテ、さいたもさ、ぬも同じ事ぢや。

皆々 こいつはよいわい。

源五 若し手に餘らば、此種が島でおどしてこますが、どうぢや。 (ト種が島を見せる)

小雀 アレ、向うへ見えるは、慥かにそれぢや。必ずぬかるな。

皆々 呑み込んでゐる。

ト橋懸より世尊寺中納言、公卿にて乗り物に乗り、供廻り大勢連れ、出て来る。此供廻りのうちに中納言

言家來一二、みな、揉り仕立ての侍ひにて附き出て、花道へ行きかゝる。

源五 コオレ、酒手を貰はう。

皆々 ヤア、何と。

小雀 大内よりの歸館、大方、酒手はあるまい。身に引ッばつた白無垢衣裳、供の上下、小袖、奴が臺無しも、残らず脱いで置いて行け。

一 ム、さてはわいらは、今噂のある追ひ剝ぎよな。置いて往けとはけちぶとい。此同勢を剝がうとは、身の程知らぬ大盗人め。

二 すべて追ひ剝ぎといふものは、山中の山中に居るもの。それに、をどごちやと思ふ。大内の廣小路、俗に追ひ剝ぎの樂屋は稻むらといへど、見れば稻むらやうなものもなく。此往還て剝がうとは、叶はぬこと、及ばぬこと。

一 それ、明日は大佛勅使のお役目、大切なる大納言さま、わるい者は除けて通るが此方の勝ち

イザ、何れも、御越しなされい。

皆々 さやうでござる。(ト皆々行かうとする。)

源五 コリヤ、待て。うぬら脱がぬが最期、身が手練の種が島にて、どん腹に風穴あけて、みな殺しにするが、どうぢや。

皆々 エ、。

源五 但し火蓋を切らうか。

皆々 サア。

小雀 脱ぐか。

皆々 サア、。

小雀 どうぢや。(ト皆々こなしあつて)

源五 こりや、何れも、何も思し召す。

△ 何というて、わるう意地張ると、どん腹へ風穴をあけられます。

一 名さへ風穴と申すものを腹へあけられたら、定めて風が行き抜けて寒からうと存するゆゑ、此やうにがたくと顔へまする。

二

ヤア、腑甲斐ない何れも。相手は鬼神でもなく、高て人間の盗人、何程の事がござらう。刀の目釘の續くだけは、切つてく切りこなげる、腕に覚えは有り明け櫻、ちりくばつと逃げ散らし、主人のお供仕る。これ見られよ、わが帯せし刀は宇田の國光、抜けば玉散る大焼刃、腕切る、股切る、首を切る。

一 さうぢや、貴殿のいふ通り、手を叩いて齒をぬくの、とんぼう返りして首が落ちるのといふはないか。

二 日本一流、銭がなければ、たゞても直す、はなたれめが。

源五 ヤア、仇口た、かせすと、皆引ッ剥げく。

小雀 合點ぢや。

ト皆々いゝる。よろしく立廻りあつて、二、一、供廻り、乗り物を捨て、臆病口へ逃げて行く。ト合ひ方。小雀、源五郎、八、伴、權、これを追うてはひる。乗り物動き、ふるふこなし。始終合ひ方。ト向うより順喜親、六部にて笈を背負ひ、松蟲を鳴らし、出て来る。本舞臺へ出て

六部 さて、長の日を、そこ、と、當てなし旅のせうどなく、尋ね廻る此姿。ほつと草臥れてのけた。幸ひく。此並み木で一服せう。ヤレく、しんどやく。

ろく

ト笈をおろし、火打ちを出し、煙草のむ。此うち小雀源五郎出かけ居て、囁き合ひ

小雀 六部どの、火を一つ貸して貰はうかい。

六部 オ、これは幸ひ、今打つた所ぢや。サア、のまんせく。

源五 イヤ、火ばかりの無心ぢやない。外にちつと貰ひたいものがある。

六部 外に貰ひたいものとは、何てござんぞ。

源五 酒手がほしい。

小雀 酒手を貰はうかい。

六部 ハ、、、。何の事かと思へば、酒手がほしいとは。エ、聞えた。此松原で酒手と言はんすは、

働きさんすお方と見えるが、黒いに似合はぬ、きつい目利違ひぢやぞえ。わしは是れ諸國修行の六

十六部。或は野に伏し、山に伏し、一錢二錢の合力で、其日を通る修行の身。酒手はこつちへ貰

ふ筈。おどけた事はすとも、持ち合せがあるならば、こつちへ合力して下さんせ。頼みまする

ぞえ、頼みますぞえ。

小雀 イ、ヤ、さうはとぼけさせぬ。斯う見た所が、たゞの六部とは見えぬ形かつかう。

源五 えて、此やうなのが、持つて居るものぢやて。

小雀 先づ、何よりも

兩人 此おひの内。(ト兩方より笈に手を掛ける。六部兩方を振拂ひ)

六部 コリヤ、何とするのぢや。

源五 何ともせぬ、其笈の内を改めて

小雀 酒手を貰ふ。そのけ。

ト兩方よりが。六部よろしくあつて、小雀、源五郎を捻ぢ上げる。

兩人 アイタ、、、。こりや、どうするく。

六部 イヤ、どうもせぬ。此笈はわしが一世帯、お侍ひなら城廓同前。其笈を見ようとは、家探し同前。

理不盡の若い衆ゆゑ、ちよつとかうしたものでござんす。(ト捻ぢ上げる)

兩人 アイタ、、、。さうぬかしや、いつそ。

ト振り放し、兩方より切り附ける。よろしく立廻りあつて、六部、刀を引ツたくり、振上げる。これに

て小雀、源五郎橋懸りへ逃げてはひる。申納言乗り物をあけて見て、ちやつと戸をさし、隠れる。

六部 ハテサテ、役にも立たぬ腕立て。

トあたりを見廻し、笈の内より掛け地を出して

此掛け地を證據に、彼のお方に廻り逢たいものぢやがなア。

ト此前より政木、勇助出掛け居て、此時、政木、六部が向うへ廻り、柄抄を出す。六部惘りして掛け地を隠す。勇助、政木、兩方より六部を挟み

政木 抜け参りの者でござりまする。お志しを頼み上げまする。

勇助 同行二人、連れの者、草鞋錢を頼みまする。(ト六部こなしあつて)

六部 見れば二人共に、伊勢参宮の抜け参りと見えるが、此修行者へ志しとは、こりや大きな間違ひ、目を明いて、杓ふらんせ。龜相な人ではあるわいの。

政木 イ、ヤ、龜相ぢやない。六十六部と姿をやつすは

勇助 即ち六十六ヶ國を、たゞ一呑みに

六部 ヤ、何と。

勇助 サア、只一目に六十六ヶ國、照らしまします御神、太神宮の御利生、

政木 曲つたことはいつかなく、たゞ正直の頭に宿る神風に

勇助 靡き随ふ天が下、是れ皆神德のお蔭ゆゑ、

兩人 有り難い事ぢやござりませぬかいなア。

六部 有り難いとも、忝けないとも、其神國の六十六國、廻り歩く修行の身。

兩人 イ、ヤ、修行者でない。

六部 修行者でないとは。

勇助 身方を集むる大炊が家來、

政木 順喜觀であらうがな。

六部 ハ、ハ、ハ、ハ、順喜觀とは何を以て。

政木 寸分違はぬ此繪姿。(ト繪姿を出す。六部思ひ入れ)。

勇助 殊に、最前の掛け地といひ、

政木 下郎と姿やつしたる、八田平であらうがな。

六部 イ、ヤ、知らぬ。此廣い日本、似た人もないともいはれぬ。又此掛け地は彌陀の尊像。此修行者は存せぬ、知らぬ。

勇助 知らぬとあらば、其尊像、ちよつと拜ませて貰ひたい。(ト掛け地を引き出す)。

六部 コリヤ、何とする。

兩人 其掛け地を。

ト勇助、政木、掛け地を取らうとする。少し立廻りあつて、當てる。勇助、政木ウツとこける。
六部 ハテ、危ないことの。(ト掛け地をしまひ、笈を背負うて) もはやたそがれ、ドリヤ道を急がうか。
ト歌、合ひ方になり、六部思ひ入れあつて鉦を鳴し、靜に花道へはひる。勇助心付き、思ひ入あつて
勇助 慥かに此道。さうぢや。

ト尻引ツからげ、花道へ走りはひる。此前より五右衛門、盜賊の形にて、松の間より窺ふ。此うち政木、
心附いて起き上り

政木 慥かに今のは順喜觀。勇助が見えぬからは、さては跡を追うて往たか。何にもせよ、此趣きを、
兄高景どのへ、さうぢや。

ト行かうとする。此時、五右衛門後ろより出で、刀を引き抜き、政木に浴びせる。政木ムンとこける。
五右衛門、物をも言はず、政木を弄り殺しにする。此うち乗り物をあげ、中納言これを見てびっくりし
て、又戸を閉し、ふるうて居る。

物をも言はず弄り殺しは、最後の盜賊ぢやよな。エ、卑怯な。さもしい。ア、コレ、今の様子、
兄上に知らせたい。此儘死ぬるは口惜しい。いつそおのれを。

トそこにある刀を拾ひ、よろほひながら切附ける。五右衛門刀を打落し、えぐる。政木苦しみながら

エ、悔しい。死にともないくわいヤイ。

ト五右衛門、物をも言はず、えぐる。政木いろくあり、死ぬる。五右衛門、これでよいといふ思ひ入
にてうなづき、其儘乗り物の傍へ行き、戸を開き、中納言を引出す。中納言恟り、ふるびく引出され
公卿 コリヤ、磨を何とするのぢや。

ト五右衛門、中納言の冠、衣裳を剥ぎ取り、突き放す。中納言この儘ばつたりこける。此とたんに小雀、
源五郎、供の衣裳を剥ぎ取り、持つて出で

兩人 お頭、

小雀 まんまと首尾よう、

源五 供廻りはわれく。

兩人 お頭、いよく。

五右 シテ、萬事の手配り、皆の者、參れ。

ト歌になる。五右衛門、冠、裝束を持ち、源五郎、小雀、皆の衣裳を大小にくり附け、かたげ、五右
衛門に附いて、悠々と向うへはひる。トあと合ひ方。ばたくにて橋懸より一、二、探一つ、丸探にて
走つて出で

一 何れも、我君さまは。
 二 まことに、御主人のお行くへ。(ト皆々探す)。
 公卿 ヤア、我君さま。中納言はこれにあるわいヤイ。(トすつくと立つ)。
 二 ヤア、我君さま。御安泰の様子、
 一 千萬悦ばしう存じ奉りまする。
 公卿 シテ、其方達も。
 一 斯くの如くに引ッ剣ぎ、もはや此ところは立退きました。
 二 見れば、我君さまも、お丸裸。
 公卿 皆の者と同格に、剣がれたわいヤイ。(ト泣く)。
 二 盗賊とは云ひながら、情けを知らぬ今のやつら、まだ春ながら寒さも強く、身に沁む風の冷やかさ。
 一 春寒いと秋ひだるいは、こらへられぬと申すもの。御主人のお心根、察し入つて、嘘と存じられまする。
 公卿 推量せよや、方々。

一 吹く風さへも身にしみて、
 二 雲の上人といはる、ものが、今は雲助同前に、
 公卿 主もはだか、
 兩人 家來も裸、
 公卿 裸で還御がなるものか。
 三人 思へばく、

ト中納言、一、二、三人、手に手を取つて、互ひに顔見合せ、じつと泣いて手を離し、向うを見詰め、
 三人一所に

ト泣き落す。此とたんによろしく

幕

四幕目 大佛餅屋の場

登場人物

別木軍藏。吉川藏人。仲人、藤兵衛。下女、おみよ。金貸、小次兵衛。妹、お菊。

姉、お律。早川高景。瀬川采女。順喜観。惣右衛門女房。大佛餅惣右衛門。本名、海田新五。石川五右衛門。大工。代官。下さい、三人。捕り手、中通り部屋残らず。侍ひ大勢。宿老一人。

造り物、平舞臺、赤壁、納戸口、佛壇、西の方、折り返り、二重舞臺附きの障子家體。橋懸り餅店。よき處に門口。すべて本疊み敷き、幕の内よりおみよ、下女の形、襟、前垂れ、お律、お菊、同じ形にて、これも餅を丸めて居る。在郷歌にて幕明く。

みよ サア、おりつさま、これにて三日目でございます。ちつと休ましやんせいナ。

お律 オ、く。今日はいかう精が出たわいの。

お菊 申し、姉さま、わたしも、此間から、お前がたのさしやんすを見て、おもを丸める事を、どうやらかうやら覺えたわいな。

お律 イヤモウ、習ふより馴れと、お菊さまの手附きが大ぶんよなつたわいなア。

お菊 まだ妹をさま附けにさしやんすかいなア。

お律 それでも、お前は、か、さまの育て君なりや、わたしの爲にもお主さま、何ぼ今、かうしてこちらの内へ来てござつても、お菊とは、どうやら言ひにくひわいなア。

お菊 ほんに縁といふものは變つたもの。お前は惣右衛門さまのお子、後連れの、あの乳母をしるるべに

尋ねて来た、と、さまの手前は乳母の娘にして、連れ子のわたし、眞實の父さんには生き別れ、母さんには死に別れ、便りないわたしが身の上。惣右衛門さまやあの乳母を、ほんまの父さん母さんとも、お前を眞實の姉さんぢやと思つて居る程に、やつぱり、妹、どうしや、かうしやといふて、可愛がつて下さんせ。

お律 可愛がるの、何のと、勿體ない事。ホ、ホ、ホ、ホ。

みよ ほんに、此マア、かみさんは、なぜ遅いぞいなア。

お律 遅いついてに、こちらの人次郎作どのは、どこへ往てるさしやんすやら。女房の案じをちつとは思ひ遣つて、下さんしたがよいわいなア。

みよ あの次郎作さまは、わるい癖で、ちよつと家を出ると、戻らしやんせんが、おりつ様、外で悪性でもさしやんすかいな。

お律 何のいの。さういふ様子も見えぬが、兎角ちよく出ては戻らず、けふて十日の餘にもなる。それで辛氣でならぬわいな。

お菊 わたしはまだ、お前のお連れ合ひの次郎作さまにお目に掛かりませぬ。どうぞ早う戻らしやんしたら、近附きに成りたうござんすわいな。

お律 サア、早う戻つて下さんすりや、ようござんすわいな。

ト在郷歌。ト此うち向うより惣右衛門、親仁の形、金貸小次兵衛、仲人藤兵衛、やつし、羽織にて、一所に連れ立ち、出て来て

藤兵 コレ、惣右衛門どの、こなたはめつたに受け合つたが、よいかや。

惣右 ハテ、ようなうて何とせう。女房の連れ子でも、おれが娘のお菊、どうせうと、おれ次第ぢや。

小次 それで、あの藤兵衛どのを頼んで、敷き金持つてお菊の掣にならうといふ相談。早う埒が明けて貰ひたい。

藤兵 惣右衛門どのより頼みのえ、小次郎兵衛どのに咄して、こちらは相談は極つたが、水心の内儀やお菊が

惣右 サア、よいてや。何分、娘と盃さしや、濟むぢやないか。

小次 それをこつちが、急ぐのぢや。

藤兵 けふ中に極つて、祝言をさしたがよいわいの。

惣右 成程、さうしませう。マア、二人共、門口に待つてゐて、娘や女房にとつくりと咄してから呼ぶ程に、其時、内へはひつたがよい。

藤兵 小次 そりや合點ぢや。(ト言ひ、本舞臺へ来て、小次兵衛、藤兵衛、門口に居る。惣右衛内へはひる。)

惣右 おば。娘。今戻つた。

お律 と、さん。けふは、お前、どこへ往かしやんしたえ。

惣右 どこへというて、ちつと差當つて金の工面。……ア、イヤ、誂への餅どもはどうした。

みよ アイ、そりや、お菊さんやおりつさんに手傳うて貰うて、皆持たして遣りましたわいな。

惣右 オ、そりや、大ぶん精が出た。シテ、此ばはどこへ往た。

お菊 アイ。けふは墓参りしてござんしたわいな。

惣右 何ぢや、墓参り。エ、いそがしいのに。ア、かうつ。けふは、オ、ソレ、墓参りする筈ぢや。

ばが先きの連れ合ひ、お菊が實のて、親の命日ぢやが、ア、早う戻つてくれりやよいが。そりやさうと、お菊、そなたにちつと咄したい事がある。

お菊 そりやマア、何事でござんすぞいな。

惣右 外の事でもないが、そなたにちつと無心がある。

お菊 改まつた、と、さんの無心とは、マア、どんな事でござんすぞいな。

惣右 其無心といふは、そなた、男を持つてたもらぬか。

お菊 エ、。

お律 ア、コレナア、と、さん。あの子には深う言ひかはした、殿御のあるといふ事は、お前も知つて居やしやんすぢやないかいな。

惣右 サア、知つて居る。定めて膽が潰れよう。いやぢやあらうが、ちつと急に金が要る。幸ひと敷き金持つてくる男、どうぞ持つてたも、お菊。

お菊 そりやマア、誰れてござんすぞいな。

惣右 言うても、そなたは知るまい。金貸しの小次兵衛といふものぢや。そなたにはまだ何とも言はぬ先きに、もう約束して、返事が早う聞きたいというて、口入れの藤兵衛と連れ立つて、門口へ来て、待つて居るわいの。

お律 エ、。

お菊 サア、義理ある父さんのお頼みなれど、こればつかりは

惣右 言ひかはした男へ、義理が立たぬといふのか。

お菊 アイ。

惣右 フウ。男への義理は立て、此親へは義理は立ていても大事ないか。

お菊 勿體ない。さうてはなけれど、

惣右 さうてなけりや、持つてくれ。ハテ、勤めしたやうにもない。口先きてちよぼくさ。抱かれて寝いても大事なない。盃さへしまつたら、それで済む。わしが何もかも呑み込んで居るわいヤイ。

お律 と、さんがあのやうに、呑み込んでゐると言うてぢや程に、盃ばかりなら、マア、アイというて居やしやんせいな。

お菊 そんならマア、アイでござんすが、抱いて麻ようというたら、

惣右 ハテ、そりやおれが呑み込んで居る。マア、早速得心してくれて、過分なく。イヤ、コレ、小次兵衛どの。藤兵衛どのも、なぜ入らしやらんぞいの。

ト此うち小次兵衛、藤兵衛、「もうよいかい」といふ事いろくこなしあつて

藤兵 オ、惣右衛門。首尾はよいか。

惣右 ようなうて詰まるものかいな。わるけりや、初手から受け合ひはせぬわいなう。

小次 ヤレ、嬉しや。藤兵衛、有り難い。

藤兵 サア、早う家へ入らしやれ。ト小次兵衛、藤兵衛、家へはひる。

みよ 小次兵衛さん。ようござんしたなア。

小次 おみやよ。二人の娘達。此間は逢ひませぬ。

お律 ほんに、小次兵衛さん。二人共に、ようござんしたなア。

藤兵 コレ、小次兵衛どの。そんならこゝな家の衆は、皆近附きぢやの。

小次 ハテ、近附きなりやこそ、命から二番目の物を出して、こちらの相談ぢやわいの。

藤兵 互ひに知り合つて居る中なら、こりや早う相談が出来た筈ぢや。

小次 サア、此間から、こゝの家へ戻つて居るあのお菊、ても美しいものぢやと思つて居る所へ、今の相談、ほんの、あいた口へ、大佛餅の娘といふは、此事ぢや。

藤兵 イヤモウ、とかく双方得心の上、早う埒さへあけば、こつちはよいぢやてや。

小次 併し惣右衛門どの、こつちは大枚の敷き金持つて來ること、お菊がなま得心では、どうもならぬぞや。

惣右 ハテ、知れた事。祝言さすからは、いつまでもかはらぬ女夫、ナウ、お菊。

お菊 アイ、何ぢや知らぬけれど、とゝさんが呑み込んで居ると、言はしやんすに依つて、マア、アイでござんす。

小次 エ、そりや忝い。

藤兵 めてたいく。

惣右 お律、ソレ、二人の衆を奥へ連れまして往て、お菊も一所に盃さしやいの。

お律 アイ、心得ました。盃ばかり……ア、大事の祝言の盃。サア、奥へござんせ。

藤兵 オ、それがようござる。おれも仲人役ぢや。奥へ往て盃事。

小次 早速盃とは有り難い。

お律 サア、ござんせいな。

ト歌になる。お律、お菊、小次兵衛、藤兵衛を連れ、おみやも奥へはひる。惣右衛門こなしあつてはひる。ト向うより采女、風呂敷にて脇差を包み、着流しにて出て來て、いろ／＼あつて

采女 こゝが正面の大佛餅、廊で言ひかはした花桶が親里。家での名はお菊とやら。どうぞ來てくれいというてよこしたが、つひに知らぬ處。マア、何というて入つたものであらう。

ト門口へ來て、家の様子を見て、家に人がないゆゑ、そろ／＼とはひる。うそ／＼あたりを見廻す。ト橋懸りより〇、大工の形にて、道具箱をかたげ、内へはひる。采女悔りする。

大工 ハイ、内方にござりまするか。

采女 ハイ、内方にござりまするか。

大工 けふはお人下さりましたれど、外へ参つて居りました。中の間の棚を釣るのぢやとござります。けふは日端下。翌の朝、とうから参ります。お世話ながら、此道具箱、持つていぬるは面倒にござりまする。内方に置かしやつて下さりませい

采女 成程、中の間へ棚を釣らねば勝手がわるい。そんなら、あすの朝、とうに來て下され。箱は預りました。

大工 お世話でござります。そんなら、明日参ります。(ト橋懸りへはひる)。
采女 ようござりました。とんと肝をひつくりかへさしをつた。ア、どうぞ太夫に逢ひたいものぢやが。

ト思案して居る所へ、小次兵衛、藤兵衛出て

藤兵 小次兵衛さま、うまい者になつたぞえ。

小次 うまいもの、段ではない。まものに成つた。

藤兵 あのやうに靡くとは、どうでも男がよいかいな。

小次 またおだてるわいの。(ト采女を見て) 貴様は誰れぢや。

采女 エ、わかえ。

小次 この家には見馴れぬ若い者ぢや。どこから來た。

采女 アイ、わしや、アノ、オ、ソレ、大工でござります。コレ、大工の證據には、道具の箱の中には錐や鑿や鋸や才植がござります。何と、けうといものか。

小次 その大工が、何しに來たのぢや。

采女 わしは仕事に。オ、それよ。中の間の棚釣りに参りました。何と、大工は棚釣りに來ぬものでござりますか。

小次 オ、成程。大工なら棚釣る筈ぢやが、けふはコレ、日ばした、今頃來ては

藤兵 ようく。聲になつたと思つて、きまり方く。

小次 イヤモ、女房持つて世帯すると、何か心に附けねばならぬわ。

藤兵 金貸しほどあつて、きつう目をせゝるなう。

小次 算用詰めにしても、えて喰込みがある。イヤ、大工、貴様もけふは日ばした。あす朝から來て貰はうかい。

采女 イエ、あすは餘所へ、仕事に往かねばなりません。けふ中に釣つてしまひます。

小次 成程。棚一枚ぐらゐで、一日雇ふことはない。そんなら、ツイ釣つて遣つたがよい。ソレ、そこに板がある。大方それであらう。随分綺麗にけつたがよいぞや。

采女 心得ましてござります。

ト言ひ、道具箱より單へ物を出し、引張りにして板を取り出す。此内こちらにて
藤兵 イヤ、小次兵衛さま、あの美しいお娘が、あのやうに靡くとは、どうしたものでや。とんと合點
が参りませぬ。

小次 何の合點のいかぬ事がある。地獄の沙汰も、れそ次第ぢや。

藤兵 イヤ、時に、あの妹娘は、様子を聞けば、島原で傾城ぢやあつたげにござります。

小次 そりやおれも聞いて居る。それで首ッたけ登つたものでやて。

采女 申し。その傾城といふのは、この家の娘でござりますか。

小次 成程、さうぢや。島原に居た折の名は、花橘というたげな。

采女 エ、そりや、今の名は、お菊といはうがナ。

小次 そのお菊といふが、われらが女房ぢや。

采女 アノ、お前の女房かえ。(ト悔りする)。

藤兵 コリヤ、大工。わりや、何て、そのやうに悔りする。

采女 エ、何も悔りはせねど、聞き傳へて居るこの娘の事。あんまり思ひ掛けないゆゑ。

藤兵 イヤモウ、小次兵衛さまが、べうとはおれも、思ひ掛けがなかつたてや。

小次 思ひ掛けがなうても、是れ結ぶの神の引き合せぢや。藤兵衛、貴様を頼む。ちよつと奥へ往て、
お菊をこゝへ、おこしてくれまいか。

藤兵 アノ、奥には、母親や姉が、居るよつて、お菊をこゝへ呼出して、べるのかえ。

小次 イヤ、さうてはなけれど、とつくりとあれが心も聞かうし、おれもまた何やかや咄しをしたし。
こりや、頼む。

藤兵 合點ぢや。そんなら君をこゝへおこす程に、ねた刃を合はして、合點か。

小次 早う。頼む。

藤兵 成程。今おこすわいな。

トしかくあつて、藤兵衛奥へはひる。小次兵衛、襟を繕ひ、いろ／＼ある。此うち始終采女腹の立
つ思ひ入れにて、才樋にて小次兵衛をくらはさうとする。小次兵衛見て

小次 コリヤ、大工。そりや、何をするのぢや。

采女 サア、こりやア聞いた様子が、こゝな娘をべる掣さまなりや、大方祝言があらうによつて、樋で
庭を掃かうと思つて。

小次 何をぬかすやら。日の暮れぬうちに、ちやつと板を削つてしまへ。
采女 削らいざ。削らうと思つて来たもの、削らいぢやあはらしい。

ト板を打ち附ける。小次兵衛悔りして

小次 こりや仰山な。何するのぢや。

采女 何をせうぞい。板削るのぢや。あた忌々しい。折角おれが尋ねて来たのに、こんなけたいな板を削らうとは、思ひ掛けがなうて、エ、思へばく、こんな奴の女房に

小次 ヤ。

采女 イヤ、美しい娘ぢやげな。それを女房にするとは、こゝなあやかり者め。

小次 ほんに、あのお菊を、おれが女房にするとは、男冥加に叶うたのぢや。

采女 エ、けたいな。聞けば聞くほど羨ましい。どういふ顔で、こなんと祝言する。そのお菊めが顔が見たいものぢやが。

小次 コリヤ、氣遣ひすな。われらが北の方、美しい顔を見せる。もうこゝへ来る程に、貴様も氣を通してくれいヤイ。

采女 何の罰に、こなさまが鹽辛喰や、おれが水を飲む筈があらうぞい。おりやこゝで板を削らにやな

らぬ。どりや削つてこまさうか。(トめつた無性に板を削る。)

小次 ヤイく。そりや逆木ぢやわいヤイ。

采女 逆木でも山木でも儲ふまい。高て此板削り屑にすりやよいわいの。エ、胸がぐらくするわいの。

ト采女起ちたり居たりして、鑿と錐をもつて、小次兵衛を突かうとする。

小次 ヤイく、待て。そりや、何ぢや。

采女 オ、こりや鑿ぢや。

小次 鑿で、どうするのぢや。

采女 サア、これは呑み込んだといふのぢや。

小次 そちらの錐は。

采女 こりや錐を廻すといふ事ぢや。

小次 ア、こいつはよいわいの。

采女 こいつはわるいわいの。(トいろく腹立て、また仕事に掛かる。ト奥よりお菊出て)
お菊 申し、小次兵衛さま、お前、今、藤兵衛さまを、呼びにおこさしやんしたかえ。

小次 オ、呼びに遣つたは、そなたが得心の上は、おれもちつと咄してもせうと思つて。
お菊 ハテ、と、さまの言ひ附けぢやによつて、マア得心したわいな。

ト此うち采女、板をばた／＼振廻す。

小次 コリヤ／＼、もそつと静かにせい。

采女 素人の思ふやうに、成るものではござんせぬわいの。

お菊 ほんに、仰山なお人では（ト采女を見て）ヤア、お前は。

采女 ア、コレ／＼、わしや大工、ナ、大工ぢやによつて、此板を削らうと思つて。

お菊 アノ、お前は大工。

采女 アイ、大工々々々々。大工のまびきぢやない、板引きぢや。ナ、お前は、こゝな娘御ぢや。わしや大工。それでけふ、こゝへ、棚を釣りに來たのぢやわいな。

お菊 そんなら、コレ、大工さん。

采女 何でござんす。（ト大きな聲する。）

お菊 オ、慥食な物の言ひやうぢやナ。

采女 こりや産れ附き。癖ぢや。

お菊 ほんに、よう來て下さんした。

小次 コレ／＼、そなた、あの大工、近附きか。

お菊 イ、エ。

小次 それでも、よう來て下さんしたナとは。

お菊 サア、わしが櫛箱を、直して貰はうと思つて、それでよう來て下さんしたと、いふのぢやわいな。

小次 イヤ／＼、あんな手荒い大工は、ようせまい。

采女 オ、そりや、よい推量、おりや仕附けぬ事はようせぬわいの。エ、打碎いてこましたいナ。

トお菊、櫛を取りあげる。

お菊 大工さん、こりや何といふ物ぢやえ。

采女 そりや鋸というて、何でも引ッ切るものぢや。オ、人の首でも切るものぢや。損ねる。こつちへ

返して貰ひませう。（ト引ッたくる。）

小次 ヤイ／＼、ひつしよない。ちよつと持ちやつたとて、何の損ねるものぞ。

采女 イエ／＼、損ね切つてある。おれが墨壺から三つ目錐ぢや。ようも／＼ちよんのを指し金ぢやな。どうぞしての、こぎりとせうと思つて、その舌を釘抜きて引き抜き、才髓て叩きみじやいてこまし

たいというたら、心の内でかんからくと、笑ひけつかるであらうな。エ、削れる板ではないわいの。(ト腹立て、無性に削る。)

小次 コレ、お菊、わが身が得心の上は、おれもこゝな聲になつて、親仁や母ぢやに孝行にする相談せう。こゝへおぢや。エ、ソレ、ほこりが掛かるわいの。

お菊 わしや、ほこりが掛かつても大事ないわいな。

采女 申し、^{かんかく}鉈が掛かります。此鉈肩といふものは、人のからだへ引ッ附くと、離れませぬ。エ、どこもかも鉈肩だらけぢや。拂うて上げませう。これは。

ト采女腹を立て、お菊を拂ふこなしにて振り廻し、くらはし、いろ／＼あつて突き倒す。小次兵衛、お菊を抱き起し

小次 ヤイ、何とするのぢや。

采女 イヤ、こゝにござると、ほこりが掛かるのえ、そつちへござれと、突きのけたのでござります。

小次 可哀さうに、お菊、痛みはせぬか。ア、痛さうな。ドレ、擦つてやらう。おれは擦りがきつい上手ぢや。(トお菊の背中をさする。)

采女 ハア、機嫌を取るは。何ぼう取つても、びくともせぬ。あた腑のわるい。

ト小次兵衛お菊の手を取り、袖から手を入れうとするを、采女、ふいにて手を引ッ掛け脇へのける。小次 コリヤ、こりやどうするのぢやぞいヤイ。

采女 これは、オ、人を擦ると、こなさまも肩がつかへるものぢやあらうと思つて、南蠻流の療治して遣るのぢや。

小次 エ、いろ／＼の事を世話やくやつぢや。われ構ふ事はない。構ふなく。

トまた擦りにかゝる。

お菊 コレイナ、もういやぢやわいな。

小次 イヤ、とつくりと擦らんと、あとがわるい。じつとして居や。

ト無理にさする。采女腹立て、板を打附けたり、錐もみしたり、鋸にて切つたり、いろ／＼あつて、才縫にて、ばつた／＼叩く。

小次 ヤイ、是れは。物音が聞えぬ。静かにせいヤイ。

采女 静かにしたら、そつちの勝手はよからうが、こつちの仕事が錢にならぬわいの。

小次 こいつが。さつきにから黙つて居れば、あんまりぢやあらうがな。

采女 あんまりとは、貴様があんまりぢや。

小次 おれが、どうして、あんまりぢや。

采女 無遠慮千萬な。男と女子が女夫になるが、けたいがわるいわい。

小次 おりや、女房に持つ筋があつて持つが、おのれがそれを法界格氣する事はない。

采女 イ、ヤ、せにやならぬ。

小次 そりや、何て。

采女 仕事の邪魔になるわい。

小次 邪魔になるなら、おきやアがれ。

采女 オ、おきたうてくならぬ。けたいがわるい。

ト板や道具を打附ける。小次兵衛も打附ける。お菊取りさへる。奥より藤兵衛出て

藤兵 小次兵衛さまく。さつきにから惣右衛門どのが、逢ひたいというて、尋ねて居られる。

小次 イヤく、あの大工めが、あんまり口が過ぎる。もう料簡がならぬ。(ト行かうとするを留めて)

藤兵 コレイナア、何やら急な事ぢやげな。今ござりませい。

小次 イヤく、あいつを。

藤兵 ハテ、マア、ござりませい。(ト無理に引摺つてはひる。お菊、采女に取付き)

お菊 采女さま、逢ひたかつたく。(ト抱附く。采女お菊の胸倉を取つて)

采女 ヤイ、こ、なばいたづらめ。これまでお定まりの仕組み、古いせりふづけ置いてくれ。エ、おのれはくくと恨みをいふも愚痴の至り。口舌するのは廊下の事。コレ、花橋、今の名はお菊、そなたもよう無事で居てたもつたなう。

お菊 エ、そんなら久し振りて逢うたわたし、アノ疑ひはさしやんせぬかえ。

采女 何の疑ほう。たとひ五年、十年逢はずに居ても、心の變るそなたなら、始めから言ひかしてせぬわいの。

お菊 エ、嬉しうござんす、采女さま。さうして、見れば、お前の此お姿はえ。

采女 サア、此形になつたは、いつぞや廊下紛失した、イヤ、此譯はとつくりと。

お菊 わたしも今の身の上、何かの様子も咄したけれど、

采女 こゝてはどうも。

お菊 幸ひわたしが部屋で、

采女 往ても大事ないか。

お菊 何の大事がござんせう。久し振りての積る事を、

采女 前は大夫、今はお菊、素人になつたそなたの身の上。
お菊 廓と違つて、ツイさ、事も、わたしが酌で、
采女 たべ附けた風味、久し振りに賞翫せう。サア、おぢや。
お菊 ちやつとござんせいなア。

ト歌になり、お菊、采女を連れ、奥へはひる。ト奥より惣右衛門出て来て、あたりを窺ひ、疊を上げる。
ト下より下さい、三人〇、△、□、榮螺に火をともし、鶴の嘴を持つて出る。

惣右 三人の者、かねて頼み置いたる通り、此下の普請は。

〇下 惣右衛門どの、こなたの頼みの通り、此大佛より伏見まで抜け道を、

△下 海田新吾どの。

惣右 コリヤ、シイ。……わが本名は女房、娘にも包む大事。

い下 とつくりと掘り抜きました。

惣右 オ、大儀々々。(ト懐より金百五十兩出し、三つに分け)、ソレ、約束の金。普請成就後金の都合。

二人 エ、忝い。(ト惣右衛門、一人の下さいを呼び)

惣右 其方は跡に残り、すわと云は、明りを合圖に、これへ出よ。

い下 畏りました。

惣右 三人共に、ぬかるな。

三人 ハア。

ト又疊を上げ、三人とも下家へはひる。惣右衛門、元の通り疊を敷く。此とたん、女房、ばいの形にて橋懸りより出て、ふつと奥へ入る。

ば 親仁どの、今戻りました。(ト惣右衛門悔りするこなし。)

惣右 ホウ、おば、此いそがしいに、早う戻つたがよいわいの。

ば オ、とがくしい。生き通しにする身ぢやなし、年寄り相應の寺参り。ちつと後生も願はにや
なりませぬわいの。

惣右 けふは、そなたの先きの連れ合ひの命日ぢやと思つて、さつぱりと着る物も着替へて、一張羅の鹿
の子の褌袴、造り立つて参らつしやつたの。

ば 何を作つたとて、どうしたとて、褌袴よりは緞の寄つた裸縮緬、鹿の子まだらの雪のつむり、此
白髪を塗らうと思や、大佛様の釣り鐘と同じ事て、京中签の墨をこそけて来ねば、黒むまいぞい
の。

惣右 それでも、きつう暇が入つたぞや。

ば さればいの。水向けて戻らうと思つたら、講頭の重右衛門どのに呼び込まれて、本堂の銅瓦の奉加、商賣柄の餅屋で、どつさりと搦いて貰はにやならぬと、おどけ交りの勤め、一つ二つ有り難咄しがしゆんで、それで暇が入つたのでござるわいなう。

惣右 イヤモウ、あの和尚も、よい人ぢやが、とかく金をほしがあると、後家をえいめたがるには困る。おばも、こつちの奉加より、あつちから附いて貰やせなんだか。

ば 何をいはしやるやら。おじやら格氣も二昔。ア、女子程早う年の寄るものはござらぬ。

惣右 いかさま。そなたの來た時分は、まだ三十に成る、成らず。ア、よい女房ぢやあつたになア。

ば フウ。人の事ばかりいうて、こなたもわしの來た時分は、立派な好い男、餅屋の亭主にするは、惜しいやうなかつぶくてあつたが、ア、前の形はないぞいの。

惣右 イヤモウ、渡世に斯う搦まれて、おれもめつきり年が寄つた。それでもまだ、めつたに後へ寄りぬ所があらうがの。

ば なにを、口ばつかり達者で、……ほんに、提灯屋へも嫁がはひつたといの。

惣右 フウ。

ば おいの。

惣右 何ほ餘所のは……おば、汁が出來たら、飯くはうか。

ト二人顔見合せて

惣右 ハ、ハ、ハ。(ト此うち構懸りより、宿老、袴、羽織にて出る。)

宿老 惣右衛門どの、内に居やしやるか。惣右衛門どの。(トヤがましういうて、内へはひる。)

惣右 これは宿老どの、けた、ましい。

ば 何事てござるぞいなう。

宿老 何事所ぢやない。お成りぢやく。

ば お成りとは、何が成つたぞいの。

宿老 お成りといふは、けふ大佛へ勅使にお出てなされた中納言が、大佛餅屋の惣右衛門が宅へ寄る程に、其通り言ひ渡せと、お供の侍ひ衆が、おれを呼び附けて、言ひ附ぢや。

ば フウ。何と言はつしやる。そんなら勅使の中納言様とやらが、……親仁どん、こりやマア何てござるぞいの。

惣右 何事ぢややおれも知らぬ。宿老どの、ア、こなたも譯は知るまい。マア、何ぢやあらう

と、逢うたら知れる。掃除でもして待つて居やう。

宿者 さうぢやく。鹽水でも打つて、綺麗にして置かつしやれ。婆さま、麁相のないやうに頼むぞや。おりや此通り申上げる。麁末にしてお目玉の出ぬやうにさつしやれや。

トこんな事言ひ、橋懸りへはひる。

惣右 おば、いそがしう成つて来た。娘にも言ひ附けて、共々、そこらを方附けて置きや。

ば アイく。おりつ。どこにぞ。ちやつとおぢやく。

お律 アイく。(トおりつ出で) か、さん、今戻らしやんしたかえ。シテ、呼ばしやんしたは、何の用ぢやえ。

ば 何どころか。お公家さまのお成りぢやというて来た。そこらを共々方附けてたも。

お律 そりや、どうした譯でござんすぞいア。

惣右 どうしたやら、かうしたやら、それが知れりや、此やうにあわてはせぬ。マアく、何ぢやあらうと、掃除せいく。

ト三人そこらを方附けたり、掃いたりする事、しかくあり。ト此うち橋懸りより乗り物、家來大勢附添ひ、門口におるす。侍ひ乗り物の傍へいて

侍 申し上げます。これが即ち大佛餅惣右衛門宅でござりまする。(ト乗り物の内より)

五右 ホ、ウ、聞いたく。(ト出で) 皆の者、此家にとくと休息すれば、そち達は此家を遠ざけ、歸りを待て。

侍々 ハア。(ト侍ひ皆々橋懸りへはひる。五右衛門しづく内へはひり、上座へ通る。三人平伏して居る。)

五右 惣右衛門どの、御夫婦。りつ。

三人 ハア。

五右 これはしたり。(ト五右衛門携り寄つて)

惣右 限りある殿上人、此町人の惣右衛門に、慇懃の御挨拶、シテ、御用とは。(ト顔を見て) ヤア、こなたは聲の次郎作どの。(ト恠りする。ト婆こなしあつて傍へ寄り)

ば コレ、めつさうな親仁どの、お公家様をとらへて、聲どのとは勿體ない。ハイ、おゆるされて下さりませ、年寄られまして、目かどがわるうて。(ト又顔を見て) ヤア、次郎作どのぢやないかいの。ト又恠りする。トお律又出で、ばを引退け

お律 めつさうな。か、さんまでが同じやうに、何のあなたが(ト顔見て)ほんに、やつぱりこちらの人ぢや。

惣右 次郎作であらうがの。(トば、傍へいて)

ば、どう見ても、聾どのぢや。

お律 こちの人に違ひはない。

惣右 中納言といふは、聾の次郎作。

ば、次郎作といふは、お公家さま。

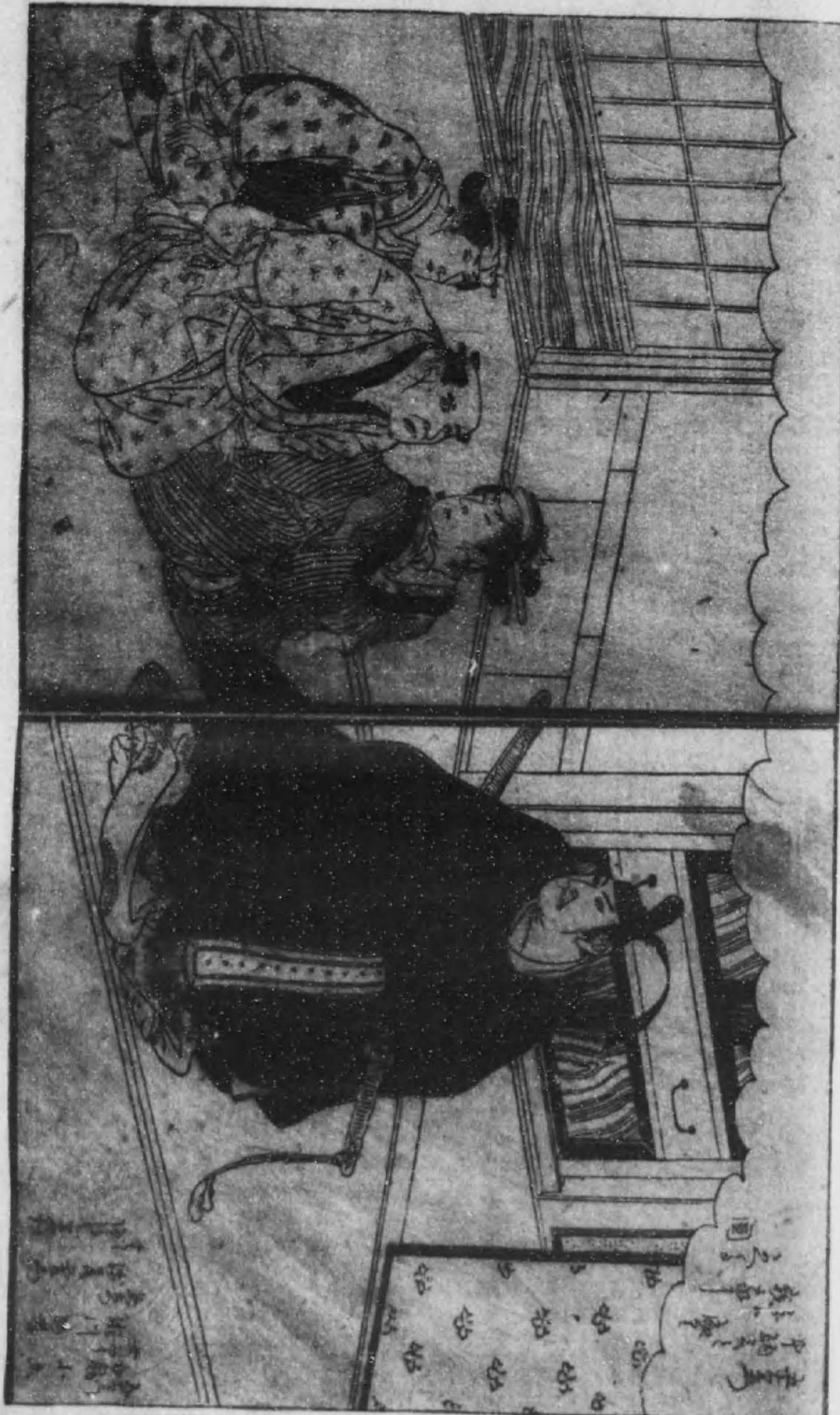
お律 思ひ掛けない此姿といひ、こりやマア (ト三人顔見合せ)

三人 どうしたものぢやぞいナア。

五右 御不審は御尤も。私わたくし今日中納言となつて、大佛へ勅使に立ちましたは、ちと仔細あること、其儀は追つて、ト惣右衛門、ば、を上座へ直し、お律と一所に下へさがり、舅どの、これまで私しが節々の家出、女房はもとよりお二人さま、嗚かし憎いやつと思し召しませうが、これもちと望みあつての事、其仔細もとくと申し上げませう。先づ、これまでの不調法、女房ども、共に、お詫び申したも。

お律 エ、そんなら、申し、こちの人、ト五右衛門を見て、こなしあつて、お公家さまでもやつぱりこちの人ぢや。アノ其やうな形をして、けふ戻つてござんしたも、と、さまやか、さまに、詫び言を

お律 エ、そんなら、申し、こちの人、ト五右衛門を見て、こなしあつて、お公家さまでもやつぱりこちの人ぢや。アノ其やうな形をして、けふ戻つてござんしたも、と、さまやか、さまに、詫び言を



せうと思つてかえ。

五右 サア、ふつと出て、一日立ち、二日立ち、戻りそ、くれる程、鬨が高くなつて、そなたの手前もどうやら異なるものなれど、

お律 何のわたしは女房のこと、構やせねど、と、さまの思はく、殊に、此間より忙しうて、方々の誂へのあもを渡さねばならず、人手はなし、お年寄りや女子ばかりて手は廻らず、わたしぢやても、一日あたふたして、夜さはたつた一人寝るし、トットモウ大抵辛氣な事ぢやなかつたわいなア。

五右 さうであらう、母じや人も共々に、舅殿へよきにやうお執り成しを頼みまする。

お律 イヤモウ、娘がいふ通り、わしらに如才はなけれど、堅くろしい親仁どの、氣質、どうあらうやら知れぬけれども、格別の不調法でもなし、日泊り夜泊りも若者のある習ひ、殊には望みのある事とやら、其譯も咄したら、ツイ機嫌も直らうぞいの。

五右 イヤモウ、機嫌さへ直して下されば、これから随分精出しまするて。

お律 さうでござんす。お前さん、じつとして精出して下さんと、と、さまの機嫌は、おのつと直るといふものでござんす。ナア、か、さま。

ば、オ、それく。お親仁どの。

お律 もう料簡して下さんせいな。(ト此うち惣右衛門、煙草をのんで居る。)

惣右 成程、家出した掣の次郎作、料簡してやらうが、小豆のやうに、大納言ぢやの、何のと、餅屋の掣に中納言はちつと仰山過ぎる。

五右 イ、ヤ、中納言は装束にあつて、身には請けぬ官位、此装束を脱げばやつぱり、元の掣の次郎作。ばい、そんなら其装束は、

惣右 假りの官位の俄か公家、大佛へ勅使に立つたも、

五右 風吹けば沖津白滝龍山山

惣右 唐土にては緑の林。フウ。(ト思案して) どうやら、面白い公家の掣どの。

ば、様子ありげな、中納言の次郎作どの。

お律 やつぱり變らぬこちの人。

五右 委細は奥で、舅どの。母者人、女房ども、奥へおぢや。

ト歌になり、五右衛門、ばい、お律、惣右衛門皆々こなしあつて奥へはひる。橋懸りより代官、捕り手大勢連れ、しとく、出て、門口へ来て、内を窺ひ、呼ぶ子を吹く。ト奥より小次兵衛、藤兵衛出て、

小次 今の呼ぶ子は。(ト見て)

二人 お代官さま。

代官 シイ。(ト押へ) 合點の行かぬ此家の體。様子を知らんと、大工に身をやつし、入り込む所存、シテ其方共、先達て申し附けた此家の様子は。

小次 ハア、成程、仰せの通り、これなる藤兵衛と申し合せ、敷き金を持つて此家の掣と成り、先刻よりこれへ参つて、様子を窺ひ居りまする。

藤兵 小次兵衛が申す通り、合點の行かぬ惣右衛門が住居、俗姓といひ、

小次 今歸りし掣の次郎作、折々家出するよし。仔細ある親子の者。

代官 此上は萬事に氣を付け、兩人共に、ぬかるな。

藤兵 委細畏りましたが、イヤ、小次兵衛どの、あなたが大工になつて入り込むとおつしやるに、また最前の大工めは。

小次 いかさま、きやつも合點の行かぬ曲者。一通りのやつてはない事、見すゑて置いた。

藤兵 掣の次郎作といひ、惣右衛門といひ、あの大工め。

小次 何ても合點の行かぬやつらの寄り合ひ。貴様は向ひの大佛に控へてゐや。若しもの事があつたら、

早速代官さまへ往て、捕り手の衆を。

代官 其儀はちつとも氣遣ひいたすな。われくも人数を分けて、七條河原より五條のあたりに控へて居らう。用事あらば、早速に相知らせよ。

藤兵 畏りました。ちつともぬかりはいたしませぬ。そんなら小次兵衛、大佛に待つて居るぞや。

小次 若し急な事があつたら、呼ぶ子を吹くわ。

藤兵 合點ぢや。そんなら、お代官さま。

代官 兩人とも、必ずぬかるな。

小次 畏りました。

藤兵 家來、參れ。

ト代官、藤兵衛、橋懸りへはひる。合ひ方になり、小次兵衛一人残り、いろくあつて

小次 うまいわく。何でもあいつらが様子を嗅ぎ出して、引ッ括ると褒美はせしめる。若しさうてなけりや、代官に金出さして、お菊めをいがめるわ。どちらへ往ても雁木鍵。此やうなうまい事は又あるまい。何でもあのお菊を囮にして、こつ。トいろく思案してよいわく。シタガそれより前に、おむすを、マア一ちやう、いがめたいものぢやが。

ト歌になり、小次兵衛しかくあつて奥へはひる。トどろく、トヒョウの笛にて、二つ目の鷹、向う鳥屋の内より飛んで出て、本舞臺の上にて二三遍舞うて居る。此うち向うより別木軍藏、吉川軍人、一様の鷹匠の形、早川高景も同じぶツさき、股引の形にて、鷹杖を持ち、此鷹の行くへじつと見入りながら、花道中程まで来て

高景 紀の關守がたつか弓、白鳥と化して飛去りしためしもある。古き白鳥の關、身よりたうとき逸物の羽づかひ。正しく名畫の

軍藏 すりや

ト三人きつと目を附け、思案する。鷹、橋懸りの上へつツと入る。高景ら三人本舞臺門口へ来て

高景 誰そ、頼みたい。

軍藏 頼まうく。(ト奥より)

五右 ハイく。どなたでござりますナ。(ト装束を脱ぎ、着流し、やつしにて出て)御用があるなら、おはひりなされませ。

高景 然らば、許し召され。(ト三人ながらはひる。並みよく並ぶ。五右衛門こなしあつて)

五右 見ますれば、お三人共、同じ出立ちのお侍ひさま。エ、聞えた。こりや、鷹野にお出でなされ
ましたナ。

高景 成程、今日は、小野深草山を志し、鷹野の歸るさ。

軍藏 シテ、大佛餅屋の掣、次郎作とは、御自分よな。

五右 ハイ、此家の掣、次郎作は、私してござりますが、シテ、あなた方さまは。

軍人 われ／＼は四海の執權

三人 早川高景といふ者。

五右 ヘエ。(ト、こなしあつて) そのお歴々さまが。

軍藏 其仔細といふは、先達て謀叛を思ひ立ちし此村大炊、本名は大明の宋蘇卿、事成らずして最期の
砌、

軍人 徽宗皇帝が畫きし、白斑の鷹を以つて、心を合はせし曲者に、仔細を告ぐる、

高景 それゆゑ、宋蘇卿が最期の念にて、繪絹を離れし白斑の鷹、此鷹の止まる所が、即ち謀叛の餘類
と思ふゆゑ、

軍藏 毎日の鷹野も、白斑の鷹の詮義せん爲。

軍人 早川高景、洛中洛外、

高景 淀、伏見、近邊はいふに及ばず、五畿、七道まで尋ね求むる鷹の行方。

五右 ヘエ。それは御苦勞てござりますが、尤も鷹野にお出でなされる、には、一樣に同じ出立ちと承は
りましたが、白斑の鷹とやらの御詮義ならば、其姿は御尤もてござりますが、お三人さま、共に、
早川高景とおつしやる。とんと私し合點が参りませぬ。

三人 これも即ち詮義の手段。

五右 白斑にもせよ、赤斑にもせよ、鷹とあれば、高て鳥類、其御詮義に手段とやらが要りまするかな。
軍藏 イ、ヤ、まだ外に詮義がある。

五右 其詮義とはナ。

軍人 盜賊の張本、石川五右衛門。

軍藏 大明の毛唐人、宋蘇卿が餘類の者。

高景 まつた、先年亡びた竹地光秀が殘黨、こゝかしこに徘徊すれば、尋ね出して繩ぶたん爲。

五右 ヘエ。さては此間から、ちら／＼噂のある石川五右衛門、こいつ盜賊ながら、大抵手ひどいやつ
てはないげにござります。

高景 サア、それゆゑ、其方を頼み、謀叛の餘類、盜賊の詮義も、白斑の鷹の行くへも、次郎作、其方ならてあるまいと存じ、それゆゑ。

五右 ハテ、思ひ掛けない。高て大佛餅屋の聲の私しが、むづかしい大切な儀を。

準人 商賣によつて、多くの人の入り込み、

軍藏 手廣くいたす、商ひのついて、

高景 何かの事を聞き出す其方、繪絹を離れし名畫の鷹も、拳こぶしへかへす手練は、次郎作、そちが工夫て、

五右 行くか、行かぬか知らねども、お歴々さまのお頼み、雁かりんは八百、矢は二筋、ほんの盲蛇めくらへびにおぢず

といへば、及ばずながら、力一杯、働いて見ませう。

高景 早速の得心、

三人 高景も満足。

軍藏 いよく、白斑の鷹の行くへ、

準人 宋蘇卿が餘類、竹地が残黨も、

高景 詮義いたしてくれるぢやまで。

五右 若しも首尾よう、詮義しおほせたらば、

軍藏 一國一城を宛行あてはこふ。

準人 其上は、望み次第、

五右 へ、大名になつて、米の有る無いを聞かずに、餅屋をしたら面白い事てござりませう。

高景 右の詮義相濟むまで、此家このやを暫く無心申さう。

五右 むさうても苦しうござりませねば、ごゆるりと奥の離れ座敷て。

高景 然らば次郎作。

五右 御馳走は、商賣の大佛餅。

高景 心遣ひは必ず無用。

五右 お三人の高景さま。

三人 次郎作、後ほど。

五右 マア、奥へござりませ。

ト歌になり、高景、軍藏、準人こなしあつて、奥へはひる。跡に五右衛門一人残り、こなしあつて

白斑の鷹の行くへとは、いつぞや南禪寺の山門へ、親人おやぢの最期を告げし徽宗皇帝が名畫の鷹。竹

地が餘類に、五右衛門が詮義、三人の高景、ハテナア。(ト手を組み、思案する。ト奥より惣右衛門出

て

惣右 コレ、掣どの。

五右 ヤア、親仁さま。

惣右 コレ。(ト佛壇を開き、内より引ツそぎの竹籠の切先きを取出し)こなた、これを知つて居るか。

ト差出す。五右衛門じつと取つて

五右 こりや竹地光秀公を突き留めし竹籠。切ツ先きには御無念の血汐。

惣右 其光秀公の恩義を受けたこなた、惟任左馬五郎。

五右 コレ。東福寺へ誂への餅は、いきましたか。

惣右 イヤ、左馬五郎殿。

五右 何ぢや。最前やつた。そりや早う方附きました。

惣右 奥に居る高景がこはうて、其やうに本名を隠し包むのか。(ト五右衛門、こなしあつて)

五右 此左馬五郎、日本に恐る、者は、一人もない。

惣右 それにまた、今、高景が頼み、一々受け合うたは。

五右 水は方圓の器うつはに入つて、器をくさらす(?)。父が無念、光秀公が修羅の妄執散ずるは大傾久吉。

草履摺みの猿冠者が、首取るまでは大切なわがからだ。久吉が家來とあれば、一人でも生けては歸さぬわが計らひ。

惣右 イ、ヤ、そりや偽り。こなたには金銀に目を掛け、生れ附いたる大慾心。此海田新五はナ、何卒光秀公の恨みを散ぜんと、心を碎き、忍び入つて、久吉の首取らんと、此家より桃山の御殿まで抜け道を(ト)思ひ入れあつてしつらひ置いたも、主君の仇を晴らさん爲。それにこなたは、言ひ甲斐なき御所存てござるなう。

五右 イ、ヤ、わが心底、此通り。(ト懐中より連判状を出し、見せる。)

惣右 そりや一味連判。

五右 人を語らひ、久吉が餘類を皆殺し、時日じじつを移さず四海を掌握。金銀を掠めるも、まさかの軍用。

惣右 それにまた、高景に誂ふは。

五右 龍も泥中に蟠みづぶまれば、蚯蚓みづぶ同前の高景に詞かはすも、此家の掣次郎作、手段てくてを以て入り込みしは、きやつが自滅。袋の鼠。

惣右 すりや高景を

五右 生けては歸さぬ。

惣右 ホ、オ、天晴れ、左馬五郎殿。

五右 コレ。

ト歌になり、五右衛門障子家體へはひる。ト惣右衛門こなしあつて奥へはひる。

ト奥はたゞにて、小次兵衛、采女、お菊を引ツ立て出る。お律取りさへながら出る。

小次 サア、うせうく。のぶといやつ。

采女 コレく、必ず聊爾せまい。覚えはないぞ。

お菊 めつたな事言はしやんしたら、わたしが聞かぬぞえ。

お律 コレ、小次兵衛どの、見馴れぬ若いお方とお菊を、手込めにさしやんすは、譯がござんせう。其譯を言はしやんせ。

小次 譯をいふ事も、聞く事もない。最前の不思議、大工ぢやとぬかすから、おれが合點がいかぬと思つて居た。コレ、惣右衛門どの。内儀。此二才めとお菊が、間男したわいの。

お律 ナニ、あの子が、間男とは。

小次 オ、證據は、あの二才めとお菊が、奥で寝て居たを、慥かに見附けた。

お律 合點のいかぬ。お菊さまとあのお人と寝て居たとは、そんならお菊さま、あのお人は。

お菊 アイ、わたしが言ひかはして、かねくお前を頼んで置いた

お律 采女さまといふのか。

お菊 アイ、それで。

采女 ア、コレく。お菊、めつたな事をいふまい。わしや、最前こへ来た、ソレ、ナア、大工のお菊 イエく、大事ごさんせぬ。か、さまには、様子を打明けて、お咄し申して添はして貰ふ筈でござんするわいな。

小次 イヤ、けちぶとい女郎め。百五十兩といふ敷き金持つて聲に來た此小次兵衛。間男しられては立たぬ。但し蟲附きの娘をおれに冠せて、金儲けする目論見か。たろに掛けるのか。

お律 コレ、小次兵衛さま、娘と言ひかはしたあのお人は、お前と約束せぬ其先きの事、其様子を知らしやんせぬ内の人、それに目論見ぢやの、太郎ぢやのとは、何の事てござんす。

小次 ハテ、太郎であるまいか。太郎もくも大がたりぢや。何ぢやあらうと、アノ二才めを。

ト采女にけるを、お律引き分けて

お律 敷き金戻しや、間男ぢやあるまいがな。

小次 オ、金さへ戻しや、縁切つた娘。お菊に言ひ分はない。サア、その金を。

お律 サア、其金は今ないによつて、後まで待つて下さんせ。

小次 金がなけりや、お菊は間男、代官所へ連れて行く。

お律 さうはならぬ。

小次 成らずば、金戻すか。

お律 サア、それは。

小次 サア、

お律 サア、

小次 サア、どうぢや。いつそ。

ト又采女に告ぐる。お菊、お律支へる。よき所へ婆ずつと出て、小次兵衛を突き廻し、「これは」と寄るを、「ソレ」と金を投り出す。

小次 ヤア、こりや金ぢや。

お菊 敷き金の百五十兩。

お律 それは。

お菊 金戻しや、言ひ分あるまい。

お菊 か、さん、此金は。

お菊 聲の次郎どのが、小姑女のお菊へ土産。

お律 そんなら、こちらの人の

お菊 エ、忝うござんす。

お菊 金受取つたら、とつと、去なしやれ。

小次 エ、忌々しい。折角めかけたあのお菊を、二才めが。(ト采女の方へ行くを、お律引き分けて、)

お律 言ひ分がなけりや、早う去なしやんせ。

小次 オ、去ないぢや。何の別に。あた忌々しい。けたいのわるい。(ト色々あつて、橋懸りへはひる。)

お菊 申し、か、さん、斯うなつた上は、と、さまにいうて、どうぞ女夫にして下さんせいなア。

お律 ハテ、そりやモウ氣遣ひなさんすな。わたしも共々に、ナア、か、さま。

お菊 フウ。そんならかね、咄しに聞いた、あなたが瀬川采女さまでござりますか。

采女 いかにも。面目もない御對面。

お菊 お菊さまを、たんといとしほがつて下さりまする様子も、聞いて居りまする。此上ながら

采女 イヤ、お頼み申すは此方から。

お菊 そんなら、女夫にして下さんすか。

ば、女夫にせいて何とせう。

お菊 エ、嬉しうござんす。

お律 そんなら、か、さん、お二人を連れまして

采女 何かの様子も、

ば、マア、奥へござりませ。

ト歌になり、皆々思ひ入れあつて奥へはひる。ト橋懸りより小次兵衛、そろ／＼戻つて来て、身滯へして、内へ忍び込む。

小次 エ、忌々しい。する程の事は皆へこたこ。折角うまうして置いたものを、あの二才めに引ッ掛けられて、けたいのわるい。(トいろ／＼あつて)よいわ／＼。其代りに追ッ附け、どいつもこいつも括し上げ、憂き目を見せてくれう。待つてけつかれ。(ト奥をのぞいて見て)何ぢや。二才めとお菊めが盃してけつかる。エ、業腹な。あの嬉しさうな面わい。ば、やお律めが同じやうに。その笑ひ顔を、今の間に吠え面に變へてこまさう。

トいろ／＼をかしみあつて、差し足にて奥へ忍び込む。ト最前の鷹を鳩十羽程寄つて追つて来る。薄ど

ろどろにて、鷹と鳩の争ひあつて、喰ひ合ふ。ト五右衛門障子を開き、じつと見て居る。ト向うより順喜親、六部の形にて、二つの掛け地を持ち、右の鷹にきつと目を附ける。橋懸りの方の中二階の障子を明けて、高景これを見る、三方一所にこなしあつて

五右 ハテ、心得ぬ。鷹は三國に通傳して、其來ること久し。

喜親 夫れ中春には鷹化して鳩と成ると、月令に見えたり。七月有つて元の鷹に歸る。

高景 日本鷹狩りの始めは、仁徳帝四十三年、依網の阿弭古といふもの、怪しき鳥を奉る、百濟の王、酒の君、始めて此鳥を泉州百舌鳥野の御狩に据えて、多くの雉を捕る。

五右 是れ正しく、われに大事を告げ知らせし、徽宗皇帝の白ふの鷹。

喜親 蘇卿官人最期の砌、無念の心魂を込められし、繪絹を離れし、名畫の筆勢。

高景 今此邊りに飛びめぐるは、宋蘇卿の骨肉の悴、此邊りに隠れ住むに相違はない。

五右 群る鳩は諸國の大名、鷹は即ち左馬五郎、時來つて、四海に羽を伸す前表か、

喜親 心を碎いて尋ね巡る、わが忠心を感應あつて、在所を知らす天の恵みか、

高景 謀叛の族を、搦め捕る吉左右か、

五右 何にもせよ、

三人 ハテ、怪しやなア。

ト鷹、鳩を皆々蹴落し、西の方の松へとまる。三人顔見合す。障子びつしやり。皆一時なり。順喜親、なしあつて

喜親 慶のとまる此家の内に、尋ぬる人は、ソレ。

ト思案して門口へ来る。ト抽り手最前より附いて出て、此時、双方より「遣らぬ」と掛かるを、よろしく立廻りあつて、順喜親、なしあつて

廻國の修業者、お宿の御無心。

ト又掛かるを皆々橋懸りへ追ひ込む。ト五右衛門、障子を開き、ずつと出て

五右 大明の順喜親。(ト順喜親ずつと内へはひり、こなしあつて)

喜親 某の本名を知つたる汝は。

五右 惟任左馬五郎。(ト順喜親、五右衛門が顔なきつと見て)

喜親 た、ならぬこなたの人相。(ト思ひ入れあつて)面重、齋の如く、天庭廣く、眉秀で、眼中清く、烏暗漆を點じ、しかも重瞳。是れ正しく日本の産れにあらず。すりや疑ふ所もなき宋蘇卿の御一子、蘇友殿でござるよな。

五右 ホ、ウ、わが人相を見て、明朝の産れと知つたる汝、越鳥南枝に巢ふ例し。天晴れ〜。

喜親 エ、有り難や、忝や。蘇卿官人の遺命を受け、尋ね廻りし蘇友殿の、お目に掛かるも三世の奇縁。シテ又、われを順喜親と、御存じ知られし其仔細は。

五右 不審は尤も。昨夜、廣小路に於て、窺ひ聞いたる汝が本名、親人の遺物の、掛け地を所持する其方ゆゑ。

喜親 シテ、こなた様の假りの名は。

五右 日本強盜の張本、石川五右衛門。(ト奥より采女)

采女 すりやお袖判の盜賊。五右衛門、そちを。(ト切つて掛かるを、順喜親引き廻し)

五右 瀬川采女。われに刃向ふは、雲雀の鶴を規ふも同前。叶はぬ事ぢや。

采女 お袖判を奪ひ返し、繩かけて此身の言ひ譯。
ト又掛かるを、順喜親さへて、ぼんと當てる。采女うんとのも。

五右 てかした。

喜親 久吉方の瀬川采女。いつそ。(ト切らうとする。)

五右 殺すは無益。やはり其儘。

喜親 シテ又、あの鷹を、此掛け地へ

五右 戻すも即ち父の形見。(ト懐中より香包みを出し)此香の徳に依つて、元の繪絹へ返して見せう。

ト火入れに右の香を焚く。順喜親掛け地を廣げる。鷹、仕掛けにて五右衛門の拳に乗る。

名畫は名木に依つて動く。此薫りにて戻りし鷹は、元の繪絹へ。

ト目を小柄にてくり、絹の上に置くと、ぱつと掛罫硝にて鷹消える。順喜親、掛け地を取り上げる。吹き替へにて鷹の畫に成る。

喜親 ハテ、争はれぬ親子の心、魂ひ通じて返りし此畫。

五右 佛間に直して父の孝養。(ト此うち采女心付き、右の香をふつと聞くことあつて)

采女 ハテ、合點のいかぬ。此家に薫る名香は、正しく蘭奢木。

五右 此香を蘭奢木と知つたる汝は。

采女 親の形見の此守り。(ト出し)中には即ち蘭奢木の名香。某が親人瀬川帶刀殿を養父と知りしは、

母人のかねてのお物語り、此名香を添へ、北野の松原に捨子となつてさまよひしを、帶刀殿北野

詣での歸るさに、捨ひ上げられ、養育にあひし此采女。

五右 すりや其方はわが弟。

采女 エ、何と。

五右 親の形見の蘭奢木、父宋蘇卿といふ大明の臣下、われを残して日本を覆さん爲、此土に渡つて、

筑前箱崎に住居して、妻を迎へて二人の子をまうくる。

喜親 それぞ江南二株の橘。

五右 形見に残す蘭奢木は、親子、兄弟の印し。

采女 すりや、こなたは、眞實の兄者人か。

五右 腹は變れど、胤は一つの、そちとは兄弟。

喜親 シテ、今一人の妹御は。

五右 此家の娘お菊といふが、即ち妹。

采女 ナニ、お菊を、妹とは。

五右 いつぞや廊へ、南禪寺の靈山國師となつて、久秋迎ひの節、これも所持する蘭奢木の名香にて、

さては妹と知つたれど、名乗らぬも大望あるゆゑ。

采女 ヤア、すりや言ひかはしたるお菊は妹。兄者人は寶の盜賊。ホ、ホイ。(ト思ひ入れある。)

喜親 御兄、弟御とあるからは、われくと共に、久吉を討ち取るが親、兄御への御孝心。

五右 イヤ、順喜観。生得虚弱な采女、身方に取つて何の益なき弟。兄に刃向ひ、瀬川の家を引き興さねば、養父へ立つまいぞよ。

采女 ぢやといつても、現在の

五右 兄弟は他人の始り。後の親を真とする本文。

采女 ハア。

喜観 ても、此采女どのを

五右 ハテ、構はずと、奥へ参れ。

喜観 ハツ。

ト歌になり、五右衛門掛け地を持ち、順喜観を連れ、奥へはひる。トあと采女一人残りて、いろ／＼になしあつて

采女 ハテ、思ひ掛けない兄弟の名乗り。親、兄は四海を奪ふ謀叛人。言ひかはしたお菊は現在の妹。知らぬ事とはいひながら、同胞思はず契るは畜生。因果といはうか、武運に盡きたといはうか。思ひ廻せば廻すほど、瀬川采女が(ト内より)

高景 武士道は、もはや立てられまい。(ト出る。)

采女 ヤア、貴殿は早川高景殿。

高景 采女、思ひ掛けなき兄弟の名乗りも、そこには重なる悪縁ぢやな。

采女 そんなら、最前からの

高景 様子は残らず聞き届けた。

采女 面目ない。

ト奥へついと走りはひる。ト高景になしあつて、捕り繩出し、繩揃きして、奥へ行かうとする。惣右衛門出て、立塞り

惣右 こりやお侍ひさま、捕り繩持つて、どこへござります。

高景 そちや、何者。

惣右 私しは此家の主じ、大佛餅屋の惣右衛門。

高景 さては、石川五右衛門が舅。

惣右 石川五右衛門とは。

高景 此家の掣次郎作といふは、石川五右衛門といふ盗賊の張本サ。

惣右 ハテ、合點の行かぬ。掣の次郎作を、盗賊の張本とは。

高景 訴人あつて、明白に相知れたワイ。

惣右 シテ、其訴人は。

高景 現在の女房、参れ。

お律 盗賊と知つたによつて、高景さまには、わしが訴人をしたのでござんす。

惣右 ナ、何とぬかす。現在の夫の訴人を、女房のおのれがするとは、おのれはく。

トきつと寄るを、高景留めて

高景 かう證人出れば、惣右衛門、そちもあらがふ事はあるまいがな。

惣右 ム、また掣が右衛門なれば、どういふ盗賊としての詮議でござんぞ。

高景 石川五右衛門、夜前、廣小路に於て、世尊寺中納言俊忠公を剥ぎ取り、今日大佛へ勅使となつて入り込む趣き。多くの金銀を奪ひ取つたる、重罪の盗賊。

お律 最前、其装束を掛けて、戻らしやんしたこちの人、すりや石川五右衛門といふ盗賊に違ひがないゆゑ、高景さまへ、わたしが訴人をしましてござんすわいな。

惣右 まだく、利口らしく其煩桁きく、女に似合はぬ夫を訴人する悪鬼、悪魔め。娘なれども掣への言ひ譯、おのれをすだく、に刻んで成りとも。(ト又行かうとする。高景にらむ。)

お律 申し、高景さま、こちの人が盗賊五右衛門に極つたれば、奥でおつしやつた約束の褒美を下さりませぬか。

高景 いかにも、褒美は一廉。金銀なりとも、衣服なりとも。

お律 イ、エ、そりや望みにはござんせぬ。

高景 シテ、其方は、何が望みぢや。

お律 夫の命を。

高景 ヤ、何と。

お律 サア、奥にておつしやつた折り、石川五右衛門といふ盗賊の行くへを訴人したれば、褒美は望み次第とあるゆゑ、現在の夫なれど、女房の身で訴人したは、望み次第の褒美に夫の命を貰ひ、五右衛門どのが助けたいばかり。

惣右 そんなら娘、掣をそちが訴人したは、

お律 望み次第の褒美の當。天知る、地知ると、ひよつと脇より夫の身の上、訴人のあつた時には、悲しい別れ。それが厭さに、わたしより訴人。望み次第とある御褒美に、夫の命を助けて貰ひますわいな。

惣右 オ、てかした娘。それでこそ夫に貞女。さうとは知らず、今の悪口、免してくれ。……此上は、娘が訴人の褒美、

お律 望み次第とあるからは、

惣右 高景さまのお詞に、

お律 よもや違ひはござんすまい。

高景 如何にも、娘が訴人の褒美に、夫の命を望むからは、此高景、一旦の詞反古にはせぬ。

惣右 エ、かたじけない。(ト高景捕り繩を出し、お律に渡す。)

お律 これは。

高景 左馬五郎に繩打つて渡せ。

惣右 エ、。

高景 イヤサ、訴人の褒美、五右衛門は助ける。謀叛人は助けられぬ。盜賊の五右衛門は助けて、謀叛人の左馬五郎に繩を打て。

惣右 すりや、やつぱり掣の次郎作に。

お律 アノこちらの人に。

高景 いかにも、謀叛の餘類は、縁の柵む其捕り繩。

お律 結ぶか、解くか。

惣右 後までに、きつとお返事を。

高景 預けた、兩人、

惣右 慥かなお返事、

高景 待つて居るぞよ。

ト歌に成り、高景こなしあつて奥へはひる。跡にお律、惣右衛門残り、心々の思ひ入れ、こなしあつて、ふつと互ひに顔見合せ

惣右 娘、

お律 と、さま、此捕り繩の

惣右 思案をせう。來い。

ト歌、ト兩人奥へはひる。始終此うち合ひ方。トじゃんくんと暮六つの鐘鳴る。ト奥より采女しほくと出て、こなしあつて

采女 天晴れ形ちは人と産み附けられ、養父の養育にて瀬川采女と、武士の數に入りながら、思はず

同胞言ひかはせしは、四つ這ひに這ふ、尾の生えぬばかりの畜生。所詮存へ、人に面は合はされず。死ぬる覺悟の此身の上。(ト脇差しをじつと見て) 此差添へは養父帯刀様のお譲り、銘は安宅藤四郎。仇な契りに畜生の、腹切れとて、お譲りはなされまいもの。チエ、。

ト身を頭はして泣く。トお菊奥より行燈を持って出て

お菊 采女さま。ここに居やしやんすかいナ。

采女 ヤア、お菊か。(ト顔を見て、ちやつと身を背け、こなしある。)

お菊 わしやお前を、一遍尋ねていたわいな。最前父さまや母さまの傍で、お前と祝言の盃したれば、

世間晴れて二世までの女夫でござんすナア。(ト袖を顔に當てる。)

采女 其祝言の盃が因果の種。可哀や、何にも知らず。

お菊 エ、何ぢやえ。

采女 サア、何にも知らぬ所へ来て、そなたと夫婦の盃までするとは、思ひ掛けがなかつたといふ事いなう。

お菊 何の思ひ掛けがない事がござんす。わたしはお前に、廊で別れてから、けふまで毎日々々、どうぞお前に逢はせて下さんと、ほんに、神佛さまを、大抵、祈つた事ぢやござんせぬわいな。

采女 現在畜生に成る事を、神佛に祈るとは、……サア、祈つた甲斐で此のやうに成つたわいの。

お菊 サイナア、お前と世間晴れて、女夫になつたと思へば、此やうな嬉しい事はござんせぬわいな。

采女 此やうな悲しい事が、どこにあらう。これまで互ひの逢ふ瀬に、枕をかはした睦言を、思ひ廻せば廻す程、どうも此顔が合はされぬ。(トあちら向く。お菊こなしあつて)

お菊 采女さま。なぜに其やうにさしやんすぢいなア。こちやモウ日が暮れたによつて、早うお前と(ト背中を合す。)

采女 チエ、情けない。(ト身をちぢめる。)

お菊 これはしたり。何とさしやんした。さうして情けないとは、何が情けないえ。

采女 サア、それはの。

お菊 わしがかうするのが、情けないかえ。(トむつとして) コレイナア、廊で言ひかはしたお前、わたしや二世も三世もと思つて居るものを、今更其やうにさしやんすは。聞えた。遠ざかるものは日々疎しとやられて、久し逢はぬうち、誰れぞとお前、言ひかはしたかいナ。そりや聞えませぬ、采女さま。久し振りに逢うたわたし、ちつとは親しうして下さんしても、まんざら罰が當りますまいぢいなア。

采女 サア、何の罰か、報いか知らねども、互ひに思ひ合つた仲、定めて同胞というたら、……サア
けふ廻り逢うたそなたなれど

お菊 何ぢやえ、そんならわしが嫌になつたかえ。(ト思ひ入れあつて、采女お菊を突きつけ)

采女 オ、お菊、いやぢや〜、とんと嫌になつた。ふつ、りと縁切つたぞ。

お菊 エ、。(ト大きにびつくりして) 采女さま、そりや何ていなア〜。

トおろ〜して取り附く

采女 サア、言ひかはした、そなた此世は是非に及ばねど、せめて未來は畜生の、サアちつとぢやない、
たんと嫌になつたによつて

お菊 二世も三世も、互ひに言ひかはした二人が仲、今更嫌になつた譯がござんせう。其譯を聞かし下
さんせ。こちや譯を聞かぬうちは、何ぼうても離りやせぬ〜。(トしがみ附いて泣く。)

采女 オ、道理ちや〜。譯を知らねば其咎ぢや。といつても、此様子が、何と打明けて、

お菊 言はねば、やつぱり元の通りに、女夫に成つて下さんせ。コレ、申し、拜みますわいな。

ト采女に取附く。采女、なしあつて片側へ寄る。また附いてよろしくあつて

わたしやお前に嫌はれては、片時もよう生きては居りませぬ。此世で添はれぬ譯あるならば、死

んで未來で添うて下さんせ。(ト采女が脇差しに手を掛くるを、「これ」と留めて)

采女 コレ、逸まるまいぞ、お菊。

お菊 イエ〜、離して殺して下さんせ。お前に嫌はれ、何樂しみに。

采女 其樂しきは苦しみと、心のうちは熱鐵を呑む同前。そなたと縁切るも、せめては最期は人間らし
う、人に笑はれぬやうに、死にたい采女が願ひ。

お菊 そんならお前は、死ぬる覺悟でござんすかえ。

采女 どう生き存へて、人に面が合はされうぞ。

お菊 そりや、どうしてござんすえ。

采女 お菊。(トお菊を引寄せ、顔みきつと見て) そなたとおれとは、現在血を分けた同胞ぢやわいなう。
ト突き放し、身を背け、泣く。

お菊 エ、。(ト大きにびつくりして) お前とわたしと同胞とはえ。

采女 其證據は、親の形見の蘭奢木の名香。

お菊 エ、〜。そんならわたしも、肌身も離さず大事にして持つて居る。(ト袖より出し) 此名香が、
同胞の印してござんすか。

采女 コレ。(ト采女も出して)これと一體、親子同胞巡り合ふ證據は(トお菊のと一つに寄せ、火入れへくべ)此名香が同胞の印し。

お菊 香も替らぬ蘭奢木。そんならお前は。

采女 現在の同胞。そなたは妹。

お菊 あの同胞とも知らず。

采女 言ひかはしたは畜生。それぢやによつて死ぬる覺悟。(ト腹切らうとするを、お菊留めて)

お菊 コレ、待つて下さんせ。

采女 イ、ヤ、生き存へる程、罪の罪。此身は元より親兄弟まで、畜生の眷族といはれ、何と憂き世に存へられう。そなたは跡に残つて、兄弟、夫婦のよしみ、采女が菩提を吊うてたも。

お菊 エ、聞えませぬ。コレ、申し。畜生になつたは、お前の科でも、わたしの科でもござんせぬ。これが大方、互ひの因果づくつとやら。お前一人死なしやんしても、一旦言ひかはした畜生の悪名は脱けませぬ。同胞なれば猶の事、現在妹を人に笑はす心でござんすかいナ。

采女 そんならそなたも

お菊 一しよに死にたうござんす。

采女 オ、出かしやつた。ほんに思へば、耻かしい事のありたけ、打解けてしまつた其あとにて、同胞の差合ひくつたとて詮ないこと。

お菊 そんなら得心して、一しよに死んで下さんすか。

采女 ハテ、死なば一しよと、互ひにいうたぢやないか。

お菊 エ、かたじけなうござんす。(ト手を合はす。采女行燈の火をふつと吹き消す)これは。

采女 今までの思ひ、同胞と知れる上は、どうも顔が。

お菊 わたしも共に。(ト互ひに探り合ひ、手を取りかはし)

采女 此世からさへ、戀慕の闇のくらがり

お菊 迷うて居れば、

采女 未來も嘘と思はる、わいの。

ト思ひ入れあつてじつと泣く。ト内にてコツケコウと鷄鳴く。

ヤア、あの鳥は。

お菊 ありや鷄の背鳴きてござんす。大方、わたしら二人が死ぬる知らせかいな。

采女 イヤ、飛鳥にあらざれば、飛鳥の心を知らず。それは人間。鳥類は其氣を知つて、われく

を友とするか。エ、是非もない事ぢやなア。

お菊 申し、采女さま、わたしや犬、鳥といはれても、やつぱりお前と夫婦になりたいわいなア。

ト取附き泣く。采女突き退け

采女 未練なことを。

お菊 サア、死ぬるは覺悟でござんすれど、死んで未來へ往た時には、やつぱりお前と

采女 ヤ。

お菊 サア、同胞でござんすかい。

采女 所詮、畜生道へ落ちた此身、未來は女夫に、

お菊 アノ合點して

采女 因果と因果。是非がない。

お菊 エ、嬉しうござんす。

ト兩人こなしある。此時後ろへ婆、お律、手燭を袖におほひ、出掛け、窺うて居る。

采女 お菊、此家で死ぬれば跡の思はく。せめては三條中島の瑞泉寺へ往て、二人が最期。さすれば畜生

寺とも、畜生塚とも呼びならはさば、二人が菩提。

お菊 そんなら、一時も早う

采女 サア、おぢや。(ト手を引き合せて、出ようとする。此時は)

ば、コレ、待つた。(ト手燭を上げる。)

お菊 ヤア、かゝさま。

采女 お律どの。面目ない此身の上。(ト振切る。)

ば、イヤ、殺しませぬぞ。

采女 イヤ、放して。(ト四人色々立廻りあつて、無理にお菊をお律、采女は留めて、)

ば、コレ、必ず逸まるまい、お二人。

お律 お菊さま、マア、待つて下さんせ。

お菊 イエ、離して下さんせ。

采女 存へ居れば畜生。それぢやによつて。(ト又行かうとするを、「ハテ」と無理に留めて)

ば、コレお二人さま、畜生ではござりませぬ。すりや、死ぬるには及びますまいがな。

采女 現在同胞、言ひかはせしに

お菊 畜生でないとはえ。

小次 ぬかすまい、五右衛門の弟。われに繩かけ、褒美にする。

ト掛かるを、順喜観ずつと出て、小次兵衛を引廻し、ほんど當てる。

お菊 ヤア、八田平どの。

喜観 サア、采女さま、五右衛門殿に一味して、俱に天を戴かぬ、御無念晴らす所存はないか。

お菊 そんなら、お前は。

采女 兄者人の一味。

喜観 大明の順喜観。サア、采女どの、兄に一味か。但しは敵對ふ御所存か。

采女 どちらへどう廻つても、所詮、存へられぬ此采女。いつそ。

ト腹切らうとする。お律、お菊留めて

お律 コレ、待つた。

お菊 何てお前は死なしやんす。

采女 サア、實父と兄とへ孝を立つれば、養父と主人へは不忠不孝。ぢやによつて。

ト又死なうとする。奥より高景出て

高景 采女、犬死して名を穢すか。

采女 ぢやというて。

高景 急ぐ所であるまいがな。

喜観 早川高景、珍しい對面。

高景 そちや八田平。本名は大明の順喜観。

喜観 五右衛門殿に合體せし上は、龍に翅の勢ひ、追ッ附けそちにも泡吹かす。サア、采女どの、一味するか。

高景 采女、養父の家を立てずば、武士が立つまい。

お律 采女さま、お前の思案は。

喜観 敵と身方と、

高景 忠と不忠と、

お律 生死の境。

皆々 サア、

お菊 ちやつとよい思案して、下さんせいナ。

采女 すりや、死ぬるにも死なれず。ホイ。(ト小次兵衛起き上り、かゝるを、順喜観引き廻し)

小次 ぬかすまい、五右衛門の弟。われに繩かけ、褒美にする。

ト掛かるを、順喜観ずつと出て、小次兵衛を引廻し、ぼんと當てる。

お菊 ヤア、八田平どの。

喜親 サア、采女さま、五右衛門殿に一味して、俱に天を戴かぬ、御無念晴らす所存はないか。

お菊 そんなら、お前は。

采女 兄者人の一味。

喜親 大明の順喜観。サア、采女どの、兄に一味か。但しは敵對ふ御所存か。

采女 どちらへどう廻つても、所詮、存へられぬ此采女。いつそ。

ト腹切らうとする。お律、お菊留めて

お律 コレ、待つた。

お菊 何てお前は死なしやんす。

采女 サア、實父と兄とへ孝を立つれば、養父と主人へは不忠不孝。ぢやによつて。

ト又死なうとする。奥より高景出て

高景 采女、犬死して名を穢すか。

采女 ぢやというて。

高景 急ぐ所であるまいがな。

喜親 早川高景、珍しい對面。

高景 そちや八田平。本名は大明の順喜観。

喜親 五右衛門殿に合體せし上は、龍に翅の勢ひ、追ッ附けそちにも泡吹かす。サア、采女どの、一味するか。

高景 采女、養父の家を立てずば、武士が立つまい。

お律 采女さま、お前の思案は。

喜親 敵と身方と、

高景 忠と不忠と、

お律 生死の境。

皆々 サア、

お菊 ちやつとよい思案して、下さんせいナ。

采女 すりや、死ぬるにも死なれず。ホイ。(ト小次兵衛起き上り、かゝるを、順喜観引き廻し)

喜親 早川高景、謀叛の手始め、只一打ち。(ト種ヶ島を構へる。)
高景 小癩な事を。

ト壘を蹴上げる。下より下さいぬつと出て、高景に掛かる。突き廻す。順喜親ボンと種ヶ島放す。ト下
ざいにて受ける。采女に小次兵衛かゝるを引き廻し、順喜親、小次兵衛をボント切る。

采女 是非此身は。

ト采女死なうとするを、お律留めて、切り穴へ落す。「これは」とお菊も續いて、飛び込む。

喜親 こりや采女どのを。

お律 此場を無事に歸すのは、こちらの人の由縁だけ。

喜親 シテ、此下屋の抜け道は。

お律 桃山の御殿まで切り抜きあれば、氣遣ひはござんせぬ。

ト奥にてはたくと、家を毀つしかけ。壁、障子一様に碎ける。ト奥にて捕り手大勢馳せ違ふことある。

お律、順喜親、見て驚き。

喜親 ヤア、あれは。

高景 石川五右衛門を搦め捕る組み子の面々。

お律 すりや、こちらの人を

高景 高景が生捕つて、久吉公へ手柄にする。

喜親 此上は、順喜親が加勢をして皆殺し。(トかけ込まうとする。)

高景 ソリヤ。(ト聲かける。ト橋懸りより組み子四人、ばらくと出て)

侍 腕まはせ。

ト順喜親を取巻く。「どッこい」と見得になる。ト奥よりはたくとにて、単人走り出て

高景 吉川単人。シテ、五右衛門を召捕つたか。

単人 ハッ、組み子の面々番手を定め、家内は勿論、天井、簀の子も引きはなし、詮義をいたしますれ
ど、石川五右衛門、風を喰ひしか、かいくれ行くへが知れませぬ。

お律 すりや、こちらの人は

喜親 行くへが知れぬとは。エ、かたじけない。

高景 知れぬというて高て破ら家。又、八方を取り圍めば、蟻の這ひ出る所もない。裏は一方、廣見の
藪。人数を分けて探せ。

単人 ハッ、畏りました。(ト奥へ走りはひる。)

高景 組み子共、順喜觀を搦め捕れ。

喜觀 わるく寄つたら、撫て切りぢやぞ。

捕手 うぬ。

トたてに成つて、順喜觀皆々を橋懸へ追つてはひる。此うち奥にて「ありや」と聲して、提灯、松明にて組み子馳せ違ふ。お律も奥へはひる。こなしあつて

高親 此上は五右衛門を。(ト往かうとする。)

惣右 待つた。(ト惣右衛門奥より出て)

高景 待てとは。

惣右 最前の捕り繩の御返事、五右衛門に繩かけてお渡し申す。

高景 惣右衛門、見事、其方が。

惣右 鞆に繩かけるは、斯う。(ト舌肌脱ぐ。切腹して居る。)

高景 フウ。汝が最期は鞆が代り、此場を見逃しくれとの頼みか。

惣右 いかにも、わが本名、竹地が家來、海田新五、謀叛人の餘類。わが首取つて此場の功を立て、鞆の命を。

高景 ハテ、敵ながらも天晴れの忠臣。(ト奥より準人、捕り手皆々出て)

準人 いかやうに詮議いたしても、五右衛門が在所相知れません。

高景 すりや、取り逃したか。

惣右 エ、かたじけない、サア。(ト首を差し延べる。高景首をぼんと切る。)

準人 シテ、五右衛門は。

ト高景思案して、片木を取つて来て、惣右衛門が血汐にて書き附け、花道際へ、制札のやうにして立てる。

其制札は。

高景 「早川高景、汝が實父、此村大炊之助並びに舅、海田新五を、手に掛くる者也。舅の敵無念に思は、何時なりとも勝負を遂ぐるもの也。早川高景。」

準人 すりや、此高札にて

高景 五右衛門が行くへも知れん。

ト高景、準人こなしあつて向うへはひる。舞臺しんとなり、五右衛門、冠、裝束にて、こなしある、トお律、順喜觀も橋懸かりより走り出て、兩人、五右衛門を見て、ト合ひ方。

お律 ヤア、こちの人。
喜親 御主人。

五右 高景が計略にて、われを召捕らんと、百萬騎を以て取巻くとも、物の數とも思はぬ某。女房は
術を以つて桃山へ入り込め。まつた順喜親は、洛中の手下を誦らひ、聚樂の御所へ忍び入り、久
秋、御臺をぶち殺せ。

お律 そんならわたしは桃山へ。

喜親 某は聚樂の御所へ。

五右 兩人共に、ぬかるな。

お律 ハア。

お律 シテ、お前は。

五右 われはこれより内裏へ忍び、日の御座へ近附き、三種の神器を奪ひ取る。わが事は氣遣はずと、
兩人共に、合點かな。

喜親 すりやわれは

五右 早く行け。

二人 ハツ。

ト順喜親、お律こなしあつて、橋懸りへ走りはひる。五右衛門いろ／＼あつて、最前の片木に書きし高
札を讀み下し

五右 役にも立たぬ、ほててんがう。(ト取つて懐へ入れ) もはや子の刻、陰の兆し、内裏へ忍ぶ刻限。

トしづ／＼花道の中程まで行く。トどんちやん、静かなる遠攻めになる。五右衛門じり／＼あとへ戻り

思ひ掛けなき貝、鉦、太鼓。(ト空をきつと見て) 今宵の星の分野。(ト指を繰り) 虚空、室壁は南方の

宿星、井鬼、柳星、張翼軫は北に手拱す。(ト此うち空を見い／＼、じり／＼と廻り) 火星、金星を尅

するは……すりや高景が予を出し抜き、搦め取らんと計るか。ハテ、しほらしい奴ぢやナア。

トこなしある。此うち花道より単人、軍藏、橋懸りより部屋中残らずばら／＼と出て、五右衛門を取巻く。

皆々 やらぬぞ。

ト五右衛門きつと見て、手裏劍を看板へはつと打つ、舞臺へ一面の綱がゝる。

これは。

ト五右衛門こなしあつて、よろしく

幕

五つ目大切

桃山御殿花見の場
同庭前抜井戸の場
奥殿袖判讓りの場

登場人名

腰元、あゆ葉。同あげ葉。其他大勢。大明太子。黒崎彌藤二。小西妹、千束。おつう姫。傾城、九重。篠井熊太郎。傾城、花橘。御臺、菌生の方。お律。早川高景。石川五右衛門。本名、惟任左馬五郎。小西女房、唐織。高景女房、岩浪。金吾久秋。順喜觀、本名、加藤虎之助。眞柴久吉。瀬川采女。下さい二人。侍ひ大勢。捕り手大勢。

造り物、見付き、一面の網代垣。方々に桃の幹花盛り、随分見事に。舞臺前、井戸に井筒掛け、すべて桃山の御殿、坪の内の模様。方々に毛氈掛け、床几直しある。幕あく。ト三味線入りの壬生獅子になる。ト向うよりおつう姫、衣裳、襦、病ひ鉢巻にて、千束、あゆ葉、あげ葉、其他腰元大勢付き出る。皆々本舞臺へ来る。

皆々 申し、お姫さま、此前裁の桃の花盛り御覽遊ばして、ちと浮きくなされませいなア。
千束 ほんに、いっぞやかから、お姫さまのお物案じ、お氣もじも勝れぬ様子。けふはちつとお慰みの爲、岩浪さまのお勧めによつて、此前裁の桃の花盛りを御覽に入れんと、わたしらまでお供いたしました

に、やつぱりお勝れなさらぬ様子。申し、岩浪さま、こりやどうしたら、ようござりませうぞいなア。

岩浪 サア、お姫さまの御病氣は、只うつらくと物思ひ、父君久吉公にも、めてたう御凱陣遊ばしたれば、夫高景どのに勧めて、お姫様のお願ひの叶ふやうにと、思つて居りまするわいなア。
あげ お姫さまのおむづかりで、共にわたしらまでも物案じ、世上は春ても心は秋の夕暮れ、どこやらが物淋しうござりまするわいなア。

あゆ 申し、お姫さま、其やうにお案じなさらすと、花でも御覽じて、お心をお慰めなされませいなア。

トおつう姫、始終物案じのこなし。

皆々 申し、お姫さま、やつぱりお心は勝れませぬかえ。

つう 忍ぶれど、色に出にけりわが戀ひは、物や思ふと人のとふまで。みづからをいさめんと、岩浪、千束、皆の志しは嬉しいけれど、存へ居ても、所詮浮世に樂しみのない自ら、いつそ死にたうござるわいの。

岩浪 また其やうな事を御意遊ばす。併し、お道理でもあり、何ぼ、四海の主久吉公の姫君でも、任せ